

70

創立70周年記念史

2006年～2015年の日科技連

一般財団法人 日本科学技術連盟

ご挨拶

創立70周年を期して



一般財団法人 日本科学技術連盟
理事長 佐々木 眞一

お蔭様で、一般財団法人日本科学技術連盟は、2016年5月1日をもって創立70周年を迎えます。これはひとえに、当財団を支えてくださった賛助会員をはじめ、多くの方々の温かいご支援の賜物であり、深く感謝申し上げます。

当財団は、1946年の創立以来70年にわたり、産業界への経営管理技術（TQMなど）の普及を中核として、品質を支える人づくりを中心とした様々な事業を展開し、戦後の日本の品質管理の普及と発展に努めてまいりました。

戦争により荒廃、混迷する日本で、“安かろう・悪かろう”の代名詞と言われ、世界水準を大きく下回っていた日本製品が、品質管理の普及・発展とともに劇的な品質向上を遂げ、日本製品を国際的な競争力のあるものとしたばかりでなく、品質に関して日本を世界の指導的な立場にまで高めました。戦後復興を果たし高度成長の時代、長く続いた低成長時代、そして昨今のグローバルな競争時代に至るまで、日本の産業は様々な課題に直面し、これに対応してまいりました。

この10年を振り返りますと、世界金融危機（リーマンショック）、東日本大震災、国際的な地域紛争の激化など、企業を取り巻く経営環境は一層厳しさを増した不確実性の高い時代でありました。こうした時代においても、わが国の企業は質の高い製品やサービス、強い現場力、全員参加による継続的改善といった日本的ブランドの強みを維持し、企業の社会的責任や体質改善、顧客価値の創造、人材育成など品質経営の基盤づくりを地道に続けてきました。

現代の社会においては、研究や技術の急速な進歩により、企業・組織が生み出す製品やサービスはますます高度化、多様化しています。失われた20年の間に急速に進んだグローバル化への対応、技術力と経済力をつけてきた新興国の急迫、ビッグデータやIoTなどデジタル化への対応など、スピード感を持った対応が必要となる経営課題が山積しています。

経営環境の変化の速度が一段と高まる中、わが国の産業界が、今後も世界に誇る高品質の製品とサービスを向上し続けるためにも、技術の革新に取り組み、時代の要求する新製品開発、さらには安全・安心、環境への取り組みなど、果敢に変革に挑戦し、世界で競争力を発揮していくことが望まれるとともに、品質管理レベルの格段のブレークスルーが必須です。

日科技連は、70周年の節目にあたり、わが国の強みである「品質」を原点とする経営にさらに磨きをかけ、品質経営のマネジメント強化と人材の育成に寄与すべく邁進し、さらに産業界や社会の発展に役立つ事業に積極的に取り組んでまいります。

ご挨拶

日科技連 その後の10年



一般財団法人 日本科学技術連盟
専務理事・事務局長 小大塚 一郎

日科技連は、お陰をもちまして本年5月に、創立70周年を迎えます。

これも偏に、永年当財団の事業にご賛同いただきてまいりました賛助会員各社のご支援ご協力の賜物であり、さらには多くの産学の専門家、実務家のご協力によるものであります。ここに心から厚く御礼を申し上げます。

ご高承のとおり、“日科技連の歴史は日本の品質管理の歴史である”とまで言われているほど、わが国の品質管理活動に関与、推進に努めてまいりました。その始まりは1940年代に遡りますが、大きな転換期は1950年代かと思います。戦後のわが国の復興のために、米国の統計学者デミング博士を招聘し、産業界に統計的品質管理の有用性を示し、その普及のための事業を推進することから始まりました。その後、デミング賞、QCサークルの展開、そしてTQCからTQMへと、品質を経営の中核とした品質経営を実践する多くの企業・組織のたゆまぬ努力が、二度にわたるオイルショックやバブル崩壊後の日本経済を救い、品質立国への途を開き、世界の製品品質のリーダーシップをとるまでに至りました。日本ブランドの構築に大きな貢献をしてきたことは万人の認めることかと思えます。

直近のこの10年を振り返りますと、複雑化と多様化が一層進み、企業を取り巻く経営環境は大変厳しいものがあり、グローバルな視野がさらに求められております。日本企業がこれまでも増して高い国際競争力を維持していくためには、イノベーションを推し進めていくことが最重要課題かと思えます。

残念ながら、わが国企業にも、品質、安全・安心に関わる問題や不祥事が見られます。これらは、取りも直さず、継続的な品質教育の不徹底さに起因しているところが大きいということと言わざるを得ません。イノベーションを促進するためには、やはり、人材育成が最大の課題です。

日科技連は、今後とも、産・官・学のご協力を仰ぎ、わが国の産業界の発展に寄与すべく、TQMを中核とした経営管理技術の普及・推進に貢献いたしたいと考えております。今後とも関係者の皆様の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

日科技連役員の変遷 (2005年6月～2016年1月)

2016年1月1日現在

●現役員 *常勤

[会長]

| | | | |
|-------|--------|---------|---------|
| 第7代 | 奥田 碩 | 2004年3月 | 2006年6月 |
| 第8代 | 御手洗富士夫 | 2006年6月 | 2010年6月 |
| 第9代 | 米倉 弘昌 | 2010年6月 | 2012年3月 |
| ●第10代 | 坂根 正弘 | 2012年4月 | |

[理事長]

| | | | |
|-------|--------|---------|----------|
| 第11代 | 米山 高範 | 2004年6月 | 2005年12月 |
| 第12代 | 高橋 朗 | 2006年1月 | 2006年7月 |
| 第13代 | 浜中 順一 | 2006年8月 | 2009年6月 |
| 第14代 | 蛇川 忠暉 | 2009年6月 | 2014年6月 |
| ●第15代 | 佐々木 眞一 | 2014年6月 | |

[専務理事]

| | | | |
|---------|---------|---------|-------|
| 三田 征史 | 2004年6月 | 2013年7月 | *事務局長 |
| ●小大塚 一郎 | 2013年8月 | | *事務局長 |

[理事] (就任/退任)

| | |
|--------------------------|-------------------------|
| 米山 高範 (1995年6月/2012年3月) | 中村 満義 (2007年6月/2012年3月) |
| 平野 拓也 (1999年6月/2007年6月) | 蛇川 忠暉 (2009年6月/2014年6月) |
| 前田 又兵衛 (1999年6月/2007年6月) | ●小大塚 一郎* (2009年6月) |
| 吉川 弘之 (1999年6月/2007年6月) | 齊藤 莊藏 (2009年6月/2010年6月) |
| ●狩野 紀昭 (2000年6月) | 米倉 弘昌 (2010年6月/2012年3月) |
| 高橋 朗 (2000年6月/2006年7月) | 北野 昌宏 (2010年6月/2012年3月) |
| 中島 邦雄 (2000年6月/2014年6月) | 岡本 一雄 (2012年4月/2014年6月) |
| 三田 征史* (2001年6月/2013年7月) | 押味 至一 (2012年4月/2013年6月) |
| 奥田 碩 (2004年3月/2006年6月) | ●塩原 知道 (2012年6月) |
| 三上 忠男* (2005年6月/2007年6月) | ●小泉 博義 (2013年6月) |
| 山岡 建夫 (2005年6月/2014年6月) | ●小野寺 将人* (2013年11月) |
| 御手洗富士夫 (2006年6月/2010年6月) | ●大畑 丞* (2014年6月) |
| 浜中 順一 (2006年7月/2009年6月) | ●佐々木 眞一 (2014年6月) |
| 岡部 弘 (2007年6月/2012年3月) | ●照井 恵光 (2014年6月) |
| ●坂根 正弘 (2007年6月) | ●中島 宣彦* (2014年6月) |
| 中村 道治 (2007年6月/2009年6月) | ●町野 利道 (2014年6月) |

[監事]

| | |
|-------------------------|------------------------|
| 前田 光治 (1992年2月/2007年6月) | 宮城 勉 (2009年6月/2015年6月) |
| 藤井 昌典 (1995年6月/2009年6月) | ●家氏 信康 (2015年6月) |
| ●柘植 綾夫 (2007年6月) | |

日科技連について

品質を支える人づくりを中心に 産業界の品質経営実現に向けた様々な事業を展開

1946年の創立以来、科学技術の進歩・発展をはかるために必要な諸活動を通じて、産業界に寄与することを基本方針とし、これを実現するために調査・研究・開発、大会・シンポジウム、教育訓練、国際交流、QCサークル活動（小集団改善活動）の全国的普及、技術相談および広報・出版などの活動を通じて、科学的な経営管理技術の普及・進歩・発展に努めている。

特に、経営管理技術、「品質管理」を中心とする各種の事業は、国内はもとより世界各国から注目を集め、高い評価を得ている。日科技連のコアである教育／セミナー事業をはじめ、デミング賞、日本品質奨励賞などの各種表彰事業、日本経済新聞社との協賛による「企業の品質経営度調査」など、企業の品質力向上に役立つ事業を幅広く提供している。

また、ISO 9000（JIS Q 9000）シリーズに基づく品質マネジメントシステムに関する審査員研修、および、品質、環境マネジメントシステムをはじめ各種審査登録業務を展開している。近年、ISMS 情報セキュリティマネジメントシステムやOHSMS 労働安全衛生マネジメントシステム、FSMS 食品安全マネジメントシステムなどへの拡大も積極的に進めている。



本部事務所ロビー



東高円寺ビル



大阪事務所・新藤田ビル

[本 部] 〒163-0704 東京都新宿区西新宿 2-7-1
小田急第一生命ビル 4 階

[東高円寺ビル] 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 1-2-1

[大阪事務所] 〒530-0003 大阪市北区堂島 2-4-27
新藤田ビル 11 階

2006年

5月



第1回 Global Summit
世界各国の品質推進団体が集う場である Global Summit。
第1回開催時の WAQ 各団体の代表者。

5月



日本科学技術連盟60周年
1997年に発行した『創立50年史』のその後の10年をまとめた『創立60周年史』を発行。

6月



第36回 信頼性・安全性シンポジウム
「信頼性のフロンティア」をテーマに日本科学未来館（東京・江東区）で開催。

11月



2006年度デミング賞本賞受賞
飯塚 悦功氏（東京大学大学院 教授）

2007年

9月



第26回ソフトウェア品質シンポジウム
SPCからSQiPへと改称した最初のシンポジウムを東洋大学・白山キャンパス（東京・文京区）で開催。

11月



信頼性工学の普及と発展のために、信頼性・品質保証業務に携わる技術者の方々を対象にした「信頼性技術者資格認定制度」をスタート。11月に第1回資格認定試験を実施。

11月



「ソフトウェア品質知識体系ガイド -SQuBOK® Guide-」発行
2008年度の日経品質管理文献賞受賞。

11月



2007年度デミング賞本賞受賞
牛久保 雅美氏
(サンデン(株) 代表取締役会長)

11月



第85回品質管理シンポジウム
「世界をリードする品質立国日本」をテーマに、箱根ホテル小涌園で開催。



東北大学 井上 明久総長



2008年

5月



第5000回記念QCサークル全国大会と第1回事務・販売・サービス部門全日本選抜QCサークル大会を日本青年館(東京・新宿区)で併催。



11月



第50回記念QCサークル洋上大学

1971年に第1回を開催し、2008年で記念すべき第50回を迎えた。この年は、上海、シンガポールルートに分かれ、中国・上海から「ふじ丸」にて船内研修を実施。

11月



2008年度デミング賞本賞受賞
坂根 正弘氏(株)小松製作所 代表取締役会長)

2009年

10月



第1回知識構造化シンポジウム

「SSMが実現する新しいトラブル予測・未然防止の世界」をテーマに日科技連・本部にて開催。幅広い業種から、満席となる191名が参加。

11月



第50回品質月間

記念すべき第50回は「持続可能な社会をつくる品質～今、あなたにとって品質は?～」をテーマに実施。



11月



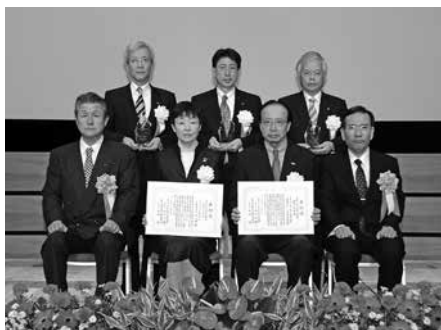
2009年度デミング賞本賞受賞

長田 洋氏（東京工業大学大学院 教授）

11月



11月



企業の品質経営度調査 優秀企業賞 第1回表彰式
品質経営トップマネジメント大会内にて経団連会館（東京・千代田区）で実施。



第5回企業の品質経営度調査 報告講演会
総合ランキング上位企業による講演などを実施。

2010年

3月



臨床試験セミナー統計手法専門コース創立20周年記念行事としてセミナー、シンポジウムを有明ホテル（東京・江東区）で開催。

7月



第40回信頼性・保全性シンポジウム「環境と信頼性・安全性の両立に向けて」をテーマに日本教育会館（東京・千代田区）で実施。

8月

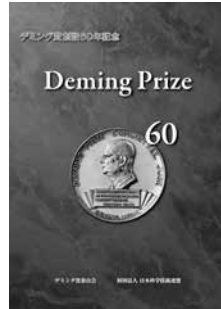


eラーニング「QC（品質管理）の基本と活用」開講QC的なセンスを身につける教材として手軽に学べるよう、新入社員やQC初学者向けに制作。

11月



デミング賞創設60年記念講演会
2010年度デミング賞授賞行事にあわせて経団連会館で実施。60年記念史を発行。



11月



2010年度デミング賞本賞受賞
圓川 隆夫氏（東京工業大学大学院 教授）

2011年

7月

『日経ものづくり』でお馴染みの日経BP社とのタイアップにより、緊急セミナー「迫りくる法改正、変わる安全設計～メーカー責任を果たすリスクアセスメントとは～」を東京と大阪で開催。



9月



国際QCサークル大会 (ICQCC'11-Yokohama)
日本では7回目となる国際QCサークル大会をパシフィコ横浜（神奈川・横浜市）で開催。

11月



第41回全日本選抜QCサークル大会（小集団改善活動）
長年利用していた日比谷公会堂から東京ビッグサイト（東京・江東区）に会場を移して開催。

11月



2011年度デミング賞本賞受賞
桜井 正光氏（株リコー 取締役会長執行役員）

12月



月刊「クオリティマネジメント」最終号
冊子としては通巻805号で幕を閉じ、新たな媒体での発行の準備に入る。

2012年

4月



QCサークル誕生50周年
1962年『現場とQC』誌で石川馨先生が
QCサークルの結成を呼びかけてから50年。

4月



月刊『クオリティマネジメント』を
Webジャーナル『クオリティマネ
ジメント』として公開スタート。

9月



第18回品質機能展開国際シンポジウム (ISQFD'12-Tokyo)
日本では4回目となるISQFDを日科技連・本部にて開催。
講演3本に加え、2日間で24件の発表が行われた。

11月



2012年度デミング賞本賞受賞
中尾 眞氏 (㈱ジーシー 代表取締役社長)

12月



第95回品質管理シンポジウム
「企業が飛躍するための新商品創造一心ときめく、
ワクワクした商品の継続的な提供」をテーマに、
箱根ホテル小涌園にて開催。



田中 千秋氏 (東レ㈱)



武藤 直人氏 (富士重工業㈱)

2013年

5月



QCサークル石川馨賞奨励賞

2013年に創設した奨励賞を含めた石川馨賞の授賞式を第5480回QCサークル全国大会（小集団改善活動）-札幌-にて実施。

5月



道路交通安全特別講演会

ISO39001 審査登録事業を1月にスタートしたISO審査登録センターによる講演会を日科技連・本部にて開催。公共性の高い内容で会場は満席となった。

10月



QCサークル活動（小集団改善活動）

優良企業・事業所表彰

2013年に創設し、1回目は7支部の推薦により12企業・事業所の表彰が決定。10月から各地の行事にて表彰式が行われた。

10月

第55回QCサークルASEAN訪問・洋上研修
QCサークル洋上大学から改称し、経済成長著しいASEAN地域、タイ、マレーシア、シンガポールを訪問。



シンガポールでの様子



スーパースターヴァーゴ

11月



2013年度デミング賞本賞受賞

岩崎 日出男氏（近畿大学名誉教授）

2014年

3月



ISO 39001 (道路交通安全マネジメントシステム) 認証シンボル・マーク作成
 認証組織向けのシンボル・マークを日本デザイン専門学校の学生を対象に募集し、
 木村拓実さんのデザインが採用された。

10月

4月



eラーニング「QC (品質管理) の基本と活用」(英語版) 開講
 外国人社員向け教材への要望により、2010年に開講した同教材
 の英語版をスタート。



品質国際会議 (ICQ'14-Tokyo)

日本では6回目となる品質国際会議を京王プラザホテル (東京・新宿区) で開催。

11月



2014年度デミング賞本賞受賞
 鈴木 和幸氏 (電気通信大学大学院 教授)

12月



第8回企業の品質経営度調査 報告講演会
 総合ランキング上位企業による講演と、パネル討論
 では高く評価した品質経営のベストプラクティスを
 紹介。

2015年

6月



第100回記念品質管理シンポジウム

記念すべき第100回は「日本の成長戦略を支える品質管理の役割～これから求められる価値ある品質を考える～」をテーマに箱根ホテル小涌園で開催。



100QCS 担当組織委員の
日科技連 佐々木 眞一理事長



特別講話を行った
豊田 章一郎氏（トヨタ自動車(株) 名誉会長）

9月



石川馨先生生誕100年記念国際シンポジウム

石川馨先生生誕100年記念事業の一環として、東京大学・伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホールで開催。国内外から266名の参加があった。

11月



2015年度デミング賞本賞受賞
蛇川 忠暉氏
(トヨタ自動車(株) 顧問/日野自動車(株) 特任顧問)

目次

| | |
|--------------------|-------|
| ■ ご挨拶 | [1] |
| ■ 日科技連役員の変遷 | [3] |
| ■ 日科技連について | [4] |
| ■ 写真で綴る2006年～2015年 | [5] |

第1部 2006年～2015年のトピックス

| | |
|-----------------------------------|----|
| 第100回記念 品質管理シンポジウムの開催 | 2 |
| デミング賞創設60年記念 | 4 |
| QCサークル活動（小集団改善活動）誕生50周年 | 5 |
| 品質国際会議の開催 | 6 |
| 国際QCサークル大会の開催 | 8 |
| 品質機能展開国際シンポジウムの開催 | 10 |
| 品質管理セミナーベーシックコース60周年記念 | 12 |
| 品質管理検定を日本規格協会と共催により実施 | 13 |
| 信頼性技術者資格認定制度の創設 | 14 |
| ソフトウェア品質技術者資格認定制度の創設 | 15 |
| ISO 審査登録センター J-club 設立 | 16 |
| ISO 研修事業部 審査員研修事業15周年 | 17 |
| 石川 馨先生 生誕100年記念事業 | 18 |
| 公益制度改革による一般財団法人への移行／本部ビル、大阪事務所の移転 | 20 |

第2部 新規・主要事業の動向

1 TQM・品質管理

| | |
|-----------------------------------|----|
| 1 品質管理検定 | 24 |
| 2 業務効率向上のための論理的伝達力マスターセミナー | 24 |
| 3 革新的課題解決法セミナー | 25 |
| 4 実践問題解決セミナーマネージャーコース | 25 |
| 5 品質管理セミナー部課長コース | 25 |
| 6 失敗学と創造学セミナー | 26 |
| 7 自動車部品メーカーの自律型品質保証・品質管理セミナー | 26 |
| 8 技術力で差をつけるための実験計画法実践セミナー | 27 |
| 9 実験計画法セミナー（大阪クラス） | 27 |
| 10 モノづくりに関する問題解決のためのデータサイエンス入門コース | 28 |
| 11 マハラノビス・タグチ（MT）システム入門コース | 28 |
| 12 eラーニング QC（品質管理）の基本と活用 | 28 |

| | | |
|----|-----------------|----|
| 13 | 次世代TQMの構築研究委員会 | 29 |
| 14 | 品質コストマネジメント研究部会 | 30 |
| 15 | SQC実践研究会 | 30 |
| 16 | 知識構造化シンポジウム | 30 |
| 17 | クオリティフォーラム | 31 |
| 18 | 品質経営トップマネジメント大会 | 31 |

2 信頼性・製品安全

| | | |
|----|--|----|
| 1 | 設計・開発における未然防止手法セミナー | 33 |
| 2 | 設計・開発における未然防止手法デザインレビューレビューア育成セミナー | 33 |
| 3 | 設計・開発における品質ばらつき抑制手法セミナー | 33 |
| 4 | 設計・開発ヒューマンエラー防止セミナー | 33 |
| 5 | 信頼性管理・信頼性設計入門コース | 34 |
| 6 | 信頼性試験・故障物理実践コース | 34 |
| 7 | 実践！信頼性・品質技術研究会 | 34 |
| 8 | 「R-Map」を商標登録 | 34 |
| 9 | 特別セミナー「迫りくる法改正，変わる安全設計 メーカー責任を果たすリスクアセスメントとは」 | 34 |
| 10 | 消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース | 35 |
| 11 | はじめてのR-Map半日コース | 35 |
| 12 | R-Mapを活用したリスクアセスメント1日コース | 35 |
| 13 | 流通段階・販売後のR-Map活用コース | 35 |
| 14 | 開発段階のR-Map活用コース | 35 |
| 15 | R-Map入門コース | 36 |
| 16 | R-Map活用コース：市場措置判断 | 36 |
| 17 | R-Map活用コース：リスクアセスメント | 36 |
| 18 | R-Map実践研究会 | 37 |
| 19 | 信頼性通信教育講座 | 37 |
| 20 | 信頼性・保安全性シンポジウム | 37 |

3 ソフトウェア品質

| | | |
|---|-----------------------------------|----|
| 1 | SPCからSQiPへの呼称変更 | 38 |
| 2 | ソフトウェア品質知識体系ガイド（SQiBOK® Guide）の発行 | 38 |
| 3 | ソフトウェア品質管理セミナー，実践セミナー | 39 |
| 4 | ソフトウェア品質シンポジウム（SQiPシンポジウム） | 39 |
| 5 | ソフトウェア品質管理研究会（SQiP研究会） | 40 |
| 6 | ソフトウェア品質保証部長の会，ソフトウェア品質保証責任者の会の設立 | 40 |
| 7 | 世界ソフトウェア品質会議 | 40 |
| 8 | ASQNの設立 | 41 |

| | | |
|----|-------------------|----|
| 9 | ソフトウェア品質国際ワークショップ | 41 |
| 10 | SQiPポータルサイトの設置 | 41 |

4 医薬統計・医薬関連

| | | |
|---|------------------------------|----|
| 1 | 臨床試験セミナー統計手法専門コース 20周年記念行事 | 42 |
| 2 | 医薬統計・医薬関連セミナー | 42 |
| 3 | 薬剤疫学セミナー | 43 |
| 4 | メディカルライティング実践コース | 43 |
| 5 | 臨床試験セミナー 医薬品開発基礎コース | 43 |
| 6 | eラーニング はじめて学ぶ臨床試験のための生物統計学入門 | 43 |

5 QCサークル

| | | |
|----|---|----|
| 1 | QCサークル（小集団改善活動）実態調査 | 44 |
| 2 | QCサークル本部登録システム | 44 |
| 3 | QCサークル大会, QCサークル全国大会（小集団改善活動） | 45 |
| 4 | 第5000回記念QCサークル全国大会（小集団改善活動） | 45 |
| 5 | 全日本選抜QCサークル大会（小集団改善活動） | 46 |
| 6 | 事務・販売・サービス〔含む医療・福祉〕部門 全日本選抜QCサークル大会（小集団改善活動） | 46 |
| 7 | QCサークル活動（小集団改善活動）優良企業・事業所表彰の創設 | 46 |
| 8 | QCサークル本部幹事長賞の創設 | 47 |
| 9 | QCサークル洋上大学, QCサークルASEAN訪問・洋上研修 | 47 |
| 10 | QC手法基礎コース | 47 |
| 11 | 品質改善のための問題解決力実践コース | 47 |
| 12 | お客様へのサービス向上のための問題解決力実践コース | 48 |
| 13 | 人を育てるコーチングセミナー | 48 |
| 14 | 施策実行型QCストーリーセミナー | 48 |
| 15 | 現場力を高める「見える化」と「ムダ取り」の実践セミナー | 48 |
| 16 | なぜなぜ分析2日間実践セミナー | 48 |
| 17 | QC検定3級対応セミナー | 49 |
| 18 | 人間力・現場力を高めるワンポイント講座 | 49 |
| 19 | 現場力強化のための人為ミス未然防止セミナー | 49 |
| 20 | 問題解決・QC手法指導のインストラクター養成講座 | 49 |

6 ISO審査・登録

| | | |
|---|----------------------------|----|
| 1 | 食品安全マネジメントシステム | 50 |
| 2 | GFSI 食品安全認証スキーム | 50 |
| 3 | 情報セキュリティマネジメントシステム | 50 |
| 4 | ITサービスマネジメントシステム | 51 |
| 5 | ISO 27001とプライバシーマーク同時審査を開始 | 51 |
| 6 | 事業継続マネジメントシステム | 51 |
| 7 | ASRPがJABより認定される | 51 |
| 8 | マネジメントシステム監査員検定制度 | 51 |
| 9 | 道路交通安全マネジメントシステム | 51 |

7 ISO研修

| | | |
|---|--------------------|----|
| 1 | 品質マネジメントシステム | 52 |
| 2 | 環境マネジメントシステム | 52 |
| 3 | 情報セキュリティマネジメントシステム | 52 |
| 4 | 食品安全マネジメントシステム | 52 |
| 5 | ISO/TS 16949コース | 53 |
| 6 | 道路交通安全マネジメントシステム | 53 |
| 7 | そのほか新規セミナー | 53 |
| 8 | JRCA登録のCPD対応コース | 53 |

8 講師派遣・出張研修

| | | |
|---|------|----|
| 1 | 講師派遣 | 54 |
| 2 | 出張研修 | 54 |
| 3 | 講演会 | 54 |

9 企業の品質経営度調査

10 賞・表彰

| | | |
|---|------------------|----|
| 1 | デミング賞 | 58 |
| 2 | 日本品質奨励賞 | 60 |
| 3 | 企業の品質経営度調査 優秀企業賞 | 61 |

11 品質月間

12 国際協力

- 1 世界品質同盟による Global Summit 開催 64
- 2 協力関係に関する覚書締結 64
- 3 日科技連理事長がMIQの理事に就任 64
- 4 海外企業向け訪日セミナー 65
- 5 ベストプラクティスセミナー 65
- 6 海外企業向けTQM診断 65
- 7 海外での招待講演 65

13 広報・出版活動

- 1 Webジャーナル『クオリティマネジメント』 66
- 2 月刊誌『QCサークル』 67
- 3 日科技連賛助会員制度 68
- 4 機関紙『日科技連ニュース』 68
- 5 講演録『クオリティのひろば』 68
- 6 日科技連紹介DVD 69

第3部 70年のあゆみ

- 年表 72

第4部 資料編

- 1 デミング賞、日本品質奨励賞受賞一覧 98
- 2 主要事業参加者数の推移 99
- 3 日科技連定款 102
- 4 日科技連組織図 113

凡 例

1. 用字、用語は、原則として、常用漢字、現代仮名遣いを心掛けたがその限りでない部分もある。
2. 数字は、原則として算用数字を用いたが、表現上の関係で一部和数字も用いた。
3. 本文中の年号は、原則として西暦を用いたが、一部資料などでは、元号も併記した。
4. 個人の所属は、原則としてその行事やセミナーが行われた当時のものを掲示した。

70

第1部

2006年～2015年のトピックス





第100回記念 品質管理シンポジウムの開催

品質管理シンポジウム（以下、QCS）は1965年6月に第1回が開催され、以来、時代時代における日本の産業界が直面する課題に向け、議論を重ねてきた。そして、2015年6月5日～6日の開催で記念すべき100回目を迎えた。

QCSは、「品質管理の山を高くする」「常に上流思考」「品質管理界の動力」という3つの役割を担い開催している。

第100回記念シンポジウムは、「日本の成長戦略を支える品質管理の役割～これから求められる価値ある品質を考える～」と題し、250名もの方々にご参加いただき、盛大に開催された。

[第100回記念シンポジウム趣旨]

第1回のQCSが開催されて50年、日本企業を取り巻く環境も大きく変化してきた。そこで、100QCSでは、これまで日本経済を支えてきた品質管理の役割を振り返り、そして、今後の経済環境や日本企業の経営のあり方を模索し、企業の競争力を向上させ、成長を促すにはどのような要素が必要なのか、またその要請に応じていくためには、TQMがどのように変わっていかなくてはならないのかといった、これから求められる品質経営について議論した。

[プログラム]

■特別記念講演1

「石川馨先生 生誕100年を記念して
いわゆるTQM企業の再活性化を！
～Advanced TQMの奨め～」

狩野紀昭氏（東京理科大学名誉教授）

お客様に喜んでもらえる製品を生み出し、ひいては企業経営に今以上に役立つTQMを再構築するために、Advanced TQM（A-TQM）のコンセプト・手法が提案された。

■特別記念講演2

「企業経営と品質管理のSHINKA！」
大久保尚武氏（積水化学工業株）



箱根ホテル小涌園で行われた100QCS

品質経営（TQM）で日本を活性化できるとの提唱があった。しかし、サービス産業界での定着、中小企業での負担、地方自治体への展開といった課題もあげられた。

■特別講話

「日本の持続ある成長に向けて」

豊田章一郎氏（トヨタ自動車株）

日本が目指す国づくりは、世界から信頼・尊敬される魅力ある国づくりである。そのために環境エネルギー問題の解決、少子高齢化への対応・ダイバーシティの推進、イノベーションの創成といったことが必要であると語られた。

■トップサロン講演

「我が国製造業の現状と課題」

西垣淳子氏（経済産業省 製造産業局）

日本の製造業の現状について紹介があり、ドイツのインダストリー 4.0を参考に今後の日本の産業界のあるべき姿について、「官」の立場からの説明があった。

■特別記念講演3

「日本経済再生の課題と民間の役割」

坂根正弘氏（株小松製作所）

地方活性化に対する日本企業の取り組みとしてコマツでの事例が紹介され、その中で、ブランドマネジメントによる企業価値の向上、顧客価値の創造、経営も行政も改革の出発点は「見える化」が必要であると力強く説明された。

■特別記念講演4

「表の品質力と顧客価値創造の戦略
～これから求められる価値ある品質とは～」
圓川隆夫氏（東京工業大学名誉教授）
裏の品質力に加えて、表の品質力が大切であり、表の品質力がこれからの日本企業に求められることが説明された。表の品質力の代理指標となるCS生成メカニズム、新デミングサイクルの紹介があった。

2日間の総括として、これから求められる品質経営の姿について討論を行った。最後に、コーディネーターの長田 洋氏から、新たな顧客価値の創造方法、モノづくり以外の販売・サービス（コトづくり）でのTQM推進、グローバル化のモノづくりにおける国内・国外の役割、ビジネスモデリング、イノベーションツールとしてのIoT、TQMアプローチなどについて、まとめが述べられた。

■パネルディスカッション

「これから求められる品質経営とは」
コーディネーター：
長田 洋氏（文教大学／東京工業大学名誉教授）
パネラー：
飯塚悦功氏（東京大学名誉教授）
岩崎日出男氏（近畿大学名誉教授）
藤岡高広氏（愛知製鋼株）
田中千秋氏（東レバッテリーセパレータフィルム株）

〔これからのQCS〕

QCSは、産業界に広く品質管理・品質経営に関する今後の方向性を示す場として、企業経営に大きな影響を与えてきた。100QCS開催の時点で、賛助会員会社が87社に大幅に増加したのも、これからのQCSへの期待の表れとみられることできる。世界をリードできる日本発の品質管理が創出される場を目指していく。



特別記念講演1 狩野紀昭氏



特別記念講演2 大久保尚武氏



特別講話 豊田章一郎氏



トップサロン講演 西垣淳子氏



特別記念講演3 坂根正弘氏



特別記念講演4 圓川隆夫氏

第100回の開催にあわせて、『第100回記念史』の発行と専用Webサイトを開設した。

▶ 専用Webサイト

<http://www.juse.or.jp/qcs/>



デミング賞創設60年記念

1951年に創設されたデミング賞が2010年、創設60年を迎えた。これを記念し、60年記念史の発行、記念行事、新聞広告掲載を行った。

■ 60年記念史の発行

デミング賞創設60年を迎えて、デミング賞60年に思う、祝辞、資料・年表で構成した『60年記念史』を発行した。



▶ 60年記念史ダウンロード
<http://www.juse.or.jp/deming>

■ 記念行事

2010年度デミング賞授賞行事にあわせて、2010年11月10日、経団連会館 2階 経団連ホールにて記念行事を開催した。

第一部

[2010年度デミング賞受賞報告講演会]

デミング賞実施賞受賞組織 報告

[2010年度日本品質奨励賞授賞式]

式辞：蛇川忠暉（日科技連理事長）

選考経過報告：吉澤 正氏（日本品質奨励賞審査委員会委員長）

授賞：蛇川忠暉（前掲）

祝辞：鈴木和幸氏（日本品質管理学会会長）

受賞者挨拶：日本品質奨励賞 TQM 奨励賞受賞者、日本品質奨励賞品質革新賞受賞者

第二部

[デミング賞創設60年記念講演会]

ご挨拶：朝香鐵一氏（東京大学名誉教授）

祝辞：豊田章一郎氏（トヨタ自動車㈱名誉会長）

記念講演：

「経営とTQMーデミング賞実施賞の活用ー」
 狩野紀昭氏（東京理科大学名誉教授）



朝香鐵一氏



狩野紀昭氏



豊田章一郎氏



[2010年度デミング賞授賞式]

式辞：坂根正弘氏（デミング賞委員会委員長代行）

授賞：坂根正弘氏（前掲）、喜多恒雄氏（日本経済新聞社代表取締役社長）

祝辞：林 久美子氏（文部科学大臣政務官）

受賞者挨拶：デミング賞本賞受賞者、デミング賞実施賞受賞者

[デミング賞創設60年記念受賞記念合同祝賀パーティー]

経団連会館 4階 ダイヤモンドルーム

■ 新聞広告掲載

2010年10月26日（火）付け日本経済新聞朝刊28面に「デミング賞創設60年」の広告掲載を行った。掲載にあたり、記念行事とあわせ、受賞組織から協賛金のご協力をいただいた。



QCサークル活動（小集団改善活動）誕生50周年

“みなさんと 共に歩んだ！ QCサークル誕生50周年”

1962年に誕生したQCサークル活動（小集団改善活動）は、2012年4月に50周年を迎えた。

QCサークル活動（小集団改善活動）は、誕生以来、職場第一線での人材育成の役割を担い、企業・組織を支える活動として、わが国製品の品質向上と産業競争力向上をはかり、日本経済の発展に大きな役割を果たしてきた。

この活動を発案され、そして今日の礎を築かれた諸先輩方と、50年の長きにわたり活動を発展させ、拡大された多くの企業・組織の皆様方の賜である。

この活動が、50年にわたって継続される背景には、多くの施策があるが、主に次の3つのことを大切にしてきたことがあげられる。

(1) QCサークル活動（小集団改善活動）の基本理念

人間の能力を発揮し、無限の可能性を引き出す。人間性を尊重して、生きがいのある明るい職場をつくる。企業の体質改善・発展に寄与する。

(2) QCサークル活動（小集団改善活動）の原点

単なる改善活動ではなく、企業・組織の活性化と発展に貢献していること。また、支部・地区活動で社会や地域の発展と人材の育成に貢献していること。

(3) ボランティアの精神

企業・組織、関係者相互のボランティア精神に基づく支援と協力で支えられていること。QCサークル誕生50周年を期して、さらにQCサークルの輪を広げ、仲間を増やして活動している。

■ QCサークル活動の名称に

「小集団改善活動」を追加表記

QCサークル本部では、QCサークル活動の50周年を期して、QCサークル活動の名称に「小集団改善活動」を加え、「QCサークル活

動（小集団改善活動）」と表記することとした。

QCサークル活動（小集団改善活動）は、製造業および製造部門を中心に発展し、事務・販売・サービス部門や技術部門、そして通信、電力、鉄道、病院、福祉施設など幅広い業種、職種に普及・推進し、企業・組織の現場の改善、人材育成などに大きく貢献してきた。一方、経営環境の変化に伴い、企業・組織では、QCサークル活動のほか、プロジェクト活動、チーム活動、TPM活動など様々な活動が展開されており、独自の名称をつけて活動している企業も数多くある。

こうした点を鑑みて、QCサークル活動や企業における様々な活動を包含する名称として、また、あらゆる部門への活動の広がりや全国展開を期待して、これまでの名称に「小集団改善活動」を加えた。

50年間脈々と受け継がれてきたDNA（QCサークルの基本理念）は踏襲しながら、このQCサークル活動（小集団改善活動）を一層深化させるべく、新たな価値を求めて、次の50年の第一歩を踏み出している。

■ 50周年史の発行

関係者のメッセージをはじめ、これまでのQCサークル活動のあゆみを紹介した『QCサークル誕生50周年史』を発行した。



▶ 50周年史

<http://www.juse.or.jp/business/qc/04.html>



品質国際会議の開催 ICQ'14-Tokyo

わが国としては6度目となる品質国際会議 (International Conference on Quality : ICQ) を2014年10月19日～22日まで、東京・新宿の京王プラザホテルにおいて開催した。

これまで中心的な活動をしてきたアメリカ、ヨーロッパ、日本に加え、今回はアジアからの大きなうねりや、アフリカの動きも見え、品質管理がますますグローバルに展開されていることを示す機会となり、注目を集めた。

33カ国・地域から1,011名の参加があった。

[テーマ]

Innovation through Quality - Creating New Value for the World

(品質革新 - 世界に向けた新たな価値の創造)

[協賛]

ASQ (アメリカ品質協会), EOQ (ヨーロッパ品質機構), IAQ (国際品質アカデミー)

[後援] 国内13団体, 海外5団体

文部科学省, 国際協力機構, 日本工学会, 日本経済団体連合会ほか

[運営組織]

企画・運営は, 組織委員会 (委員長・坂根正弘氏, 副委員長・佐々木眞一氏, 狩野紀昭氏), 実行委員会 (委員長・長田 洋氏), プログラム委員会 (委員長・中條武志氏) を設けて行った。

[オープニングセッション]

基調講演

“Innovation through Quality-Creating New Value for the World”

坂根正弘氏

(組織委員長,

株小松製作所)



基調講演 坂根正弘氏

特別講演 I

“Quality Management in Siam Cement Group”

Kan Trakulhoon氏 (Siam Cement Group)

特別講演 II

“Behavioral Economic Design of the Customer Experience”

John Timmerman氏 (Gallup Inc./元ASQ会長)

[テクニカルセッション]

トップマネジメントによるパネル討論会は長田 洋氏 (文教大学) をリーダーに展開した。

一般発表 (189件) は I～Ⅷの8つのStream で実施, うちStream Ⅶ, Ⅷは小集団改善活動による改善コンペティションを実施した。Stream I～Ⅳまでが日英同時通訳, Stream V～Ⅷは英語のみで実施した。合わせて昼食時間帯をコアタイムとしたポスターセッションを設定した。

[事業所見学]

海外からの参加者を対象に実施した。() 内の数字は参加者数。

- ①日野自動車・日野工場 (12), ②日産自動車・追浜工場 (35), ③東京セキスイハイム工業・蓮田工場 (23), ④東芝・府中事業所 (19), ⑤安川電機・入間事業所 (中止)

[大会の付帯行事]

プレコンファレンスセミナー

会議開催前の10月19日に実施した。() 内の数字は参加者数。

- I. TQM Promotion and Implementation (80),
- II. Data Analysis for Innovation (76)

プログラム概要

| 日程 | 午前 | 昼食 | 午後 | 夜 |
|-----------|---------------------------------------|-------------------|---|-------------|
| 10/19 (日) | プレコンファレンスセミナー | | | ウェルカムレセプション |
| 10/20 (月) | 開会式 | ポスターセッション (コアタイム) | ・ トップマネジメントによるパネル討論会 ・ オーラル発表 (6会場) ・ 小集団改善活動事例発表 (2会場) | |
| 10/21 (火) | ・ オーラル発表 (6会場) ・ 小集団改善活動事例発表 (2会場) | ポスターセッション (コアタイム) | ・ オーラル発表 (6会場) ・ 小集団改善活動事例発表 (2会場) | フェアウェルバンケット |
| 10/22 (水) | 事業所見学 | | | |



開会式



特別講演 I
Kan Trakulhoon氏

特別講演 II John Timmerman氏



トップマネジメントによるパネル討論会



発表会場



ポスターセッション



フェアウェルバンケット



国際QCサークル大会の開催 ICQCC'11-Yokohama

2003年以来8年振り7回目の日本開催となる国際QCサークル大会（International Convention on QC Circles：ICQCC）を2011年9月11日～14日の4日間、「日本からの情報発信の場」と位置づけ、パシフィコ横浜において開催した。

本大会は、2011年3月の東日本大震災と福島第一原発事故の影響が懸念されたものの、国内からは303名、海外からは14カ国・地域から844名の参加があり、神奈川県、横浜市、日本経済新聞社などからの後援を得て開催した。

[テーマ]

Enhancing Organizational Vitality
Through Further Development of QC
Circle Activities
（QCサークル活動の更なる発展で組織の活力を高めよう）

[実行委員会委員]

◎大会委員長、○実行委員長

◎蛇川忠暉（日科技連、QCサークル本部長）

○大鶴英嗣（パナソニック株）

深澤行雄（元 サンデン株）

平井勝利（日科技連）

久野靖治（（一財）九州健康総合センター）

神 達郎（日科技連）

久保田洋志（広島工業大学）

中條武志（中央大学）

大藤 正（玉川大学）

須藤ゆかり（株コーセー）

高木美作恵（シャープ株）

瀧沢幸男（日野自動車株）

山田佳明（株ケー・シー・シー）

三田征史（日科技連）

上記各氏による大会実行委員会以外、プログラム委員会、企画・広報委員会を設置した。



開会式

[プログラム]

招待講演Ⅰ：「“内なる力”～すべては1人ひとりの意欲から始まる～」

桜井 亮氏（日産自動車株）

招待講演Ⅱ：「ものづくりアジアと日本」

酒井明彦氏（セイコーエプソン株／東北エプソン株）

[一般事例発表]

8会場において、177件の事例が発表された。

2007年から、コンペティション（審査）が正式に設けられ、海外からの発表の多くはコンペティション希望であるため、国内と海外の審査委員がペアとなり、「特別賞」「努力賞」が授与された。

[企業見学]

10社の事業所・工場の協力を得て、239名が参加した。

①日産自動車株追浜工場、②いすゞ自動車株、③KYB株相模工場、④新日本製鐵株君津製鐵所、⑤株リコー 御殿場事業所、⑥東京セキスイハイム工業株、⑦株ジーシー、⑧株ブリヂストン東京工場、⑨プレス工業株、⑩株安川電機

プログラム概要

| 日程 | 午前 | 午後 | 夜 |
|----------|------------|--------------------------|------------|
| 9/11 (日) | | 受付 | ウェルカムパーティ |
| 9/12 (月) | 開会式、招待講演 | 事例発表 (8会場) コンペティション表彰 | |
| 9/13 (火) | 事例発表 (8会場) | 事例発表 (8会場) コンペティション表彰 | フェアウェルパーティ |
| 9/14 (水) | 企業見学 | | |



招待講演Ⅰ 桜井 亮氏



招待講演Ⅱ 酒井明彦氏



コンペティション表彰



フェアウェルパーティ マレーシアによる舞



フェアウェルパーティ 集合写真



企業見学 KYB(株)相模工場

品質機能展開国際シンポジウムの開催

ISQFD'06-Tokyo ISQFD'12-Tokyo

品質機能展開国際シンポジウム (International Symposium on QFD: ISQFD) は、1995年に第1回を東京で開催して以来、アメリカ、スウェーデン、オーストラリア、ブラジル、ドイツ、メキシコ、トルコなど様々な国で開催されている。日本においては1995年の第1回、2001年の第7回、2006年の第12回、2012年の第18回の計4回の開催である。

その間、品質機能展開 (以下、QFD) は大きく発展しており、その有用性も十分に評価され、品質保証のための重要なツールとして確固たる地位を築いている。特に近年のQFDは、IT技術との融合や、環境経営への適用、ナレッジマネジメントとの連携など、様々な展開を見せ、適用範囲や効果が大きく広がっており、シンポジウムでの発表テーマにも影響を与えている。

■第12回品質機能展開国際シンポジウム (ISQFD'06-Tokyo)

第12回は2006年9月7日～9日の3日間に玉川大学(東京都町田市)にて開催した。15ヵ国・地域から159名が参加し、日本をはじめ、アメリカ、メキシコ、ドイツ、イラン、中国、タイ、前回開催国のトルコなど、世界各国の産学関係者が一堂に会した。中には毎年参加している方もおり、久しぶりの再会を喜ぶとともに、活発な情報交換や意見交換が行われていた。

シンポジウムは、1日目のチュートリアルセッション、ウェルカムカクテルに始まり、2日目には基調講演、特別講演1、テクニカルセッションとバンケット、3日目にはテクニカルセッションの続きと特別講演2を実施した。

一般募集したテクニカルセッションは、応募が52件、うち実際の発表報文が38件と例年に比べても多くの報文が集まった。テーマごとにセッションを分けた3つの会場の中から参

加者はそれぞれ関心のある会場に赴いて聴講し、活発に意見を交換していた。日本のQFD研究部会による第3世代のQFD“e-7 QFD”(evolution 7-QFD)に関する研究発表の会場は、中に入りきれないほど注目を集め、QFDの適用・連携範囲の拡大に対し、参加者の関心の高さを伺うことができた。

■第18回品質機能展開国際シンポジウム (ISQFD'12-Tokyo)

第18回は2012年9月19日～21日の3日間に日科技連・本部(東京都渋谷区)にて開催した。シンポジウムのテーマは「QFD rebirth - グローバル時代の品質創造 -」であった。前年におきた東日本大震災の影響がまだ色濃く残る中で準備し、関係各位の努力と尽力により、無事当日を迎えることができた。

国内外から112名の参加があり、福島第一原発事故の影響により、海外からの渡航者が激減する中、ドイツ、中国、香港、メキシコの4ヵ国から7名の方の参加があった。

1日目は、希望者を対象としたチュートリアルセッション、2日目には基調講演1と特別講演1・2、テクニカルセッション、夕方には海外からの参加者とQFD研究部会のメンバーによるバンケットを開催した。3日目は、テクニカルセッションと基調講演2を行った。

テクニカルセッションでは、公募による24件の発表が行われ、このうち5件が海外からの発表だった。海外からの発表は、逐次通訳により、国内の参加者から言葉の壁を気にすることなく発表を聞くことができ、活発な意見交換を行うことができたことと好評であった。

バンケットでは、出席者はお互いに顔見知りの方も多く、和気藹々とした雰囲気の中で情報交換や意見交換が行われた。

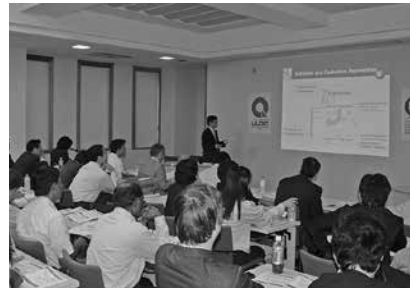
[第12回品質機能展開国際シンポジウム]

ISQFD' 06プログラム概要

| 日程 | 内容 |
|---------|---|
| 9/7 (木) | チュートリアル1・2 ウェルカムカクテル |
| 9/8 (金) | 基調講演：伊藤彰敏氏（日産車体株） 特別講演1：小原芳明氏（玉川大学） テクニカルセッション（2日間合計38件） ・ソフトウェアとシステム ・サービス産業と教育 ・製品開発とマーケティング ・他手法との連携 （感性工学とTRIZ / タグチメソッドと狩野モデル） ・ヒューマンリソースと組織 ・e7-QFD ・様々な業種における適用事例 バンケット |
| 9/9 (土) | テクニカルセッション ICQFD ミーティング 特別講演2：グレン・メーザー氏 （QFD Institute） |



基調講演 伊藤彰敏氏



発表会場

[第18回品質機能展開国際シンポジウム]

ISQFD' 12プログラム概要

| 日程 | 内容 |
|----------|--|
| 9/19 (水) | チュートリアル1・2 |
| 9/20 (木) | 基調講演：赤尾洋二氏（山形大学） 特別講演1：高梨智弘氏（T&T Partners） 特別講演2：三村乃久氏（パナソニック(株)アプライアンス社） テクニカルセッション（2日間合計24件） ・FDとTM（タグチメソッド）の融合による効果的な実験計画の検討 ・“如何に造るか” から “何を創るか” へのシフト Pre-QFDの具体的手順 ・顧客ニーズの変化に迅速に対応する品質表の提案 ほか バンケット |
| 9/21 (金) | テクニカルセッション ICQFD ミーティング 基調講演2：グレン・メーザー氏 （QFD Institute） *ビデオレターによる |



基調講演 赤尾洋二氏



発表会場

品質管理セミナーベーシックコース 60周年記念

品質管理セミナーベーシックコース（以下、BC）は、1949年9月に第1回を開講した。第1回は研究会形式で毎月2～3日ずつ開催し、期間1年間・計30日間開催した。第2回から5日ずつの6ヵ月間で開催し、2009年に開講60周年を迎えた。この間、多くの企業の多くの技術者やスタッフの方々が受講され今日に至っている。

■度重なるカリキュラムの改定

時代の変化に応じてカリキュラムの改定も頻繁に行われた。特に注目すべきは、1971年の改革と1999年、2002年の改革である。

1971年40BCの改革は、それまでの統計理論、統計的方法、管理図、抜取検査法などの区分から、手法の重複を避け融合化をはかったことである。また、この時代はコンピュータによるデータ解析が導入され、そのための知識をカリキュラムに含めることが改革の特徴と言える。

1999年の改革は、新しい統計解析手法の導入とそれまでの手法のよりわかりやすいテキストの編成に重点をおいた改善がなされた。また、実施法に関しては、ISO 9000を強く意識した編集へと改善された。

2002年からは、実務でのQC手法の考え方と活用方法・適用方法を習得し、即戦力・実践力となる人材を育成するカリキュラムとして、ケーススタディの導入の検討を開始し、2003年4月103BCから5つのケーススタディ（問題解決、工程解析、QFD、回帰分析、実験計画法）を導入した。

さらに、2006年にタグチメソッド（副題：パラメータ設計）、2008年には多変量解析法が講義科目に加わった。

■変わらぬアイデンティティー

このようなカリキュラムの改定が何度となく繰り返されてきてはいるが、BCのアイデンティティーは昔も今もなんら変わってはいない。そ

れは、「技術者・スタッフを対象として、品質管理の要素技術に関するほぼ全領域をカバーする講義、演習、討論、個別研究を通して、品質管理技術に関する深い知識と高い応用力の習得のための機会を提供する」（BCテキスト第0章「技術者・スタッフにとってのTQM」より抜粋）を基本思想としていることによる。

BCカリキュラムは、今日まで脈々と続いてきたその歴史の長さ按比例して、品質管理に関するあらゆる技術を網羅した世界に類を見ない教育内容を備えていると言える。これからも、時代の変化に対応し、いつの時代においても日本の品質管理教育のリーダーシップをとっていききたい。

■統計教育賞の受賞

2007年に日本統計学会の第3回「統計教育賞」を受賞し、2007年9月8日に日本統計学会総会にて授賞式が行われた。

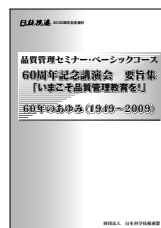
■60周年記念事業

【60周年記念講演会】

2009年8月26日、日科技連・本部にて記念講演会を開催し、120名の参加があった。翌8月27日には大阪事務所にて、70余名の参加のもと同講演会を開催した。

【60周年記念資料】

講師陣、派遣企業の関係者からの寄稿、年表・BCのあゆみ、カリキュラムと研修システムを掲載した冊子を発行し、講演会の要旨集として配付した。



60周年記念資料



統計教育賞 盾と賞状



品質管理検定を日本規格協会と 共催により実施

品質管理検定（以下、QC検定）は、品質管理に関する知識の客観的評価を目的とした制度として、2005年に一般社団法人日本品質管理学会の認定を受け、日本規格協会が主催となり創設され、2005年12月に第1回試験が実施された。2006年からは、日本科学技術連盟と日本規格協会との共催事業として実施しており、現在まで継続実施している。

■品質管理レベルにより4つの級を設定

日本の多くの企業では、品質管理活動が実施されているが、この品質管理を実施するためには、そこで働く人々の品質管理に関する意識、知識、能力（問題解決力・改善力）が不可欠である。この品質管理の能力を発揮するためには、品質管理の知識だけでなく、個人のリーダーシップ力やモチベーション、それらを引き出す組織体制などといった多くの要素が関係するが、一番の基本となるのは品質管理に関する知識であることは事実である。

また、品質管理の知識といってもどのような問題を解決するのかによって、必要となる知識は異なる。そこでQC検定では、企業においてどのような仕事をしているか（これからするか）、その仕事において必要とされる品質管理レベルはどれくらいか、そして、その品質管理レベルを実施／達成するためにはどれくらいの知識が必要であるかにより、4つの級を設定している。各級の試験範囲はQC検定センターのWebページにレベル表が公開されている。

■広がる受検者層への対応

現在、全国50以上の都市で年2回（9月と3月）の試験を実施しており、2015年9月の検定試験で第20回を迎えた。第20回までで60万人以上の方々を受検し、延べ362,927名の合格者

（1～4級合計）を輩出している。受検への関心はますます高くなってきており、年齢層、学生・社会人、業種等々、受検者層は年々広がっている。わが国のものづくり・サービスづくりにおける品質の向上に大きな貢献を果たしてきた。

近年では、品質管理学習人口の裾野の拡大に伴って、制度の更なる普及と定着をはかるため、現行制度の大枠は変更せず、新たな制度を導入するなど、検定利用者への利用価値を高める努力を続けている。

日本の産業界の国際競争力の向上や現場力の維持・改善などを今後も継続的にはかっていくためにも、引き続き多くの組織／企業・学校や個人の方々に、品質管理に取り組んでいただくことをおすすめしたい。

QC検定 各級受検対象

| 級 | 対象となる人材像 |
|------------|---|
| 1級／ 準1級 | <ul style="list-style-type: none"> ・部門横断の品質問題解決をリードできるスタッフ ・品質問題解決の指導的立場の品質技術者 |
| 2級 | <ul style="list-style-type: none"> ・自部門の品質問題解決をリードできるスタッフ ・品質にかかわる部署の管理職・スタッフ（品質管理、品質保証、研究・開発、生産、技術） |
| 3級 | <ul style="list-style-type: none"> ・業種・業態にかかわらず自分たちの職場の問題解決を行う全社員（事務、営業、サービス、生産、技術を含むすべて） ・品質管理を学ぶ大学生・高専生・高校生 |
| 4級 | <ul style="list-style-type: none"> ・初めて品質管理を学ぶ人 ・新入社員 ・社員外従業員 ・初めて品質管理を学ぶ大学生・高専生・高校生 |

- ▶ QC検定センター（日本規格協会）
<http://www.jsa.or.jp/kentei/index.html>
 各級のレベル
<http://www.jsa.or.jp/kentei/qc2.html>



信頼性技術者資格認定制度の創設

信頼性技術者資格認定制度（JCRE：JUSE Certified Reliability Engineer）は、信頼性工学の普及と発展を通じ、信頼性・品質保証業務に携わる技術者の問題解決能力向上をはかるために、日科技連が「信頼性技術者」の資格を認定し、評価登録する制度で、2007年に創設した。

信頼性全般についての基礎的知識を有し、基本的な問題の解決に有効な信頼性手法を利用することができ、信頼性の向上活動を自ら実践できるエキスパートと判定された場合に授与される資格である。資格は初級、中級、上級の3段階により構成している。

[対象者]

様々な分野の信頼性・保全性・安全性に携わる研究、設計開発、生産技術、試作、品質管理、品質保証部門の方、また将来、信頼性が求められている企業への就職を目指す大学生・大学院生の方。

[資格要件および要求される能力]

| | |
|----|--|
| 初級 | <ul style="list-style-type: none"> ・初級信頼性技術者資格認定試験に合格していること。 ・信頼性全般についての基礎的知識を有し、基本的な問題の解決に有効な信頼性手法を利用することができること。 |
| 中級 | <ul style="list-style-type: none"> ・初級信頼性技術者の資格を有していること。 ・中級信頼性技術者資格認定試験に合格していること。 ・信頼性全般についての基礎的知識に加え、信頼性の専門分野における知識と実務経験を有し、その分野の問題を自主的に解決することができ、また初級信頼性技術者レベルの指導・教育を行うことができること。 |
| 上級 | <ul style="list-style-type: none"> ・中級信頼性技術者の資格を有していること。 ・上級信頼性技術者資格認定試験に合格していること。 ・信頼性に関する実務経験が3年以上あること。 ・信頼性全般についての一般的知識に加え、信頼性の専門分野における卓越した知識と豊富な実践経験を有し、その分野の問題解決を指揮・指導することができ、また中級信頼性技術者レベルの指導・教育を行うことができること。 |

[審査]

- 初級：筆記試験（選択問題）
- 中級：書類審査および面接審査
- 上級：書類審査および面接審査

[認定]

上記の試験に合格し、「信頼性技術者資格認定委員会」における審議を経て認定される。

[運営組織]

(1)信頼性技術者資格認定委員会

信頼性技術者資格認定制度の運営に係わる責任・権限を有する。

(2)信頼性技術者資格認定委員会技術小委員会

同認定制度の実施にあたり、以下の任務を遂行する。

- ・評価基準の作成、審議および承認
- ・試験問題の作成、審議および承認
- ・信頼性技術者資格認定委員会が付託する事項

[初級信頼性技術者資格認定試験の実施]

2007年11月（東京会場、22名受験）に第1回を開催以降、年に4回（東京3回、大阪1回）実施している（2015年11月第37回）。

また、中級、上級については、応募に合せて逐次実施している。

[登録者数]

2015年8月現在、初級450名、中級25名、上級9名を認定している。



登録証 サンプル



ソフトウェア品質技術者 資格認定制度の創設

ソフトウェア品質技術者資格認定制度（JCSQE：JUSE Certified Software Quality Engineer）は、ソフトウェア品質技術の普及と発展を通じてソフトウェアの品質を向上させ、日本のソフトウェア産業の競争力を強化するとともに品質事故をなくし、安全・安心な社会を実現することを目的に、日科技連がソフトウェアの開発や運用・保守に携わる技術者に対し、「ソフトウェア品質技術者」としての力量を評価し、その結果を公式に証明する制度である。2008年に創設した。

本資格は初級、中級、上級（上級は今後設置の予定）の3段階により構成している。

[対象者]

- ・ソフトウェア開発に関わるエンジニア
- ・品質保証エンジニア・マネージャー

など、ソフトウェアの品質に携わるすべての方

[資格要件および要求される能力]

| | |
|----|--|
| 初級 | <ul style="list-style-type: none"> ・初級ソフトウェア品質技術者認定試験に合格していること。 ・ソフトウェア品質知識を知っており、知識を伝えること（開発プロジェクト内のレビューやテストなどのタスクを確実に遂行できるレベル）。 |
| 中級 | <ul style="list-style-type: none"> ・中級ソフトウェア品質技術者認定試験に合格していること。 ・ソフトウェア品質知識を詳しく理解し、現実フィールドで応用できること（プロジェクト全体のソフトウェア品質確保をリードできるレベル）。 |
| 上級 | <ul style="list-style-type: none"> ・上級ソフトウェア品質技術者認定試験に合格していること。 ・ソフトウェア品質知識を熟達しており、実務に応用できること（ソフトウェア開発組織のソフトウェア品質向上をリードできるレベル）。 |

[審査]

初級：筆記試験（選択問題）

中級：筆記試験（選択＋記述問題）

上級：論文および面接 ＊検討中

[認定]

試験に合格し、「ソフトウェア品質技術者資格運営委員会」における審議を経て認定される。

[運営組織]

(1)ソフトウェア品質技術者資格運営委員会

ソフトウェア品質技術者資格認定制度の運営に係わる責任・権限を有する。

(2)企画運営ワーキング

JCSQEの実施にあたり、以下の任務を遂行する。

- ・評価基準の作成、審議及び承認
- ・初級、中級、上級の資格試験の企画
- ・上記各資格試験のシラバスの作成
- ・運営委員会が付託する事項

(3)問題作成ワーキング

JCSQEの実施にあたり、以下の任務を遂行する。

- ・領域ごとの問題配分の作成
- ・サンプル問題の作成
- ・試験問題の作成、審議及び承認
- ・不採用問題の取り扱い・保管方法の決定
- ・運営委員会が付託する事項

[登録者数]

初級は2008年12月に第1回を開催以降、年2回（2015年11月 第15回）、中級は2010年11月に第1回を開催以降、年1回（2015年11月 第6回）、定期的実施している。

2015年8月現在、初級1,834名、中級78名を認定している。



認定証サンプル



ISO審査登録センター J-club 設立

■ J-club 設立の経緯

わが国の ISO 審査登録機関の特徴をみると、ここ数年で二極分化しているように思われる。経営に寄与する「審査の質」を追求する老舗審査機関と、「格安の審査費用」を特徴とする新規参入審査機関である。

新規参入の審査機関には、格安の審査費用をセールストークに全国的な営業展開をして、その登録件数を急増させている機関がみられるが、日科技連はそれとまったく逆の施策、「審査の質」あるいは「審査登録機関としての質」をもって競争優位に立つべく施策を講じている。

その施策の一つとして、2008年4月に設立した「J-club」がある。J-clubのJは「JUSE」を意味し、日科技連での審査登録組織がクラブメンバーとなれるコミュニティで、会員専用のWebサイトや、年4回発行する「ISO ニュース」などで情報を提供し、年に数回開催する「J-club 講演会」では、企業の事例発表など、会員相互の情報交換の場としても活用いただいている。

■ J-club 無料セミナー

2014年からは「J-club 無料セミナー」を開設した。登録組織であれば無料で参加できるもので、北は北海道から南は九州まで、全国で約80コースのセミナーを開催し、各組織の社員教育の場として活用いただいている。

セミナー内容は、新入社員レベルの方を対象とした各マネジメントシステムの要求事項解説コースから、「経営に寄与する内部監査レベルアップコース」「マネジメントシステム共通内部監査コース」「是正処置方法解説コース」「リスクアセスメント方法解説コース」などがある。そのすべてがJ-clubオリジナルのセミナーであり、参加者の98%からセミナー内容に「満足」との評価いただいている（2%の「不満足」はセミナータイトルと内容の不一致などであり、

今後の改善事項としている）。

また2015年下期からは、日科技連のコア事業である品質管理の概要が学べるセミナーを開設した。2015年9月に改正されたISO 9001:2015の特徴には、「事業（ビジネス）プロセスとマネジメントシステムの統合」や、「内部及び外部の課題の特定」「リスクの概念の導入」といったことがあげられるが、これは経営目的や経営戦略とマネジメントシステムの方針展開を結びつけて運用する必要があることを意味し、これには日科技連が長年提唱してきたTQMにおける「方針管理」や「日常管理」といった方法論や品質管理手法の活用が有効である。

ISOの規格要求事項というフレームワークにTQMの方法論や手法を取り入れることによって、一層、経営に寄与するマネジメントシステムの確立が実現できるものと考えられる。

■ 今後に向けて

このように日科技連 ISO 審査登録センターでは、J-club などの活動を通じて、年に1～2回の現地審査だけではなく、通年で登録組織の経営改善に寄与できる支援体制を目指している。

今後は、階層別セミナーや、様々な経営管理技術に関するセミナーを全国で多数開催し、「Quality で日本一の審査機関になる」ことを次なる10年の目標としたい。





ISO研修事業部 審査員研修事業 15周年

日科技連では、1993年11月にISO/QSセンターならびにISO/QS研修事業部を設置し、準備期間を経て、1993年12月に財団法人品質システム審査登録認定協会（現 公益財団法人適合性認定協会：JAB）に審査登録ならびに審査研修機関としての認定申請を行った。そして、1995年3月に両機関ともJABの認定を取得した。

ISO研修事業部では、1994年に審査員研修を開始してから15周年を記念して、2009年に対象者別養成プログラムを開設、ユーザー会の設立などを行った。

■対象者別養成プログラム

対象者別養成プログラムとは、複数のセミナーを組み合わせて申し込んでいただくことで、対象者に必要なスキルを体系的に、また、効果的に身につけていただくことを目的としている。

(1)審査員養成プログラム

各マネジメントシステム（QMS、EMS、ISMS）の要求事項の解説コースと審査員研修コースをセットにしたプログラム。

(2)内部監査員養成プログラム

各マネジメントシステムの入門コース、または、要求事項の解説コースと内部監査員コースをセットにしたプログラム。

個人で参加される方はもちろん、企業で派遣いただく際にも効果的な教育を計画できると好評をいただいた。

また、コース単体での受講よりも参加費が抑えられることで、より参加しやすい環境にもなっている。

■ユーザー会

ISO研修事業部をご愛顧いただいている方々に、より行き届いたサービスと有益な情報を提

供することを目的にユーザー会を設立した。

ユーザー会は、登録いただいた個人を対象とし、セミナーの受講回数に応じて参加費のディスカウント（2回目10%off、3回目15%off、4回目以降20%off）やメールマガジンにより最新情報、有益な情報などを提供することで、長くISO研修事業部のサービスを利用いただけるような仕組みとなっている。個人で参加される方も多いISO研修事業部のスタイルにあったサービスとなっている。

■「審査員研修コース」を優待価格で提供

このほかに15周年記念の一環として、審査員を目指す方のみならず、組織のISO推進担当者やマネジメントシステムに関わりのある多くの方々に研修を利用していただけるよう、期間限定で「審査員研修コース」（QMS・EMS・ISMS）を優待価格で提供した。

*

ISO研修事業部では、今後も規格改正などの動向や参加者のニーズへ対応し、さらに充実した研修やサービスの企画に取り組んでいく。

石川 馨先生 生誕100年記念事業

石川 馨先生の生誕100年にあたる2015年に、石川研究室の門下生を中心に、日本科学技術連盟、日本品質管理学会、海外産業人材育成協会、日本規格協会、東京大学および品質管理界関係者有志のご賛同を得て、「石川 馨先生 生誕100年記念事業」を企画した。

先生が品質管理の道に入られた1950年代のはじめから、ご逝去された1989年までのほぼ40年間、日本のみならず世界の国々で、企業経営に与えた多大なインパクトを思い出し、これからの世代に伝えていくことは意義あることと考え、先生が何をなされ、何故、どのようになされたのかを思い起こしてみる機会となった。

【目的】

- (1)石川先生の哲学と成し遂げられたお仕事について、先生のお人柄も含めて、日本のみならず世界の国々の今日および明日の世代に伝える
- (2)石川先生の品質管理についての哲学・考え・方法などは、今日も、明日も、適切で効果的に企業経営に役立つことを示す

【事業内容】

- (1)ご活躍と追想の書：『人間石川馨と品質管理』のホームページへのアップロード
 - ・日本語版のアップロード
 - ・日本語版『人間石川馨と品質管理』の続編の刊行
 - ・『人間石川馨と品質管理』の英訳とホームページへのアップロード
 - ・英訳版『人間石川馨と品質管理』の続編の刊行とアップロード
- (2)石川先生が我々に向けて発せられた言葉のまとめ
- (3)冠行事（国内、海外）
- (4)石川先生の額入り写真の掲示

- (5)東京都市大学（旧 武蔵工業大学）での石川先生記念コーナーの設置
- (6)「石川 馨先生 生誕100年記念国際シンポジウム」の開催



【組織委員会】

- 委員長：久米 均氏（東京大学名誉教授）
 副委員長：佐々木眞一氏（日科技連／トヨタ自動車㈱）、狩野紀昭氏（東京理科大学名誉教授）
 委員：22名

【実行委員会】

- 委員長：狩野紀昭氏（前掲）
 副委員長：小大塚一郎（日科技連）、鈴木和幸氏（電気通信大学）
 委員：20名

【『人間石川馨と品質管理』英訳ご協力者（EQST）】

- 鈴木和幸氏（前掲）、ほか12名

【石川 馨先生の主な業績と活動】

- ・日本的品質管理（今日のTQM）の基礎作りに大きく貢献され、戦後の復興から高度経済成長期、先進国入りの各時代に品質管理の普及・推進をリードされた。
- ・魚の骨、イシカワ・ダイヤグラムと呼ばれる特性要因図の開発、管理図の応用法の体系化、粉塊混合物のサンプリング法の確立など。
- ・人間性尊重の経営を進めるためにQCサークルを創設し、日本国内はもとより、海外への普及に尽力された。
- ・国際品質アカデミーや国際品質会議の創設、デミング賞の海外企業への開放を主導され、ISO理事を含む要職を歴任し、日本的品質管理の紹介と移転に尽力された。

■石川 馨先生 生誕100年記念

国際シンポジウム

記念事業の一環として、石川先生の偉業とお人柄を再認識するとともに、先生のお教えを踏まえて、TQM, QCサークルを今後一層発展させていくためには、何をすべきかという視点から、2015年9月28日に東京大学伊藤国際学術研究センター・伊藤謝恩ホールにて、国際シンポジウムを開催した。

当日は、国内外から石川先生の門下生をはじめ、TQM, QCサークル活動の関係者を招聘し、講演、パネル討論が行われ、夕刻からは記念パーティが催された。国内から254名、海外から12名の方々にご参加いただき、盛大に執り行われた。

[プログラム]

Part A. 石川先生の成し遂げられた偉業とお人柄

■講演

「QCサークル活動と石川馨先生」

細谷克也氏 (品質管理総合研究所)

「わが恩師 石川馨先生による台湾へのQCサークルの導入と発展」

鍾 朝嵩氏 (先峰品質管理学術研究基金会)

「石川馨先生のTQCによる企業経営への貢献」

山岡建夫氏 (JUKI株)

「英国品質革命の先駆け」

David Hutchins氏

(David Hutchins Innovation Ltd.)

「石川先生と世界、特にインドでの品質の推進における先生の影響-私の個人的経験」

Janak K. Mehta氏 (IAQ)

「品質管理の真髄」

久米 均氏 (東京大学名誉教授)

■パネル討論(1) Q & A

モデレーター：狩野紀昭氏 (東京理科大学名誉教授)

メンバー：細谷克也氏 (前掲)、鍾 朝嵩氏 (前掲)、山岡建夫氏 (前掲)、David Hutchins氏 (前掲)、Janak K. Mehta氏 (前掲)

Part B. TQMとQCサークルの一層の発展のために今後なすべきことは何か

■基調講演

「石川先生が遺されたものから未来への知恵を集めて」

Gregory H. Watson氏

(Business Excellence Solutions)

■パネル討論(2) TQMとQCサークルについて今後なすべきことは何か

モデレーター：光藤義郎氏 (文化学園大学)

発表・討論：佐々木眞一氏 (日科技連/トヨタ自動車株)、鈴木和幸氏 (電気通信大学)、林千佳氏 (NTN株)、Gregory H. Watson氏 (前掲)



講演 David Hutchins 氏



- ▶ 石川 馨先生 生誕100年記念事業
<http://www.juse.or.jp/ishikawa/>
- ▶ 人間 石川 馨と品質管理 (QC殿堂)
<http://www.juse.or.jp/resource/>

公益制度改革による一般財団法人への移行 本部ビル，大阪事務所の移転

■財団法人から一般財団法人への移行

日本の公益法人制度は1896年の民法制定とともに始まり、以来約1世紀にわたって、民間の非営利部門において大きな役割を果たしてきた。しかし、活動の健全な発展を促進し、民による公益の増進に寄与するとともに、主務官庁の裁量権に基づく許可の不明瞭性などの従来の公益法人制度の問題点を解決することを目的として制度を抜本的に改革するため、2006年3月に「公益法人制度改革関連3法案」が閣議決定され、同年5月の第164回通常国会において法案が成立し、6月2日に公布された。

日科技連は1946年5月1日に創立し、その後、1962年4月5日に科学技術庁（現 文部科学省）監督下の公益法人として「財団」の認可を受けて、「科学技術の振興に必要な諸事業を総合的に推進し、もって文化と産業の発展に寄与する」ことを目的に品質管理を中核とした各種事業を展開してきた。公益法人制度改革により、日科技連を含め、すでに社団法人や財団法人の認可を受けている法人は、2008年12月1日の法律完全施行日から5年以内に公益法人もしくは、一般法人の認可を受けるための申請を行うか、またはどちらにも申請せずに解散するかを選択が迫られた。

そこで、日科技連は今までの活動を継続していくことを前提に法人内部に公益法人制度改革準備委員会を立ち上げ、20数回の検討を重ねた。

検討当初は公益財団法人の認定取得を目指し議論を進めたが、公益財団法人の認定を受けるための条件、認定を受けた後の法人運営、公益事業と収益事業の割合、今後の事業展開など、議論を進めるにつれ、現状の事業形態で公益財団法人の認定を受けるにはハードルが高いという結論に達した。そのため、急遽、一般財団法人の認可を受ける準備を進め、理事会ならびに



許可書

評議員会の決議を経て、2011年9月27日に内閣府公益認定等委員会に移行認可の申請を行った。

その後、申請から6ヵ月後の2012年3月19日に野田佳彦内閣総理大臣から認可書の交付を受け、2012年4月1日に「一般財団法人」として移行登記を行った。

一般財団法人の認可取得後は、今までの事業活動で蓄積してきた公益目的財産額を公益の目的のために消費していく計画（公益目的支出計画）に基づき事業を展開している。

■本部ビルの移転

日科技連は、(株)日本科学技術研修所（以下、日科技研）が1959年1月に渋谷区千駄ヶ谷5-10-11に竣工した日科技連ビル1号館を1966年1月から賃借して、本部事務局を置き、経営管理に役立つ各種事業を展開してきた。

また、日科技連は1971年3月に1号館の向かいに研修施設として日科技連ビル3号館を竣工し、事業の充実をはかり、その後、ISO事業の拡大に伴い、日科技研が所有する日科技連ビル2号館を賃借して、事業を運営してきた。

しかし、1号館、2号館は竣工から50年近くが経過し、設備の老朽化が進んでいること、

3号館の講堂を含めて研修室の稼働率が低下していること、2011年3月の東日本大震災以降2号館は構造的に耐震強度が低く、軽度の地震でも大きな揺れを感じ、職員に精神的苦痛を与えていること、また、審査登録事業の継続性の観点から、組織情報のセキュリティ対策を含め、改善の必要性を問われていることが問題となった。そこで、日科技連創立70周年を迎えるにあたって、上記の諸問題を一新して、新たな門出としたい旨を理事会、評議員会に諮った。審議の結果、2014年11月4日に本部を新宿区西新宿2-7-1の小田急第一生命ビル4階に移転することが承認され、役員室、管理部総務課・経理課、企画広報室、国際室、ISO審査登録センター、ISO研修事業部が移転した。

また、研修設備として、定員100名、50名、23名の研修室と定員20名、16名の会議室および講師控室、応接室を設置した。

■大阪事務所の移転

大阪事務所は、1963年1月21日に大阪市北区曽根崎の成晃ビル2階に連絡事務所を開設

し、1965年には堂島の中央電気倶楽部ビルに事務所を置き、外部の研修会場も借りながら事業を展開してきた。近年、東京の本部ビル同様、設備の老朽化や外部会場を使用する上での利便性の悪さなどが際立ってきたことから、快適な研修環境を提供することと、運用面でも非効率な部分が多くあるため、一極集中して効率の良い事業運営を行い、生産性の向上に繋げることを目的に、事務所を移転することを計画した。

大阪事務所も東京同様、日科技連創立70周年を迎えるにあたって、諸問題を一新して、新たな門出としたいということを理事会、評議員会に諮り、審議の結果、2015年3月9日に大阪市北区堂島2-4-27の新藤田ビル11階に移転することが承認された。

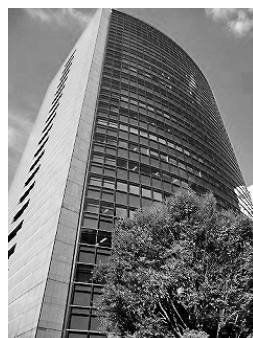
大阪事務所は新藤田ビルの11階（1フロアの1/4）に事務所と定員48名の研修室、定員8名の講師控室兼小会議室および応接室を備え、20階（1フロアの1/4）は定員74名の研修室と講師控室、また、ロビーでも班別会議などができるように設備を整えている。



本部 エントランス



本部ロビー



大阪事務所のある新藤田ビル



大阪事務所 研修室

70

第2部

新規・主要事業の動向



TQM・品質管理

1 品質管理検定

品質管理検定（QC検定）は、企業で働く方々に求められる品質管理の能力について、品質管理に関する知識を筆記試験で評価し、予め定めた基準によりその知識レベルを4段階に分けて認定している。第1回試験は2005年に実施した。級は1級～4級までであり、第16回から準1級を導入した。

本検定は、日本品質管理学会の認定を受け、日本科学技術連盟と日本規格協会が主催となり、全国規模で年2回（9月と3月）試験を実施している。

受検者は年々増加傾向にあり、第16回（2013年9月）の検定では、受検者数が4万5千人を超え、合格者は累計25万人を突破、第19回（2015年3月）の検定では、受検者数が初めて5万人の大台を突破し、受検申込者数は累計60万人を超え、合格者の累計は33万人を超えた。

近年では、利用企業の増加と業種の広がりが顕著で、特に高校を中心とした学校への普及には目を見張るものがあり、品質管理学習人口の裾野の拡大が確実に進んでいる。

- ▶ QC検定センター（日本規格協会）
一番ベースとなる4級のテキストが無料でダウンロードできる
<http://www.jsa.or.jp/kentei/index.html>

2 業務効率向上のための論理的伝達力 マスターセミナー

業務上の様々なトラブルや効率の悪さに対し、その原因がコミュニケーションの問題にあるケースが多く見られる。実は、そのコミュニケーションの阻害要因をさらに突き詰めていくと、思考の論理性的のなさにいきつく。元々、話すべき内容を論理的に整理しないまま言葉にしている人が多く、それがコミュニケーションの

阻害を引き起こしているのである。さらに「日本語の文脈依存性の高さ」に加え、近年では「誤った言葉や造語・新語の氾濫」「対面コミュニケーションの減少」など、問題は深刻化する状況にある。

しかしながら、一般的なコミュニケーション教育では話し方などの技術に終始しており、問題を解決しうる実務的な教育は存在していなかった。そこで、根本的な要素である「論理的な思考力」を養成するために2012年に開講したのが本セミナーである。

人は言葉を使って思考する。そのため、論理性を高めるには言葉の訓練が好適であるとの考えから、単語、文、文章、論旨といった言葉の要素を紐解き、言葉の訓練を通して論理性の養成をはかっている。

[内容]

目的と背景（社内のすべての文章には論理性が必要）、単語（少しの違いが概念まで壊してしまう）、文（単語と単語の関係を正しく築く）、文章（文を論理的に接続し、意味を正しく導く）、論旨（最初から最後まで素直に読めるようにする）、より伝わりやすい文章を書くために

[講師]

濱口哲也氏（東京大学大学院）

■ 活用シーン例：こんな経験はありませんか？

日常的な業務や報告書作成に始まり、営業活動、トラブルやチーム対応、仕様書作成など、言葉・文章・文章の存在しない業務はありません。言葉に関して、以下のようなケースに遭遇したことはないでしょうか？

Case1:「部下から提出された報告書が、何を言いたいのかさっぱり分からない」

| Before | After |
|--|--|
| <p>論旨がまとまっていないので文章にムダが多くなり、結果、内容が取り返らなくなってしまふ。報告書を何度も校正する上司も手間がかかるし、部下も何回も書き直すことになる。</p> | <p>報告すべき重要情報、確認したい点など、論旨を整理して「分かる」報告書を作成すれば、何度もやり取りせず一度の手間で済む。</p> |

活用シーン例

3 革新的課題解決法セミナー

ロシアの科学者アルトシュラーが提唱した問題解決手法TRIZをベースに、より実務での使用性を考慮したものが本セミナーで扱っている革新的課題解決法である。2010年に開講した。

製品の設計開発の際には、どうしてもトレードオフ（二律背反）が発生しがちである。たとえば「より薄く、しかし強度は高く」「出力を上げると騒音が出る」といった具合である。こういったトレードオフに対しては何かの革新的なブレークスルーが必要とされるが、正面突破で解決策を探っても常識的な発想が阻害要因となり、なかなかそこまでたどり着けない。TRIZではこの点を、過去の250万件もの発明特許で用いられたブレークスルーを、トレードオフを引き起こす条件を軸にしたマトリクスに整理することで解決をはかった。

しかし、それらの発明原理は40にもわたるため、実務で使用するには少しハードルが高い。その点を考慮し、本セミナーでは、より設計開発の実務で使いやすいようにリバイスしたマトリクスと発明原理を用いて講義・演習を行っている。

[内容]

革新的課題解決法のフレームワーク、革新的課題解決法の構成、矛盾解決法、革新的課題解決法の適用方法、グループ演習：身近な事例をもとに実践演習、総合質疑・まとめ

[講師]

長田 洋氏（東京工業大学）ほか

4 実践問題解決セミナーマネージャーコース

日科技連の中核的なセミナーである「品質管理セミナー部課長コース」を母体に、2009年に名称を改め大幅リニューアルを進めたのが本セミナーである。旧セミナーにおける、①品質の重要性と基礎知識の理解 ②マネジメント力の向上 ③課題形成力・課題達成力の向上を通じて“自律型マネージャー”を育成するという

コンセプトを守りつつ、5日間のカリキュラムを3日間に再編成した。

本セミナーでは、品質保証、方針管理、日常管理といったTQMにおけるマネージャーに必要な基礎知識を習得するとともに、問題解決・課題達成の実践的な取り組みにかなりの時間を割いている。自分の実際の問題・課題をテーマに改善活動を進めるが、受講後も約半年もの間、専任の講師による指導が続く。この独特のシステムが、実践的かつ深掘りした問題解決能力の習得につながっている。この実践能力の習得と、他社マネージャーとの「他流試合」を求め、同じ会社からのリピート参加が多いセミナーでもある。

[内容]

顧客満足向上への品質保証、経営目標を達成するための方針管理、業務目的を効率的に達成するための日常管理、グループワーク、参加者交流会、マネージャーとしての問題解決力、課題形成・達成力の向上、ケーススタディ、問題解決・課題達成のグループ研究

[講師]

永原賢造氏（元 ㈱リコー）ほか

5 品質管理セミナー部課長コース

品質管理の重要性と基礎知識、本質を理解し、自社や自部門の重要問題の解決・強化をはかる実践力を身につけることを目的に、2009年に「品質管理セミナー部課長コース」として大阪で再開した。2010年には、「組織活動の問題点」「経営に貢献する活動のあり方」「部課長の果たすべき役割とあるべき姿」などについて、今の企業や組織で「理解されていないこと」「できていないこと」などを重点的に指導し、問題解決をはかるために必要な能力を身につけることを目的とした内容に改訂し、2日間×3ヵ月（計6日間）で開催している。

[内容]

TQM活動の基本と関連する活動の位置づけ、組織管理と部課長の役割、人材育成の重要

性と進め方，方針管理の基本と進め方，日常管理の基本と進め方，品質保証活動の基本と進め方，経営に貢献するQCサークル活動，品質マネジメントシステムの有効活用，効果を高めるための改善活動のあり方，グループディスカッション

【講師】

岩崎日出男氏（近畿大学），西口幸雄氏（HBIコンサルタント事務所／元（株）西島製作所）ほか

6 失敗学と創造学セミナー

畑村洋太郎氏（東京大学名誉教授）の提唱された「失敗学」と、その応用編である「創造学」のセミナーで、2008年のセミナー創設時から、畑村氏の研究室にて共同研究をされていた濱口哲也氏（東京大学大学院）が指導している。

失敗学において重要なキーワードとなるのが「上位概念」である。失敗に対し、直接的に「なぜ」「誰が」という問いかけを行うと、ともすると近視眼的になり、失敗の本質を見落とす可能性がある。ここで上位概念という視点でものごとを俯瞰的に捉えることで、失敗で起きた個別事象を一般化・普遍化し、失敗の真の原因の把握、また、ほかの可能性の模索を通じた未然防止活動へとつなげていくことが可能になる。

創造学は、その上位概念を「要求機能」と置き換えることで、同じフレームワークを用いながらも、製品開発における独創的な発想や問題の解決法を導き出す考え方である。

年を重ねるごとに開催回数，参加者数ともに増えているのは、企業にとって有用な考え方として広く受け入れられている証左とも言える。

【内容】

失敗学：プロローグ，問題提起「今日本で何が起きているか」，失敗学のすすめ，リスクマネジメントのための失敗学

創造学：思考展開図，要求機能を記述する，解決案を考える

【講師】

濱口哲也氏（東京大学大学院）

7 自動車部品メーカーの自律型品質保証・品質管理セミナー

日本の自動車メーカーによる生産拠点のグローバル展開に伴い、高品質を維持するために、現地部品メーカーから提供される部品の品質確保が必須となる背景を受け、2007年4月に「自動車部品メーカーの品質保証・品質管理研究委員会」を発足し、活動の基本構想となる「AMPQ（自動車部品メーカーの品質保証・品質管理）システム」の開発を行うことになった。

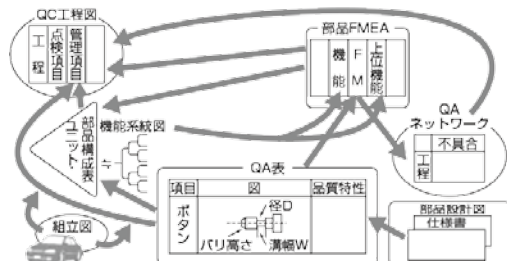
本委員会によって開発されたコンテンツにより、自動車部品メーカーによる品質保証のための各々の業務（機能系統図，部品FMEA，QA表，組立図，QC工程図，QAネットワークなどの作成）とそれらのつながり（関連）を理解し、それぞれを関連付けて実施することで、クレーム対応ではない自律的な品質保証活動を実現するためのセミナーとして、2008年2月に開講した。本委員会作成テキストを使用し、講義，演習，事例紹介を通じて学ぶ。2013年から「部品メーカーの自律型品質保証・品質管理セミナー」と改称した。

【内容】

QAとQCの関係，製品の設計から出荷までの各工程におけるQA活動の関連性，関連付けたQA活動を実際の業務にどのように落とし込むのか

【講師】

大藤 正氏（玉川大学），磯部孝征氏（市光工業（株）），田中孝司氏（（株）熊谷組），永井一志氏（玉川大学），原賀秀昭氏（コニカミノルタテクノロジセンター（株）），星野和夫氏（（有）ライアブルテック）



部品メーカーの自律型品質保証・品質管理システム

8 技術力で差をつけるための 実験計画法実践セミナー

実験計画法セミナー（東京クラス）は、従来、「入門コース」「実践コース」の2コースを開催してきたが、2015年に全面リニューアルし、「技術力で差をつけるための実験計画法実践セミナー」と名称を変え、「エントリーコース」「スタンダードコース」「エキスパートコース」の3つのコースに生まれ変わった。

カリキュラムの改訂にあたり、実験計画法の習得だけを目指すのではなく、技術的問題、課題に対する手法の応用方法や、難解な問題、課題へどのように攻めるのかに主眼を置き、実験計画法はそのための手段として位置付けた。

3つのコースを順番に受講することで、ステップアップをしながら、より難解で複雑な問題への対応知識が習得できるようにした。

[講師]

山田 秀氏（筑波大学）、奥原正夫氏（諏訪東京理科大学）ほか、実験計画法運営委員

[カリキュラム]

エントリーコース

| | |
|-----|--|
| 第1日 | 技術力獲得のための実験計画法とは 統計的方法の基礎 一元配置実験の計画と解析（質的因子） |
| 第2日 | 一元配置実験の計画と解析（量的因子） 二元配置実験（質×質、量×量） 繰り返しのない二元配置実験 直交表の紹介 |

スタンダードコース

| | | |
|----|-----|--|
| 前期 | 第1日 | 技術開発における統計的手法の役割、多元配置実験復習、直交表による一部実施実験(1)(2)、事例紹介 |
| | 第2日 | 直交表による一部実施実験・事例紹介、乱塊法・分割法 |
| 後期 | 第3日 | 乱塊法・分割法についての演習、測定の繰り返し・反復、複雑な問題への対応：欠測値、計数値の扱い、DEゲーム(1)逐次探索ゲーム |
| | 第4日 | DEゲーム(2)(3)前日の続きと、結果発表とまとめ、エキスパートコースへ続く道 |

エキスパートコース

| | | |
|-----|-----|--|
| 第1月 | 第1日 | 技術開発における統計的手法の役割、分散分析による効果の把握、直交表などの復習、頑健性向上：パラメータ設計（手法） |
| | 第2日 | 頑健性向上：パラメータ設計（事例）、頑健性向上：パラメータ設計（演習）、鳥コンシミュレータ：ダビンチを超える |
| 第2月 | 第3日 | 連続変数の最適化：最小二乗法、応答曲面法、最適計画、応答曲面など適用事例の紹介 |
| | 第4日 | 連続変数の最適化：ダイナミック特性の要因解析、サルベージ実験、ピッチングマシン・シミュレータ：魔球を再現しよう |
| 第3月 | 第5日 | もろもろの話題（現DEとその周辺）、多目的設計探査、シミュレーション実験 |
| | 第6日 | ロバスト最適化、ロバスト最適化演習：RCカー、総合質疑 |

9 実験計画法セミナー（大阪クラス）

実験計画法セミナー入門コースは、2003年からオリジナルテキストに改変し、8日間から6日間の開催とした。2012年には企画委員会により、セミナー用テキストとして『実務に使える実験計画法』（日科技連出版社、2012）を執筆し、出版した。その後、受講者からの要望もあり、2014年からは実践コースから乱塊法と分割法を入門コースに移し、また、パソコンも常時使える環境にして、8日間の開催とした。

大阪で開催する本セミナー入門コースの特長は、前期は、実験計画法の考え方や手法の解説と手計算による時間内演習を主とすること、後期は、手法の解説に加え、実務での活用の仕方を効率よく習得できるよう、Excelマクロを活用したソフトによる演習やシミュレーション実験を実施することにある。

一方、入門コース修了者のステップアップ



コースである実験計画法セミナー実践コースは、2014年から6日間を4日間の開催に変更し、発展的手法の解説と実データを用いた実践的トレーニングを中心としている。

[内容]

入門コース

実験計画法の活用場面、統計の基礎、検定・推定、一元配置、二元配置、多元配置、直交表、乱塊法、単回帰、線形推定論・線形検定論、タグチメソッド、実験のデザイン、Super DOE分析、シミュレーション実験

実践コース

線形推定論・線形検定論、Excel専用ソフトの活用、直交表（擬因子法、アソビ列法、補遺）、重回帰（演習含む）、Excel専用ソフトを用いた解析と総合演習、計数値を応答とする実験、検出力と実験の大きさ

[講師]

松本哲夫氏（ユニチカ㈱）ほか

10 モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース

近年、ビッグデータに対する期待がビジネス界で高まるとともに、ビジネスとビッグデータ解析をつなげられる人材、いわゆる「データサイエンティスト」の育成が急務であると言われるようになった。この状況を受けて、2013年からSQC実践研究会では、製造業におけるビッグデータの活用について議論を展開してきた。

その成果物として、2015年に「モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース」（5日間：予備コース、基礎編2日間、活用編2日間）を開設した。第1回コースは満席で成功裏に終了した。

本コースでは、製造業に携わる技術者向けに、ビッグデータの解析を平易に解説している。

[内容]

今、なぜモノづくり企業でデータサイエンスが必要なのか、ビッグデータ解析前の処理、ビッグデータを用いた異常の検知、ビッグデータを用いた要因解析、演習

[講師]

吉野 睦氏（㈱デンソー）

11 マハラノビス・タグチ（MT）システム入門コース

マハラノビス・タグチ（MT）システムは、タグチメソッド（品質工学）の中でも比較的新しい手法であり、今後ものづくりの現場で一層の活用が期待されている。しかし、MTシステムが急速に発展したため、有力メーカーが主力製品の出荷検査をすべてMTシステムで行っていると報告される一方、品質管理や技術開発などものづくりに携わる多くの人がその名を聞いたことがない、という状況にあった。

このような状況を受けて、MTシステムを実践的かつ体系的に、ものづくりに携わる方々への普及・教育を目的として、2010年に「マハラノビス・タグチ（MT）システム入門コース」（2日間）を開設した。

[内容]

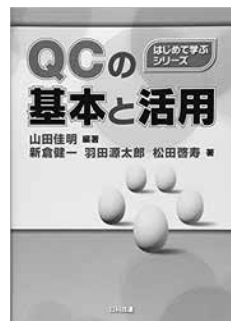
パターン認識とMTシステム、MT法、T法(1)、T法(3)=RT法、事例紹介、演習

[講師]

手島昌一氏（アングルトライ㈱）、長谷川良子氏（長谷川技術士事務所）、立林和夫氏（元富士ゼロックス㈱）

12 eラーニング QC（品質管理）の基本と活用

パソコンやインターネットの普及により、いつでも、どこでも手軽に品質管理の基本を学べる環境を提供することを目的として、2010年8月にeラーニング「QC（品質管理）の基本と活用」を開講した。このeラーニング教材は、『はじめて学ぶシリーズ QCの基本と活用』（日科技連出版社、2009）をベース



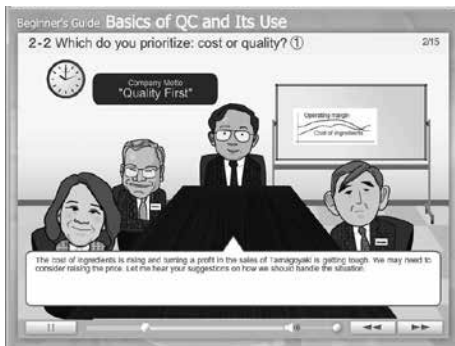
にしている。

内容は、品質管理検定（QC検定）4級～3級のチャレンジにも活用でき、品質管理を初めて学ぶ企業・組織の新入社員や内定者、さらには大学や専門学校・工業高校の学生にも活用できる内容である。

2014年4月には、英語版を開講した。国内外で働く外国人社員の方に利用いただき、好評である。



日本語版の目次



英語版

13 次世代TQMの構築研究委員会

■準備委員会（2007年3月～12月）

日本科学技術連盟と日本品質管理学会の共同プロジェクトとして、下記を目的に「次世代TQMの構築」準備委員会の第1回会合が、2007年3月27日に開催された。

- ・TQMをコアとした、次世代の品質管理技術・経営支援技術の新しい体系（科学的質経営の指導原理）を構築する。
- ・この次世代TQMを広く普及させることで、

イノベーションの促進と日本企業の産業競争力向上に貢献する。

以降、準備委員会は6回開催され、次の4つのWGが組織された。

WG・M：経営質革新WG

WG・I：イノベーション・価値創造

WG・V：バリューチェーン質革新

WG・E：次世代TQM普及プログラム・教育プログラムWG

また、この間、「“TQM・デミング賞”に関する意見交換会（品質懇話会）」を開催し、TQMに造詣の深い産業界のトップに現状と今後について意見を徴収した。

並行して、「IT産業界についてのご意見を伺う会」「エレクトロニクス業界および総合電機業界についてのご意見を伺う会」などを開催し、次世代TQMの構築にあたり、各業界の状況を調査した。

■研究委員会（2008年2月～2009年6月）

全6回の会合が開催され、4つのWGの中から、下記のテーマ・プロジェクトが発足し、検討が重ねられた。

[WG・I：イノベーション・価値創造]

SG1：価値創造・表現

SG2：創造的商品設計・開発

[WG・V：バリューチェーン質革新]

①一気通貫自工程完結、②超短納期開発、③多目的最適設計、④製品寿命設計思想・商用車、⑤製品寿命設計思想・家電、⑥プロセスの弱点顕在化と事故撲滅、⑦組み込みソフトの品質確保

■研究会終了後

[WG・M：経営質革新WG]

『クオリティマネジメント』誌に連載「品質魂」第1回～第9回（2009年4月号～12月号）に記事掲載を行った。

[WG・I：イノベーション・価値創造]

“SG2：創造的商品設計・開発”については、後に「革新的課題解決法セミナー」として日科技連において事業化した。

[WG・V：バリューチェーン質革新]

①一気通貫自工程完結については、後に『開

発・設計における“Qの確保”（日本規格協会、2010）として出版した（2010年度日経品質管理文献賞受賞）。

その他のWGについても日本品質管理学会での発表や説明を実施している。

*

次世代TQMの構築プロジェクトは、すべてを普及・教育のプログラムまで発展させるには至らなかったが、一部については事業化を実現した。研究の過程において、時代の変遷に伴うTQMとその周辺の新たな課題を浮き彫りにし、その対応を検討することによって課題に対する方向性を示した。

14 品質コストマネジメント研究部会

企業経営においてコスト管理は切実な課題であり、特に品質管理活動の中で、「品質コストマネジメント」の考え方やその応用は、企業経営にとって、大変有益かつ効果的と考え、わが国の産業界の競争力向上をはかるために、「品質コストマネジメント」の企業へのさらなる普及と展開を目的として、2009年9月に「品質コストマネジメント研究部会」を設立した。

その成果物として、『品質コストマネジメント・ハンドブック』を冊子にまとめ、2015年7月に発行した。また、2016年度に品質コストマネジメントセミナーを開催予定である。



【目的】

- ・品質コストマネジメントに関する共通理解を得て、品質コストに関する誤解を払拭し、その導入・普及を促進させる方向性を示す。
- ・わが国の品質コストマネジメントの現状を把握し、品質管理および品質コストマネジメントの課題を明確化するとともに、その是正策を検討する。

【研究部会委員】 ◎委員長、○副委員長、順不同

- ◎伊藤嘉博氏（早稲田大学）
- ◎藤井暢純氏（サンデン(株)）
- 伊東玄二氏（日本水産(株)）
- 梶原武久氏（神戸大学大学院）
- 長沢伸也氏（早稲田大学）
- 白石 崇氏（清水建設(株)）
- 新木 純氏（積水化学工業(株)）
- 黒沼陽一郎氏（(株)東芝）
- 黒木優一郎氏（富士通(株)）
- 杉本弘実氏（富士ゼロックス(株)）
- 日時壮浩氏（早稲田大学）

15 SQC実践研究会

実験計画法をはじめとするSQC手法の普及と発展、新たな手法の開発、人材育成を目的として、2007年にSQC実践研究会（SQCPRG）を設立した。企業の実務者や大学講師など、実験計画法事業の運営委員を中心として、産学が協同で問題解決や相互研鑽に取り組み、その活動の成果は、毎年11月に開催するクオリティフォーラムにて紹介している。現在、品質管理セミナーベーシックコースの講師陣をメンバーに加え、継続して開催している。

また、2013年からは、製造業におけるビッグデータの活用について議論を展開し、その成果物として、2015年に「モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース」が開設されるなど、多くの成果をあげている。

16 知識構造化シンポジウム

田村泰彦氏（(株)構造化知識研究所）の提唱する、SSM（Stress-Strength Model）の事例紹介と最新情報の提供を中心に開催しているシンポジウム。2009年に第1回を開催し、2015年で第7回を数える。

SSMとは、ともすると個別的でローカルになりがちな過去のトラブル事例などの失敗情報・知識を一般化することで、構造的に再構成

し、製品の設計開発において効果的・効率的に再利用することを目指したモデルである。

仮に、どれだけ有効な知識があったとしても、たとえば、それが製品特有の用語で記述されていたり、検索キーワードが適切でなかったり、あるいは因果関係が明確にされていなかったり、という状況では、その情報・知識を探すのに手間がかかり過ぎたり、あるいはそもそも存在が知られなかったりなど、再利用に至らないケースが多い。そこで、それらの情報を再利用しやすい形にルール付けし、蓄積することを可能にしたのがSSMである。

SSM実践企業も増え、シンポジウムにもかなり広範な企業からの参加が得られるようになり、毎回200名近く参加をいただいている。



第7回知識構造化シンポジウム

17 クオリティフォーラム

2000年に、時代の要請から「サービス産業における品質管理大会」「部課長スタッフ品質管理大会」「職組長品質管理大会」を統合し、「クオリティフォーラム」という名称のもと、全国の企業・病院・行政・組織による“クオリティ”に関する事例発表を行っている。企業で重要な役割を担っている部課長を主な対象とし、総勢約300～400名の参加者のもと、品質月間の11月に2日間で開催している。

2010年から、企画Session（依頼講演）、一般事例発表でプログラムを構成しており、あわせて日本品質奨励賞の受賞報告講演会も組み込まれている。企画Sessionは、多方面の業界から

時宜に合った話題性のあるテーマでの講演を選定している。一般事例発表は、公募により厳選された改善活動を中心とした発表で構成している。



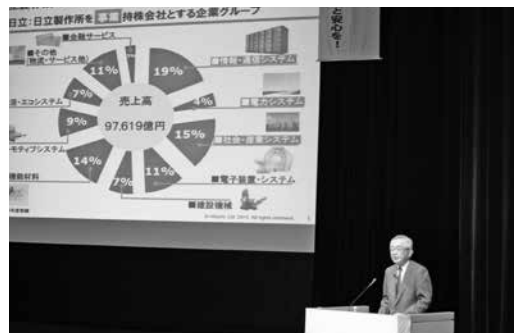
クオリティフォーラム2015

18 品質経営トップマネジメント大会

品質月間である11月に開催する行事の一つで、1963年から、その年の重要課題、ならびに品質月間テーマをもとに、学識経験者や企業経営者に講演いただいている。これからの日本企業の考え方や取り組み方などを見つめ直していただく機会となっており、学識経験者、企業経営者層が相互に知識と経験の交流をはかることを目的として開催している。半日の講演会形式で、参加しやすいスケジュールとなっている。

企業の品質経営度調査の実施年は、「優秀企業賞」の授賞式をプログラム内で行っている。

2005年から、日科技連賛助会員の特典の一つとして、会員会社は無料招待している（1口3名）。



2015 品質経営トップマネジメント大会

品質経営トップマネジメント大会講演一覧

| 年 | 講演者、講演テーマ |
|-------|---|
| 2006年 | 三澤一文氏（アクセンチュア㈱）「企業競争力と品質管理の新たな展開－製品開発の現場の視点から－」、 有馬利男氏（富士ゼロックス㈱）「21世紀に求められる企業経営」 |
| 2007年 | 三村明夫氏（新日本製鐵㈱）「新日本製鐵㈱におけるグローバル経営」 野口悠紀雄氏（早稲田大学大学院）「日本経済と企業経営」 |
| 2008年 | 富山和彦氏（㈱経営共創基盤）「日本企業の再活性化－事業再生の取り組みを踏まえて」 西田厚聰氏（㈱東芝）「東芝イノベーションによる経営戦略」 |
| 2009年 | 新宅純二郎氏（東京大学大学院）「持続可能な品質とは－高品質が顧客に伝わるシステムづくり－」 財部誠一氏（経済ジャーナリスト）「生き残る企業の条件」 |
| 2010年 | 酒巻 久氏（キャノン電子㈱）「品質経営の原点にかえり先駆者の知恵に学ぶ」 向殿政男氏（明治大学）「安全と安心が品質経営の中心になる時代」 似鳥昭雄氏（㈱ニトリホールディングス）「ニトリ経営の強さの秘密～真の製造・物流・小売業とは～」 |
| 2011年 | 遠藤 功氏（早稲田大学ビジネススクール、㈱ローランドベルガー） 「『日本品質』で攻める！～グローバル競争を勝ち抜くためには～」 川田達男氏（セーレン㈱）「21世紀を生き残るための企業革新」 |
| 2012年 | 中尾政之氏（東京大学）「“まさか”の発想の失敗学～違和感を起点に守りから攻めの失敗学へ～」 斎藤 保氏（㈱IHI）「IHIグループのものづくり戦略～やっぱり日本品質～」 |
| 2013年 | 圓川隆夫氏（東京工業大学大学院）「価値ある品質で新たな成長を！～ものコトづくり時代の品質経営～」 宇佐美 徹氏（アルパイン㈱）「アルパインにおけるグローバルなものづくりと顧客価値の創造」 |
| 2014年 | 藤沼彰久氏（㈱野村総合研究所）「野村総研におけるシステム運用の品質改善－見える化でトラブル8割減－」 楠木 建氏（一橋大学大学院）「クオリティ企業の条件」 |
| 2015年 | 川村 隆氏（㈱日立製作所）「日立製作所のV字回復経営」 鈴木和幸氏（電気通信大学大学院）「品質保証と信頼性～あなたが主役 みんなでつくる 感動と安心を！～」 西岡靖之氏（法政大学）「IoTによる製造現場発『つながる工場』のためのグランドデザイン ～『日本版Industrie4.0（インダストリー4.0）』の取り組み～」 |



信頼性・製品安全

1 設計・開発における未然防止手法セミナー

新製品の新規性に応じて2種類のデザインレビュー（FMEAを軸としたFull Process DRとDRBFM（Design Review based on Failure Mode）を使い分け、未然防止の視点から2つのデザインレビューの目的を理解し、事例紹介、演習を通じて実践力を養成することをねらいとし、2012年6月に2日間のセミナーとして開設した。

[内容]

モノ造り品質フレームワーク、デザインレビューによる有効な未然防止、Full Process DRのプロセスとツール、Full Process DRのグループ演習、レビューアに必要なスキル、有効なデザインレビューの進め方、Quick DRのプロセスとツール、Quick DRのグループ演習

[講師]

大島 恵氏、奈良敢也氏（日産自動車株）

2 設計・開発における未然防止手法 デザインレビューレビューア育成セミナー

有効なデザインレビュー（以下、DR）を実践するにはレビューアの育成が不可欠である。そこで、DRのプロセスやツールの教育に加え、DRを受けるエンジニアの考えを引き出し、育成し、DRを活性化するためのコーチングスキルを養成することをねらいとし、2013年2月に1日のセミナーとして開設した。

[内容]

未然防止のための有効なDR、なぜレビューア教育が必要か、DRのプロセスとツール、DRに必要なコーチングスキル、コーチングスキルを活用したDR、レビューア十カ条とべからず集、グループ・ディスカッションと発表

[講師]

大島 恵氏（日産自動車株）

3 設計・開発における品質ばらつき抑制 手法セミナー

ばらつきを抑制し、品質目標を達成するために、日産自動車において開発現場でグローバルに実践している品質工学の戦略的な活用方法であるQVC（Quality Variation Control）プロセスや標準ツールを、事例や演習を通じて実践的に学び、身につけることをねらいとして、2013年10月に1日のセミナーとして開設した。

[内容]

モノ造り品質フレームワークと品質ばらつき抑制、QVCプロセスの概要と適用事例、QVCの標準ツール：機能展開、品質工学の基礎知識、QVCプロセスの標準ツール：設計感度解析、QVCプロセスの標準ツール：ばらつき影響度解析、QVCプロセスの適用事例

[講師]

大島 恵氏、奈良敢也氏（日産自動車株）

4 設計・開発ヒューマンエラー防止セミナー

人はどのようにして間違えるものなのかを知り、ミスを防ぐにはどのような手法があるのかを、講義と演習を通じて身につけることをねらいとして、2010年11月に2日間セミナーとして開設した。

[内容]

ヒューマンエラー防止の理論、設計・開発部門のヒューマンエラー、ヒューマンエラー後の問題解決の考え方、設計・開発部門のためのエラー防止のケーススタディ演習、エラーに備えるための業務手順の合理化、仕事をわりやすくする代表的手法、現場改善のアプローチ方法、

設計・開発部門のための業務改善演習（手順の合理化、書式やマニュアルの改良）

[講師]

中田 亨氏（産業技術総合研究所）

5 信頼性管理・信頼性設計入門コース

大阪で開催していた、「信頼性セミナー入門コース」を2011年に「信頼性管理・信頼性設計入門コース」と「信頼性試験・故障物理入門コース」（2012年に「入門」を「実践」と改称）に分割し、リニューアルした。

上述のうち、信頼性設計入門コースは、製品の信頼性と保全性を確保するための最低限必要な基礎知識を身につけることを目的とした2日間コースとしてリニューアルした。

[内容]

信頼性管理、故障の確率モデル、システムの信頼性と保全性、信頼性設計

[講師]

貝瀬 徹氏（兵庫県立大学）、高木 仁氏（三菱電機株）、熊谷利枝氏（三菱電機株）、岡本朗氏（株村田製作所）

6 信頼性試験・故障物理実践コース

市場ストレスと故障メカニズムの関係をよく知って、加速試験や市場故障の再現など規格がない試験の組み立て方や実践の仕方を身につけることを目的とし、2日間コースとしてリニューアルした。

[内容]

信頼性データ解析法、信頼性試験、故障物理

[講師]

松岡敏成氏（三菱電機株）、本山 晃氏（パナソニック株）

7 実践！信頼性・品質技術研究会

前身の「信頼性開発技術研究会」（活動期間15期）を2011年5月にリニューアルし、改称

した。「メカ」「エレキ」といった従来の技術領域のボーダーレス化に対応し、「材料」や「マネジメント」など信頼性技術の原理・原則に即した分科会テーマを設置した。産業界における各分野の信頼性に関し、現在抱えている諸問題とその解決法の事例研究や討論を通じ、より役立つ信頼性の展開をはかれるよう、また実務面での継続研究を兼ねた「信頼性技術者の話し合いの場」となることをねらいとしている。

毎年5月～翌年3月の1年間を会期とし、年7回の例会を実施している。2015年で第5年度を数える。

8 「R-Map」を商標登録

R-Mapを広く産業界で活用してもらうため、ならびに個人が商業目的で使用することを制限するために、2014年7月11日付で商標登録を行った。

出願番号：商願2014-018355

指定区分：第9類（電子出版物）、第16類（印刷物）、第41類（知識の教授、セミナーの企画・運営又は開催）

9 特別セミナー「迫りくる法改正、変わる安全設計メーカー責任を果たすリスクアセスメントとは」

事業者が自主的に行うリスクアセスメントをはじめとして、製品安全に求められる考え方や取り組みについて最新情報を提供することをねらいとして、日経BP社と共催で、2011年7月25日に大阪、7月27日に東京にて開催した。

[講演内容]

「日本における製品安全の規制と今後」「製品安全における世界の動向と日本メーカーが取り組むべき姿」「『リスクアセスメント・ハンドブック〈実務編〉』の発行目的と使い方」「企業におけるリスクアセスメントの実践事例～R-Map手法によるリスク分析と対策の評価～」

パネル討論：「日本のリスクアセスメントの現状と課題～誤使用、不注意事故は防げるか？～」

[講師]

経済産業省商務グループ、向殿政男氏（明治大学）、松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）、伊藤 淳氏（日立アプライアンス(株)）、長田敏氏（製品評価技術基盤機構）、高杉和徳氏（製品安全コンサルタント）、佐野真理子氏（主婦連合会）*、河村真紀子氏（主婦連合会）**

*大阪のみ、**東京のみ



10 消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース

企業の関心も高くなっているリスクマネジメントを定量的に判定し、数値的にとらえるR-Map手法の考え方・使い方を入門レベルで広く提供することをねらいとして、2008年10月に1日セミナーとして開設した。2010年に後述の2コース¹¹、¹²にリニューアルした。

[内容]

R-Map概論、発生した事故のR-Map分析、対策案のR-Map評価、開発段階からの安全設計、社内リスクマネジメントシステムの構築

[講師]

松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）

11 はじめてのR-Map半日コース

「消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース」をリニューアルし、販売後のリスク評価に限定し、2010年5月に半日セミナーとして開設した。2012年に後述のコース¹³にリニューアルした。

[内容]

R-Map概論、重大事故のR-Map分析、ヒヤリ・ハット事故の分析、是正処置・予防措置

[講師]

松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）、横井靖氏（日新火災海上保険(株)）、井上 泰氏（(株)インターリスク総研）

12 R-Mapを活用したリスクアセスメント1日コース

「消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース」をリニューアルし、開発段階からのリスクアセスメントに限定し、2010年5月に1日セミナーとして開設した。2012年に後述のコース¹⁴にリニューアルした。

[内容]

R-Map概論、リスクファインディング技法、PSPTA法、セーフティモジュール法、演習

[講師]

松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）、伊藤淳氏（日立アプライアンス(株)）、小里幸徳氏（住友化学(株)）

13 流通段階・販売後のR-Map活用コース

「はじめてのR-Map半日コース」をリニューアルし、2012年5月に開設した。

[内容]

安全な製品の流通、市場情報のR-Map分析、リコールマネジメント

[講師]

高杉和徳氏（製品評価技術基盤機構）、井上泰氏（(株)インターリスク総研）

14 開発段階のR-Map活用コース

「R-Mapを活用したリスクアセスメント1日コース」をリニューアルし、2012年5月に1日セミナーとして開設した。

[内容]

リスクアセスメントの実践方法と危害シナリオ, PSPTA法, セーフティモジュール法, 演習

[講師]

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 伊藤 淳氏 (日立アプライアンス(株)), 小里幸徳氏 (住友化学(株))

[内容]

法規制 (日本と欧米), 判定フローと措置の選択, 消費生活用製品の判断事例, 医療機器の判断事例, リコール判断のケーススタディ

[講師]

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 井上 泰氏 (株インターリスク総研), 大田利幸氏 (元パナソニック(株)), 三本利幸氏 (株日立メディコ)

15 R-Map入門コース

R-Map手法に興味のある方, これから学びたいと考えている方, ならびにR-Map関連セミナーに参加を検討している方を対象に, R-Map手法の考え方・使い方を入門レベルで広く提供することをねらいに, 2012年4月に半日の無料セミナーとして開設した. 2015年度から内容を拡充し有料で開催している.

[内容]

リスクアセスメントの基本, R-Map手法の特徴, R-Mapを使ったリスクの評価方法

[講師]

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 杉山 明久氏 (元 ヤマハ発動機(株))

16 R-Map活用コース：市場措置判断

製品事故が発生した場合の迅速かつ適切な判断とサービスについて学ぶことをねらいとして, 2015年9月に1日セミナーとして開設した.

17 R-Map活用コース：リスクアセスメント

危害シナリオの作成とそのシナリオに基づく評価方法, どこまでリスク低減をしなければならないか, 各保護方策のリスク低減効果の考え方について学ぶことをねらいに, 2015年9月に2日間セミナーとして開設した.

[内容]

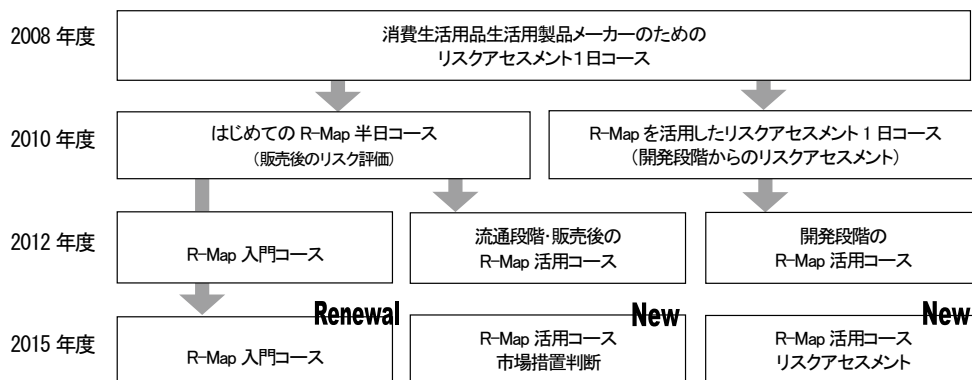
リスクアセスメントプロセスと記録の保存, リスクファインディングと危害シナリオ, PSPTA法によるリスク分析と低減, セーフティモジュール法によるリスク分析と低減, 実機によるリスクアセスメントケーススタディ

[講師]

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 井上 泰氏 (株インターリスク総研), 伊藤 淳氏 (日立アプライアンス(株)), 池沢 学氏 (株日立メディコ)

▶ R-Map手法について

<http://www.juse.or.jp/reliability/introduction/>

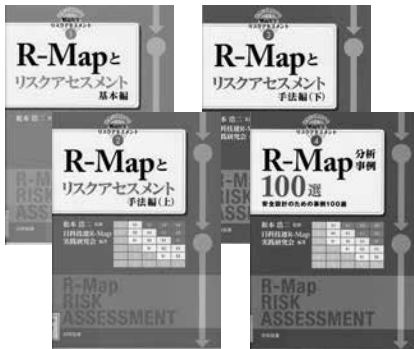


R-Map 関連セミナー変遷

18 R-Map実践研究会

2005年に発足した本研究会は、リスクアセスメントに特化し、リスクを「見える化」するための異業種メンバーで構成された研究会である。2015年で第11年度を数える。

2014年に創設10周年を記念し、また10年間の研究会の成果物として、世界に通用する製品安全リスクアセスメントシリーズ(全4巻)を日科技連出版社から発行した。この出版記念講演会を2014年10月16日に日科技連・東高円寺ビルにおいて開催した。



- 第1巻『R-Mapとリスクアセスメント基本編』
 第2巻『R-Mapとリスクアセスメント手法編・上』
 第3巻『R-Mapとリスクアセスメント手法編・下』
 第4巻『R-Map分析事例100選
 -安全設計のための事例100選-』

19 信頼性通信教育講座

受講者自身の都合により、いつでも空いている時間・好きな場所で効率的に学習してもらうことをねらいとして、2008年4月に6ヵ月間の通信講座を開設した。2012年2月で休止となった。

【内容】

信頼性の基礎、信頼性データ解析、信頼性設計(1)、信頼性設計(2)、信頼性試験と故障物理、信頼性マネジメント

【講師】

益田昭彦氏(帝京科学大学)、青木茂弘氏(日本鉄道電気設計株)、石田 勉氏(元 日本アイ・

ビー・エム株)、西 干機氏(元 宇宙航空開発研究機構)、山崎謙介氏(元 株日立製作所)

20 信頼性・保全性シンポジウム

1971年に第1回を開催し、その後、年1回継続開催し、2015年で第45回を数える。本シンポジウムでは、時流にあった講演をはじめ、一般の研究発表、企画セッションのプログラムで開催している。

展示コーナーの企画として、昼休憩を利用した「展示ブースツアー」(第43回から)と「ランチセッション」(第45回から)を実施している。

第10回から、推奨報文制度を設け、参加者の推薦のもとに本シンポジウム組織委員会にて、推奨報文賞、奨励報文賞を決定している。第45回までの受賞件数は、推奨報文賞94件、奨励報文賞23件である。

【信頼性・保全性シンポジウムメインテーマ】

| 回数 | 年 | メインテーマ |
|----|------|---|
| 36 | 2006 | 信頼性のフロンティア |
| 37 | 2007 | 安全と安心を守る「使用の信頼性」 |
| 38 | 2008 | グローバルビジネスにおける「品質と信頼性」-ブランド戦略のコア・コンピタンス- |
| 39 | 2009 | 信頼性と安全性の接点 |
| 40 | 2010 | 環境と信頼性・安全性の両立に向けて |
| 41 | 2011 | イノベーションと信頼性 -国際的協調と分業- |
| 42 | 2012 | イノベーションと信頼性 |
| 43 | 2013 | 信頼性、保全性 -材料、デバイスからシステムまで |

*第44回(2014年)以降はテーマを設定せず。



第45回信頼性・保全性シンポジウム

ソフトウェア品質

1 SPCからSQiPへの呼称変更

1980年に日本におけるソフトウェア製品の品質向上と効果の開発の方法論の確立を目指して設置された「ソフトウェア生産管理研究委員会」(Software Production Control), 呼称SPCは、本活動が「ソフトウェア品質に関する活動」とであるとわかりやすくすることと、ソフトウェア技術職という専門的矜持を大事にしたいという思いから“Profession”を加えて、2007年にSQiP (Software Quality Profession) に改称した。また、正式名称も「ソフトウェア品質委員会」に改称した。

2010年8月には、活動30周年を記念して『SQiP 30周年記念誌』を発行するとともに、ソフトウェア品質シンポジウムの懇親会とあわせて30周年記念パーティーを開催した。

委員長は、初代菅野文友氏(岩手大学)から飯塚悦功氏(東京大学)に引き継がれ、現在は3代目となる野中 誠氏(東洋大学)のもと、ソフトウェアの品質向上を目指して様々な活動を展開している。



【委員長在任期間】

- 菅野文友氏 (1980年5月～1994年3月)
- 飯塚悦功氏 (1994年4月～2012年3月)
- 野中 誠氏 (2012年4月～現在)

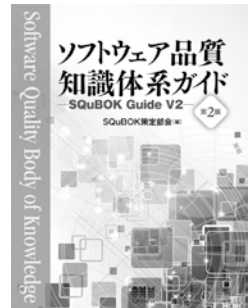
2 ソフトウェア品質知識体系ガイド (SQuBOK® Guide) の発行

ソフトウェア品質の暗黙知の形式知化、最新のテーマの整理と体系化を目的として、2007年に日本発のBOKとして、『ソフトウェア品質知識体系ガイド -SQuBOK Guide-』(SQuBOK策定部会編, オーム社) を発行した。同ガイドは、2008年度の日経品質管理文献賞を受賞した。

2014年9月に、その後のソフトウェアを取り巻く環境の変化を反映して、第2版を発行した。主な改訂点は、「開発技術の拡充」「安全、安心への対応」「国際規格改定への対応」である。

第1版、第2版の発行累計は2015年現在、10,000部を超えている。2011年には中国語版を発行し、現在、英訳の作業を進めている。

また、第1版発行に当たって記者会見ならびに発表記念講演会を、第2版発行に当たって発行記念講演会を実施し、SQuBOK®の内容だけでなく、SQuBOK®を核とした今後のSQiP活動について広く紹介した。



【SQuBOK 発表記念講演会】 *第1版発行時

東京：2007年12月10日

(日科技連・本部)

*講演会の前に記者会見を実施

大阪：2008年2月9日

(関西大学・天六キャンパス)

【SQuBOK 発行記念講演会】 *第2版発行時

東京：2015年2月9日 (日科技連・本部)

大阪：2015年2月9日 (中央電気倶楽部)

*オンラインライブスタイルで開催



記者会見の様子

3 ソフトウェア品質管理セミナー 実践セミナー

ソフトウェア品質のとらえ方の変化とともに、品質管理、品質保証、マネジメントにとどまらず、プロセス改善、プロジェクトマネジメント、開発手法、レビュー、テスト、メトリクス、資格対応コースなど、多岐にわたるセミナーを新規に開講した。

また、2011年には、集合教育に加え、eラーニング「ソフトウェア品質技術者セミナー」を開講し、2013年には東京会場で実施するセミナーを大阪・名古屋などの遠隔地会場へ同時中継して実施するオンラインライブセミナーを開始した。

[新規セミナー]

2010年

- ・ソフトウェア品質技術者初級セミナー
- ・基礎から学ぶソフトウェアメトリクスセミナー
- ・実践！ソフトウェア品質保証のためのメトリクス活用セミナー
- ・テスト技法とテストケース演習：入門コース
- ・ソフトウェア品質保証技術実践セミナー
- ・モダンソフトウェア テストアカデミー
：プロフェッショナルコース

2011年

- ・2日でマスターするソフトウェアテスト

2012年

- ・JSTQB認定ソフトウェアテスト技術者-Foundation Levelトレーニングコース
- ・ソフトウェアテスト技法ドリルセミナー
- ・実践！直交表、All-pair法を用いた組合せテストと状態遷移テスト修得セミナー
- ・ソフトウェア品質部門のためのXDDP入門コース
- ・XDDPの導入、活用による開発プロセスの改善セミナー

2013年

- ・データ指向のソフトウェア品質マネジメントセミナー（基礎編・技法編）

- ・今日明日の実業務で使用するソフトウェア品質向上のためのなぜなぜ分析セミナー
- ・実践！エンジニアのためのチームビルディングセミナー
- ・現場で効果をあげる「ソフトウェア品質会計」の適用方法（初級）
- ・CFD⁺⁺：論理の設計とテストの技法
：開発技術者向け

2014年

- ・実践！SaPIDによるソフトウェア開発のプロセス改善のための自律改善セミナー
- ・ソフトウェア品質向上のためのなぜなぜ分析活用事例フォローアップセミナー

[オンラインライブセミナー]

- ・基礎から学ぶソフトウェア品質マネジメントセミナー
- ・XDDPの導入、活用による開発プロセスの改善セミナー
- ・JSTQB認定ソフトウェアテスト技術者-Foundation Levelトレーニングコース

4 ソフトウェア品質シンポジウム (SQiPシンポジウム)

1981年に第1回を開催以降、年1回継続開催し、2015年で第34回を数える。2009年から半日の講義スタイルの「併設チュートリアル」と2日間の「本会議」で構成するスタイルで実施している。

参加者は一時、日本の景気減退とともに減少傾向であったが、2010年以降上昇傾向に転じ、2015年は3日間で延べ1,600名以上を集め、「ソフトウェア品質」に関する日本国内最大級のイベントに成長した。

コンセプトは「聴く、考える、話す」。ソフトウェアの品質向上を目指して、実際に企業で取り組んだ実践事例や最新のレビュー・テストの技術方法論などの一般論文発表のほか、時流にあった講演、セッションを企画している。

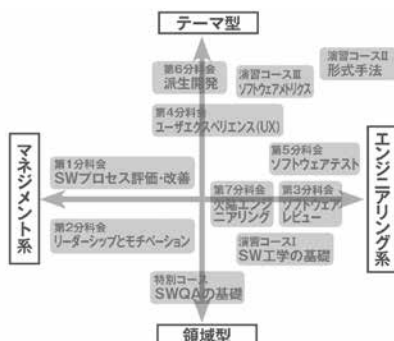
▶ SQiPシンポジウム

<http://www.juse.jp/sqip/symposium/>

5 ソフトウェア品質管理研究会 (SQiP 研究会)

1985年の発足から30年以上にわたり継続開催しており、2015年で第31年度を数える。各種製造業や建設業などから、ソフトウェア開発に携わる管理者、技術者、品質管理担当者など、参加者は延べ1,600名以上にのぼる。

ソフトウェア品質技術について、企業の枠組みを超えてメンバーが一堂に会して共同研究を行うスタイルはそのままに、現在「研究内容の更なる質の向上」「習得スキルの実務適用の定着化」を活動の2本柱に、SQiPシンポジウムや他学会への論文投稿へのチャレンジ、実践事例紹介の場の提供、情報交換などによるコミュニティの形成をはかっていくことを目標に、活発に活動している。定例会のほか、研究会の存在を広く知ってもらうことを目的に、2011年から「ミニシンポジウム」(2014年からは「OPEN DAY」に改称)を、本研究会の活動を実際に体験できるイベントとして企画・開催している。



第31年度分科会テーマの位置づけ



分科会討論風景 (2015年7月の合宿)

6 ソフトウェア品質保証部長の会 ソフトウェア品質保証責任者の会の設立

ソフトウェアが私たちの生活の中で必要不可欠なものとなり、その品質の重要性が高まるにつれ、ソフトウェアの品質に責任を持つ部門の担う役割がますます大きく、また、重要になってきたことから、2009年11月にソフトウェア品質保証部門の長による「ソフトウェア品質保証部長の会(以下、SQiP部長の会)」を設立した。識者による講演やグループディスカッションを通して、品質保証戦略の立案や組織体制の構築、品質保証業務の改善、効果的な品質保証活動の事例の作成、開発現場への普及推進などについて議論し、技術交流・情報交換を行い、その成果をSQiPシンポジウムや成果発表会などで広く発信するなど、活発に活動中である。2015年11月に第7期の活動がスタートした。

また、SQiP部長の会が東京開催のため、関西からの参加者の移動負担を軽減するべく、2011年に大阪に「ソフトウェア品質保証責任者の会」を設立した。対象を部門長職に限らず、品質に責任を負う方を広く対象とすることで、様々な立場・観点からの議論ができる場となっている。

7 世界ソフトウェア品質会議

1995年から全世界のソフトウェア品質の専門家が集まり、幅広く議論を行う国際会議として世界ソフトウェア品質会議(WCSQ: World Congress for Software Quality)を、ASQ(アメリカ品質協会)、EOQ(ヨーロッパ品質機構)、日科技連の3団体に運営している。

第1回会議を1995年にアメリカ・サンフランシスコで開催したのを皮切りに、これまで第2回(2000年)日本・横浜、第3回(2005年)ドイツ・ミュンヘン、第4回(2008年)アメリカ・ワシントンD.C.、第5回(2011年)中国・上海、第6回(2014年)イギリス・ロンドンで開催した。

第5回会議では、世界各国52件の発表の中

から選ばれた6件のAwardのうち4件を日本の発表が受賞し、日本の“ソフトウェア品質力”のレベルの高さを世界に証明した。



5WCSQ Award 受賞者

8 ASQNの設立

ASQN (Asian Software Quality Network) は、アジアの国際競争力強化、アジアにおけるソフトウェア品質に関わる技術、経験、人材の相互交流を目的として、2013年に設立されたネットワークである。参加国は中国、日本、韓国、マレーシアをはじめとするアジア諸国で組織され、日本は日科技連が事務局を担っている。

2013年に第1回がマレーシア・クアラルンプールで、2014年に第2回が中国・上海で開催され、2015年には第3回をカンファレンスとして東京の東洋大学・白山キャンパスにおいて開催した。



9 ソフトウェア品質国際ワークショップ

1989年に第1回ソフトウェア製品品質管理調査団を海外に派遣以来、2002年の第13次までは欧米を中心に、2003年以降はソフトウェア品質国際ワークショップとして、アジア地域に調査団を派遣してきたが、2007年の第22次のベトナム訪問を最後に派遣は終了した。

10 SQiPポータルサイトの設置

ソフトウェア品質に関して、一般に広く最新情報を発信し、蓄積してきた知識・技術などの

成果を公開することを目的に2008年にポータルサイトを設置した。サイト上での主な活動は以下の通り。

■ソフトウェア品質実態調査の実施

日本のソフトウェア品質に関する様々な課題の改善・向上のための活動の一つとして、2012年8月に第1回「ソフトウェア品質実態調査」を実施した。ソフトウェア品質に関する実態と変化を把握するため定期的に行っている。

本調査の結果はシンポジウムで発表するとともに、Webでも公開している。

■『ソフトウェア品質のホンネ』を開始

2005年に発行したソフトウェア品質のための総合雑誌『クオリティワン』は、紙媒体からWebマガジンへと発行媒体を変え、2011年に発展的解消した。ポータルサイトの内容充実の一環として、2011年にSQiP運営委員のソフトウェア品質へのその思い・体験をコラム的に綴る『ソフトウェア品質のホンネ』を開始した。

■SQiPライブラリの設置

SQiP研究会やSQiPシンポジウムなどで得られた研究成果や論文などを一般公開している。「SQiPBOK®分類検索」「フリーワード検索」で自在に検索できる。

研究会やシンポジウムなどの活動で得た成果を公開してあります。
ソフトウェア品質実態調査にお役立てください。

検索欄: [フリーワード検索] [SQiPBOK®分類検索]

SQiPBOK®とは? SQiPBOK®分類検索 キーワード検索

12件の資料が見つかりました。

| プロジェクト特性に見合ったレビュープロセスの運用と... | 詳細 |
|---|---------------|
| <p>SQiPBOK分類: 2.1.7 レビューのマネジメント、2.19.2 プロセス品質の分析・評価、3.8.1 レビュー方法、3.8 レビューの技法、3.10.4.7 レーダーチャート</p> <p>年度: 2014年 分科会: 第3分科会「ソフトウェアレビュー」</p> <p>執筆: 伊藤 清子 (キヤノンソフトウェア)、井田 達也 (テックスエンジニアリング)</p> <p>紹介文: 改善推進側の立場から、『プロジェクト特性に見合ったレビュープロセスの運用とレビュー成熟度に応じたレビュー改善』を客観的な診断に基づき推進する手法を提案している。また、その診断を各プロジェクトが簡単に自己診断するためのツールも開発しており、プロジェクトが自立的にレビュー改善を推進できるように工夫されている。</p> | ダウンロード数: 700回 |

▶ SQiP Library

<http://www.juse.jp/sqip/library/>

医薬統計・医薬関連

1 臨床試験セミナー統計手法専門コース 20周年記念行事

2010年3月20日に「臨床試験セミナー統計手法専門コース」(以下、BioS) 20周年記念特別セミナー、記念シンポジウム、記念パーティをホテルサンルート有明にて行った。

BioSは、製薬企業、医薬品開発業務受託機関、研究者主導研究を推進する機関で臨床研究に携わる統計解析家の養成を目的として、1989年に開設された。毎月2日間×12ヵ月、計24日間コースで、20年間で約1,100名の修了者を輩出してきた。

記念シンポジウムの後に催された記念パーティでは、第1回から第20回までの参加者・講師の方々が集い、話がつきることなく、交流の場となった。

*以下、○ BioSは受講生が卒業した開催回数

■ 記念特別セミナー

医薬・医療に関する最新の話題をテーマに2つの講義を行った。

「がん臨床試験デザイン フェーズ I, II」

柴田大朗氏 (国立がんセンター) * 7 BioS

「ゲートキーピング法による多重性の調整」

松山 裕氏 (東京大学) * 3 BioS

■ 記念シンポジウム

BioSを卒業し、各職場で活躍されている方による、受講当時の思い出からBioS卒業生のキャリアパスにつながる将来に向けた講演があった。

【プログラム】

開会の挨拶：吉村 功氏

(東京理科大学名誉教授)

「BioSの現状」

浜田知久馬氏 (東京理科大学) * 2 BioS

「アジアにおける臨床試験：将来展望」

巖 浩氏 (イーピーエス株) * 1 BioS

「CDISC標準」

木内貴弘氏 (東京大学医学部附属病院)

* 1 BioS

「PMDAにおける生物統計担当の役目」

上村鋼平氏 (医薬品医療機器総合機構) * 15 BioS

「橋渡し研究におけるデータセンターの立ち上げを経験して」

伊藤陽一氏 (北海道臨床開発機構) * 9 BioS

「医療・医薬分野における情報化とヒューマンウエア」

渡辺敏彦氏 (株ベルシステム24) * 1 BioS

閉会の挨拶：大橋靖雄氏 (東京大学)



吉村 功氏



大橋靖雄氏

2 医薬統計・医薬関連セミナー

医薬統計のみならず、ニーズに合わせて多岐にわたる医薬関連セミナーを展開し、4つのセミナー(3~6のセミナー)を新規に開設し、全10コースとなった。

[既存セミナー]

- ・ 臨床試験セミナー 統計手法入門1日コース
- ・ 臨床試験セミナー 統計：実習基礎コース
- ・ 臨床試験セミナー 統計手法コース
- ・ 臨床試験セミナー 統計手法専門コース
- ・ メディカルライティング教育コース
- ・ 臨床データマネジメントセミナー

3 薬剤疫学セミナー

2005年9月に薬剤疫学セミナー特別コース（1泊）を箱根の山のホテルにおいて開催し、2006年から本格的に、毎月2日間×6ヵ月の計12日間コース（そのほか予備コースが2日間）として開設した。

2015年には、派遣者や参加者のニーズに応じて、毎月2日間×4ヵ月の8日間コースにリニューアルを行った。

[内容]

薬剤疫学の基本とともに、薬剤疫学に必要な手法の基礎などが学べる。

[運営委員長・講師]

久保田 潔氏（東京大学）

4 メディカルライティング実践コース

2001年に開設した「メディカルライティング教育コース」の卒業生から、さらに上級コースで学びたいという要望に応え、2008年に「メディカルライティング実践コース」を2日間コースとして開設した。

[内容]

プロトコル、治験総括報告書といった文書の作成を通して、正確、簡潔、かつわかりやすい文書を作成するための技術を習得できるように、演習を中心とした実践的な構成となっている。

[講師]

林 健一氏（アラメディック株）

5 臨床試験セミナー
医薬品開発基礎コース

2008年に医薬品開発に必要な知識の習得を目指す「臨床試験セミナー 医薬品開発基礎コース」を3日間×2ヵ月の6日間コースとして開設した。前期3日間は、モニターを含めた臨床開発担当者を対象とした入門編で、後期3日間は、医薬品開発プロジェクトリーダーを対象とした中級編のコースであった。

翌年2009年に「新薬開発プロジェクトリーダー育成コース」と改名し、2日間×4ヵ月の8日間コースとして、1月目の2日間を入門編、2月目～4月目の6日間を中級・上級編としたコース内容に改訂した。

2010年には、プロジェクトリーダーに必要な知識や技術が体系的に身につくように、2日間×5ヵ月の10日間コースに改訂して、さらに内容の充実をはかった。

[講師]

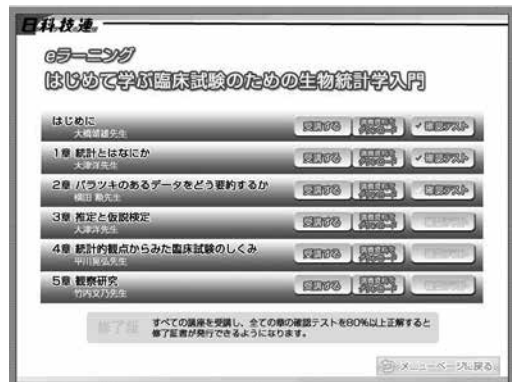
林 健一氏（アラメディック株）

6 eラーニング はじめて学ぶ臨床試験のための生物統計学入門

遠方のため、またはセミナー開催日に都合をあわせることが難しいという方のために、生物統計の概念を学べるeラーニングを2015年7月に開講した。

[内容] *標準学習時間6時間

統計とは何か？、バラツキのあるデータをどう要約するか、推定と仮説検定、統計的観点からみた臨床試験のしくみ、観察研究



QCサークル

1 QCサークル活動（小集団改善活動） 実態調査

QCサークル本部では、QCサークル活動（小集団改善活動）実態調査を、第1回（1979年）から定期的実施し、2009年に第7回、2014年に第8回を実施した。

第8回では、日科技連賛助会員、QCサークル支部・地区幹事会社を中心に各社の推進事務局から316名、リーダーから160名、QCサークル未実施企業の窓口担当者43名の方々から、回答を得た。

本調査は、QCサークル活動（小集団改善活動）を導入・推進している企業・組織の方々に、全国的な調査結果をもとに、自分たちの活動の位置付けや、QCサークル活動の「工夫」のための第一歩として活用してもらうことを目的としている。

各企業・組織のQCサークルリーダーやメンバーは、自分たちと世間水準との比較を、また、推進者は職場全体の分布の中心やばらつきも考慮しながら、「現状認識」に活用することができる。

職場を取り巻く環境の変化は著しく、それぞれの現場において「変化への対応力」が、これまでもまして重要になっている。現場で発生する様々な状況に適応できる「活き活きとした職場」を実現するために、QCサークル活動（小集団改善活動）の本質を理解し、実現するための工夫が求められている。

本調査結果は、品質月間テキストとして出版している（第7回調査：テキストNo.372、第8回調査：テキストNo.407）。



2 QCサークル本部登録システム

1962年から現在まで継続している「QCサークル本部登録制度」は、2006年10月に登録方法を紙媒体からインターネットへとリニューアルした。また、2015年4月から本システムを利用して、2014年度以降の全国大会の発表原稿を閲覧できるサービスを開始した。

▶ QCサークル本部登録システム
<https://juse-qcch.juse.or.jp/qc/>

■ QCサークル本部登録方法のリニューアル

リニューアル後、インターネットの活用により、QCサークルの実状や実数などが把握でき、必要な情報をリアルタイムに利用者に提供できるようになった。登録費用は無料である。

このリニューアルに伴い、新システムでQCサークルの登録を行っていただき、2015年11月30日現在1,447社／51,093サークルが登録されている。

[リニューアルの主な特徴]

- ① インターネットで簡単にQCサークルの登録、修正、削除ができる
- ② ペーパーレスが可能である
- ③ 24時間Webシステムが利用でき、リアルタイムでデータが確認できる
- ④ 自社のQCサークル情報が閲覧・出力でき、活動状況の分析ができる
- ⑤ 登録されているQCサークルの業種別、職種別、県別などのデータが入手できる

■ QCサークル全国大会（小集団改善活動） 発表原稿閲覧サービス

QCサークル本部では、企業・組織におけるQCサークル活動（小集団改善活動）によって得られた改善成果を発表する場として、全国各地でQCサークル全国大会（小集団改善活動）を毎年5回開催している。これまで大会当日に

参加者に配付していた大会要旨集は、2014年度から冊子に代えてCDを配付し、さらに事前に発表原稿を閲覧できるようになった。

2015年4月からは、本部登録サークルへの更なるサービスとして、2014年度以降の全国大会の発表原稿を閲覧（ダウンロード）できるサービスを開始した。本サービスは、各社の現場の問題解決に活用したり、優秀な事例から技術力のある企業の発見など様々な場面に役立てることができる。

本部登録したサークルは、全国大会で発表することができるほか、全国大会へ本部登録メンバー料金で参加できる。本システムの活用とあわせて全国大会に参加することで、より効果的な学びの機会となる。

3

QCサークル大会

QCサークル全国大会（小集団改善活動）

1963年5月に仙台で第1回を開催したQCサークル大会は、現在もQCサークル支部・地区の協力により全国各地で年間100回以上開催し、2015年現在5,700回以上を数える。

QCサークル本部が主催する年5回のQCサークル全国大会（小集団改善活動）は、ここ数年は製造業以外にも、事務・販売・サービス〔医療・福祉含む〕部門からの発表、また近隣国の中国からの発表エントリーも増えてきている。

全国大会での発表、聴講者の多くは、社内大会などで優秀な成績をおさめたサークルも多く、大会への参加は企業内では成果への報酬、企業貢献としての位置付けも大きく、サークルメンバーの目標となっている。

特に札幌、宜野湾大会では、発表件数が160件以上にもおよび、職場の問題解決、コストダウン、品質向上、工数低減などの体験事例が発表され、各社・組織における改善のベストプラクティスが集まるといっても過言ではない。

大会は2日間で開催し、初日は各会場に分かれての体験事例発表の後、講演を行っているほか、1996年の一関大会からは、感動と共感を覚えた発表サークルに対し参加者全員が投票・

選出し表彰する、みんなで選ぶ大会賞「QCサークル感動賞」の授与を行っている。

2日目の午前には、各支部から推薦された優秀な改善事例の招待発表が行われ、発表サークルには、「QCサークル本部幹事長賞」の楯が贈られる。午後は、近郊企業への事業所見学交流会や各地の産業・風土・文化を見学する産業見学会を実施しており、参加者から好評を得ている。

4

第5000回記念QCサークル全国大会

（小集団改善活動）

QCサークル全国大会（小集団改善活動）は通算5,000回を迎え、2008年5月22日～23日に日本青年館（東京）にて第5000回記念大会を開催した。「QCサークル活動の温故知新—新たな飛躍に向けて—」を大会テーマに、(株)小松製作所の坂根正弘氏による基調講演、日本体育大学女子短期大学部の山本 博氏による特別講演があった。体験事例発表は87件行われ、近年の活動の拡がりを反映し、福祉・医療関係のほか、中国からも発表があった。

また、本大会の目玉企画として、特別企画公開インタビュー「QCサークル活動（小集団改善活動）の本音を聞かせて」が行われた。現場最前線のメンバーと推進者の両側の意見が飛び交ったインタビューは、活動に取り組むうえで参考になる意見を多く聞くことができた、との声に参加者から多く寄せられた。

同大会と併催で「第1回事務・販売・サービス〔含む医療・福祉〕部門全日本選抜QCサークル大会（小集団改善活動）」を開催した。



公開インタビュー

5 全日本選抜QCサークル大会 (小集団改善活動)

全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)は、1970年の第1回からQCサークル活動(小集団改善活動)の「甲子園」と称し、毎年、日比谷公会堂(東京)で開催してきた。第40回(2010年)までは日比谷公会堂で行ったが、会場の老朽化などの問題もあり、第41回(2011年)から、東京ビッグサイトへ会場を移すこととなった。

本大会では、QCサークル各支部から推薦されたサークルの地道な努力とチャレンジ精神、人と人との絆、個の力と輪の力の連携、ベテランの知恵と工夫、若手の成長、改善力の向上など、活動を通じた日頃の成果が発表され、毎回レベルの高い内容となっている。

2015年11月10日に第45回大会が開催され、8サークルに本部長賞金賞が、10サークルに本部長賞銀賞が授与された。



授賞式

6 事務・販売・サービス(含む医療・福祉)部門 全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)

事務・販売・サービス部門などの全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)の開催を望む声を受けて、2008年に新設した大会である。第1回は前述の第5000回記念QCサークル全国大会(小集団改善活動)と併催で行われ、2015年6月に第8回大会が開催された。

これまでに91サークルが出場し、事務・販売・サービス部門に加え、病院、福祉施設や自衛隊など、様々な職場からの発表が行われている。

全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)と同様に、出場サークルには、本部長賞金賞または銀賞が授与される。

7 QCサークル活動(小集団改善活動) 優良企業・事業所表彰の創設

本表彰は、QCサークル誕生50周年を記念し、長年にわたり企業・組織の本社・事業所・工場などにおけるQCサークル活動(小集団改善活動)の更なる発展を期して、2012年に制定し、2013年から実施した表彰制度である。

職場の活性化・レベルアップをはかり、支部長会社、地区長会社、幹事会社として、地域の活性化に大きく貢献している企業・事業所を表彰し、活動の更なる発展と飛躍につなげることを目的としている。

表彰は次のすべてに該当し、他の模範となる企業・事業所を積極的に表彰する。

- (1)QCサークル活動(小集団改善活動)の基本理念に則り積極的な活動を展開し、企業・組織の体質改善・発展と地域社会に貢献している企業・事業所
- (2)企業・組織が目指すべき活動に積極的に取り組み、職場の活性化をはかっている企業・事業所
- (3)継続して支部・地区活動の活性化・発展に貢献している企業・事業所または、幹事会社として長年にわたり地域の活性化に大きく貢献している企業・事業所

表彰式は、各支部の総会や大会で行い、表彰状と楯が授与される。2015年度までに39組織が表彰されている。



表彰楯

8 QCサークル本部幹事長賞の創設

本賞は、QCサークル誕生50周年を記念し、QCサークル活動（小集団改善活動）の一層の活性化と更なる企業・組織の品質改善・向上を目的として2012年に制定し、2013年から全国大会での発表、賞の授与を実施した。

年度ごとに各支部から1件のサークルが推薦され、受賞サークルは、全国大会のプログラムで行われる「支部推薦 優秀改善事例招待発表」にて発表を行い、QCサークル本部幹事長賞の楯が贈られる。

受賞サークルは、各支部で開催している改善事例大会やチャンピオン大会などで選考された支部を代表する優秀なサークルで、全国のQCサークルの模範となるサークルである。

2015年度は8サークルの受賞が決定しており、受賞件数はこれまで以上に25サークルとなった。



表彰楯

9 QCサークル洋上大学 QCサークル ASEAN訪問・洋上研修

QCサークル誕生50周年を迎え、本研修の更なる発展を期して、2013年に名称を「QCサークル洋上大学」から「QCサークル ASEAN訪問・洋上研修」に改称し、経済成長著しい魅惑の市場・ASEAN地域の「新たなものづくり国」を訪問している。1971年に第1回を開催し、2015年で第57回を数える。

本研修は、船内研修と海外での企業見学交流、現地研修により、発展する新興国から新たな「価値観」を学び、一人ひとりが見識を高めて「明日の日本の「ものづくり」を担う人材への成長」、いわゆる次世代に求められる日本の「グローバル人材」の育成に主眼を置いている。

時代に求められる価値ある製品とサービスを提供するため、職場第一線で活躍する社員、ス

タッフ、管理・監督者が、日常とは異なる環境から得られる参加者との一体感と現地のQCサークルとの相互の交流を通して見聞を広め、「社員の意識改革」と「考える人材の育成」をはかり、人間力・仕事力と、職場力・組織力・企業力の向上をはかっている。



第57回集合写真

10 QC手法基礎コース

品質管理の基本的な考え方やQC七つ道具を講義だけでなく演習を交えた参画型カリキュラムであり、初めて品質管理・QC手法を学ぶ方でも品質管理の基礎を速修できるコースとして2006年に開設した。

[内容] 2日間

品質管理、データのとり方・まとめ方、問題解決の手順、個人演習、グループ演習など

[講師]

岡田高美（日科技連）、池部信夫氏（株QMI）、平野綾子氏（統計コンサルタント）、保科昇氏（元日本ビクター株）ほか

11 品質改善のための問題解決力実践コース

「問題解決力」の向上に不可欠な知識力、コミュニケーション力、解析力など8つの力の向上をはかり、講義・グループ演習を通じてデータの収集のポイント、目的に応じたQC手法の使い方、問題解決の手順を用いた効果的改善方法、効果的なプレゼンテーション方法を習得するコースとして、2006年に開設した。

[内容] 4日間

問題解決力自己診断, 品質管理, QC七つ道具, QC的ものの見方・考え方, 問題解決の進め方, 問題解決力向上演習など

[講師]

岡田高美, 瀧沢幸男, 鈴木 聡, 松田啓寿 (日科技連) ほか

12 お客様へのサービス向上のための 問題解決力実践コース

どうすればお客様へのサービス向上ができるのかを, サービスクオリティとQC的ものの見方, 考え方の観点から解説し, グループ演習を通じて実践的に活用, 体得するコースとして, 2006年に開設し, 2011年度まで実施した。

[内容] 2日間

問題解決力自己診断, 顧客満足の考え方と向上, サービスクオリティ実現のステップ, QC的ものの見方・考え方, お客様へのサービス向上に役立つ手法, 問題解決力向上演習など

[講師]

池部信夫氏 (株QMI), 金子憲治氏 (サービス経営研究所)

13 人を育てるコーチングセミナー

コミュニケーションを豊かにし, 人の無限の能力を引き出すツールとして, リーダー, 管理者の必須アイテムである「コーチング」を学び, コミュニケーションスキルの講義にとどまらず, エクササイズ (体験学習) を通じて「人づくり」「組織づくり」「QCサークルの運営」に活用できるセミナーとして2007年に開設した。

[内容] 2日間

人を育てるコーチング, 時代の変化が求めるもの, コミュニケーションとは, コーチングとは, コーチングの実践と大切な3つのスキル (傾聴のスキル・承認のスキル・質問のスキル), コーチングと自己形成など

[講師]

国分正義氏 (つくば品質総合研究所)

14 施策実行型QCストーリーセミナー

「施策実行型QCストーリー」について理解し, 手順を習得するセミナーとして2007年に1日コースとして開設した。2013年度から, 改善における3つの型 (問題解決型, 課題達成型, 施策実行型) の各ストーリーの使い分け, 正しい選択の仕方などを加えてカリキュラムの改定を行い, 2日間コースとした。

[内容]

改善と問題解決型QCストーリー, QCストーリーの選択, 施策実行型QCストーリーのポイント, 事例に学ぶ (問題解決型, 施策実行型), グループ演習など

[講師]

須加尾政一, 羽田源太郎 (日科技連)

15 現場力を高める「見える化」と「ムダ取り」 の実践セミナー

「見える化」によって生産活動の問題や異常を浮き彫りにし, 価値を生まない「行動 (動作), もの, 仕組み, ルール」のムダを徹底的に排除して, 利益を創出する企業体質を構築するためのノウハウを習得するセミナーとして2010年に開設した。

[内容] 1日

職場の競争力向上と現場力向上, 「見える化」, 「ムダ取り」, 職場の管理と改善, 一人ひとりの「品」の質向上と「個」有技術向上, 演習 (グループワークの出来ばえ向上とムダ排除で時間短縮をはかる) など

[講師]

市川享司氏 (パワーアップ研究所), 瀧沢幸男 (日科技連)

16 なぜなぜ分析2日間実践セミナー

問題 (事象) に対する明確な「なぜなぜ分析」の展開方法を習得し, 論理的に「なぜなぜ分析」を正しく展開するノウハウを具体的に学び, 的確な再発防止策を導き出す改善力を養う

セミナーとして2011年に開設した。

[内容] 2日間

原因追究の盲点、なぜなぜ分析の狙い、なぜなぜ分析10則、なぜなぜ分析演習（個人・グループ）など

[講師]

小倉仁志氏（㈲マネジメントダイナミクス）

17 QC検定3級対応セミナー

QC検定レベル表の3級出題範囲から、3級合格に向けた“傾向と対策”について講義。過去の出題問題から理解度テストを実施し、“検定試験への適応力を身につける”ことを目的とするセミナーとして2012年に開設し、2013年度まで実施した。

[内容] 2日間

QC検定3級のポイント（実践編、手法編）、QC的ものの見方・考え方、管理と改善の進め方、プロセス管理、問題解決型QCストーリー、検査および試験、標準化、データの取り方・まとめ方、QC七つ道具、新QC七つ道具など

[講師]

福丸典芳氏（㈲福丸マネジメントテクノ）ほか

18 人間力・現場力を高めるワンポイント講座

力のある“人財”「自立型人材（財）」となるために、問題発見・解決する組織力、コミュニケーション力、変化への対応力、チャレンジ精神、創造性など「人間力・現場力を高める」ための方法を学ぶ講座として2012年に開設し、2014年度まで実施した。

[内容] 1日

企業経営と品質管理の基本、良い仕事の進め方、改善活動の着眼点、教育・訓練で自己磨き、職場の人間関係・コミュニケーションの向上、グループ討論など



[講師]

市川享司氏（パワーアップ研究所）

19 現場力強化のための人為ミス未然防止セミナー

ポカミスやヒューマンエラーといった人的要因によるミス（人為ミス）を未然に防止するために、作業手順や判断の中からできる限り“あいまいさ”を取り除いた日常管理手法である「A-KOMIK」を習得するセミナーとして、2015年に開設した。

[内容] 1日

未然防止の考え方、A-KOMIKの基本スキルと目指す姿、教える教科書（指導マニュアル）の作成演習、すぐに使える未然防止10のヒントなど

[講師]

中山賢一氏、富澤祐子氏（A-KOMIK指導講師）

| | |
|---------------------------|----------------------|
| エイ コミック A-KOMIK | |
| A ：あいまいさを見つける | M ：守らせる |
| K ：決めごとを決める | I ：異常を見つけ処置する |
| O ：教える | K ：改善する |

20 問題解決・QC手法指導のインストラクター養成講座

QCサークルのメンバー・リーダーが陥りやすい、間違った「問題解決の進め方」「QC手法の作り方・使い方」「なぜなぜ分析の活用」について、指導ポイントと教え方のノウハウを実例から学ぶ指導者育成のためのセミナーとして、2015年に開設した。

[内容] 1日

「問題解決の進め方」「QC手法の作り方」「なぜなぜ分析の活用」に対する指導ポイント、教え方、指導方法のポイントなど

[講師]

瀧沢幸男（日科技連）

ISO審査・登録

1 食品安全マネジメントシステム

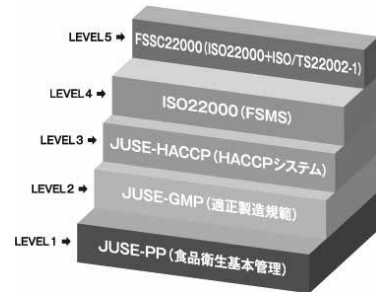
各国において年々増える食品事故や事件を背景に、フードチェーンにおいて食品の安全な提供に関わる様々なリスクを低減し、HACCPの食品衛生管理手法をもとに、消費者への安全な食品提供を可能にするための食品安全マネジメントシステム規格が2005年9月に発行された。

日科技連は、2008年8月に日本適合性認定協会（以下、JAB）より認定を受けた。全国各地での導入説明会や、時宜を得た食品安全上のテーマを掲げた特別講演会を多数開催し、食品業界における一般的衛生管理の必要性、自組織の業態や特性に合った管理手段の選択などについて理解を深める機会を提供してきた。

ISO 22000の審査対象である全13カテゴリの中で、業界最多の12カテゴリ（K：装置の製造以外）の認定を受け、幅広い分野に対応できる体制を整えた。審査登録件数は、2015年現在、100件を超え、業界第2～3位である。

また、「日科技連総合的食品安全管理認証システム」を同時に立ち上げた。これは、各事業者の目的や規模、衛生管理体制の程度に合わせての取り組みが可能な認証システムで、現在の管理レベルを把握するギャップ診断としても活用されており、今後ますますの需要が見込まれる。
[日科技連総合的食品安全管理認証システム]

- ・ JUSE-PP
一般的食品衛生管理の視点でのチェック
 - ・ JUSE-GMP
適正製造規範の視点でのチェック
 - ・ JUSE-HACCP
HACCP手法に基づく安全管理システム
- ▶ JUSE-PP/GMP/HACCP
<https://www.juse-iso.jp/jusepp/>



日科技連総合的食品安全管理認証システム概念図

2 GFSI食品安全認証スキーム

国際食品安全イニシアチブ（GFSI）の食品安全認証スキームの一つでもあるFSSC 22000を、すでに審査登録事業を行っていたISO 22000とともに2011年4月から審査登録事業を開始し、2012年5月にJABより認定を受けた。
[認定を受けているカテゴリ]

- C：加工1（腐敗し易い動物性製品）
農業生産後のすべての活動、例えば、と殺を含む
- D：加工2（腐敗し易い植物性製品）
- E：加工3（常温での長期保存品）
- L：（生）化学製品製造
- M：包装材料製造

3 情報セキュリティマネジメントシステム

これまでBS7799に基づいた国内での認証基準（ISMS Ver.2.0）から、ISMS認証基準としての国際規格ISO/IEC 27001が2005年に発行され、JIS Q 27001を認証基準とした国際的な制度へと移行された。日科技連は、2002年11月に国内で5番目の審査登録機関として日本情報経済社会推進協会（以下、JIPDEC）より認定を受けた。

登録組織は、情報関連企業を中心に他業種での認証も多く見られる。審査登録件数は、2015年現在、260件を超え、業界第3～4位である。

4 ITサービスマネジメントシステム

「組織におけるITサービス運用管理の品質を継続的に向上させることによりわが国のITサービス全体の信頼性の向上に貢献することを目的にした」規格として2007年に発行され、認証制度も同時にスタートした。日科技連は、2007年11月に国内で4番目の審査登録機関としてJIPDECより認定を受けた。審査登録件数は、2015年現在、15件を超え、業界第3位である。

5 ISO 27001とプライバシーマーク 同時審査を開始

かねてから、各組織様から寄せられていた声として、ISO 27001とプライバシーマーク(PMS)の同時(同日)審査を可能にすべく、2012年8月に情報サービス産業協会(JISA)と業務提携を締結した。

[同日審査の主なメリット]

- ・ISMSとPMS両方の専門性を有する審査員が担当することで、それぞれのマネジメントシステムの構築度合い、運用状況、成熟度を的確に捉えたばらつきの少ない柔軟な審査が可能となる。
- ・審査回数も削減でき、受審準備や審査対応にかかる事務局の負担を軽減できる。

6 事業継続マネジメントシステム

企業を取り巻く環境が犯罪やテロ、自然災害など不測の事態をどう克服するか、最小限に食い止めるかが問われる状況において、その時代のニーズに応えるべく、日科技連ではBS 25999-2を認証基準に、2009年10月に審査登録事業を開始した。

7 ASRPがJABより認定される

ISO 9001, 14001を適用規格にしたもので、組織のマネジメントシステムの成熟度に応じた

審査方法を日科技連が設計し、実施するための手順であるASRP(先進的サーベイランス・更新審査の手順)について、2010年6月にJABより認定を受けた。

各組織が実施している内部監査に審査員が立会うことにより、組織で行う内部監査のレベルアップにつながり、かつ、マンネリ化の打破にも有効であるため、今後さらに注目される審査手法である。

8 マネジメントシステム監査員検定制度

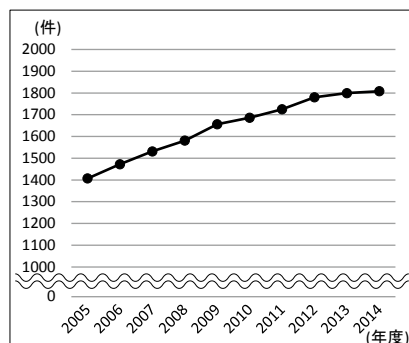
マネジメントシステムの有効性を高めるための重要な要素である、監査員(内部監査員、第三者監査の監査員など)の力量向上とその力量の把握を目的として、2011年に「マネジメントシステム監査員検定」を設けた。2015年現在、9回実施し、受験者数は約6,400名である。



9 道路交通安全マネジメントシステム

道路交通事故による死亡・重傷事故の徹底撲滅を目的として2012年11月に発行された規格をもとに、日科技連では2012年12月よりパイロット審査を開始した。審査登録件数は、2015年現在、10件を超え、業界第2～3位である。

また2014年4月より、自組織の管理レベルの現状把握・現状から見える改善点の洗い出しにつながる「道路交通安全ギャップ診断」を立ち上げた。



ISO 審査登録センター登録件数の累積推移

ISO研修

1 品質マネジメントシステム

「ISO 9000 審査員研修コース」は、2014年度から5日間連続コースに加え、分割コースを実施した。「ISO 9000 プロセスアプローチによる内部監査技法習得セミナー」は、2007年度に新設し、2013年度まで開催した。

2008年12月にJIS Q 2008:2008が発行され、改正に伴う内容の解説については、「要求事項の詳細解説コース」にて対応した。

2008年版の改正の目的は、①要求事項の明確化、曖昧さの除去、②ISO 14001との整合性の向上のため、要求事項の追加や変更はなく、追補改正版であった。

[2015年開催コース]

- ・ ISO 9001 入門コース (1日)
- ・ ISO 9001 要求事項の解説【移行対応】コース (1日)
- ・ ISO 9001 内部監査員コース (2日)
- ・ ISO 9001 内部監査員スキルアップコース (2日)
- ・ ISO 9001 CPD 対応コース (1日)
- ・ JRCA 承認ISO 9000 審査員研修コース (5日)

2 環境マネジメントシステム

「ISO 14000 審査員コース」は、1998年に開設し、2013年まで開催した。

[2015年開催コース]

- ・ ISO 14001 入門コース (1日)
- ・ ISO 14001 要求事項の解説【移行対応】コース (1日)
- ・ ISO 14001 内部監査員コース (2日)

3 情報セキュリティマネジメントシステム

「ISMS 審査員研修コース」は、2004年に開設し、2014年まで開催した。

新規コースは、2006年に「ISMS 入門コース」と「経営者のためのISMS 1日コース」(2006年のみの実施)を開催し、2010年から「ISMS リフレッシュコース」(現 ISMS CPD コース)を開催した。

2013年にISO/IEC 27001の改正があり、2014年3月にJIS Q 27001:2014が発行された。改正に伴う解説については、「要求事項と管理策の詳細解説コース」にて実施した。

[2015年開催コース]

- ・ 情報セキュリティと個人情報保護法の実践コース (1日)
- ・ ISO/IEC 27001 入門コース (1日)
- ・ ISO/IEC 27001 要求事項と管理策の詳細解説コース (2日)
- ・ ISO/IEC 27001 内部監査員コース (2日)
- ・ ISO/IEC 27001 CPD 対応コース (1日)

4 食品安全マネジメントシステム

食の安全性への取り組みが重要視される中、食品安全マネジメントシステム(FSMS)の国際標準規格ISO 22000が2005年9月に発行された。同年、FSMSの全体像を習得できるファーストステップコースとして、「ISO 22000 食品安全マネジメントシステム入門コース」を開催した。

2007年には、「ISO 22000 食品安全法規 完全マスターコース」と「ISO 22000 食品安全マネジメントシステム構築・運用コース」を開催した。さらに2009年には、「ISO 22000 食品安全マネジメントシステム要求事項の解説コー

ス」を開催した。

[2015年開催コース]

- ・ ISO 22000 入門コース（1日）
- ・ ISO 22000 構築運用コース（2日）
- ・ ISO 22000 内部監査員コース（2日）

5 ISO/TS 16949 コース

2004年から開催しているISO/TS 16949関連のセミナーは、2015年現在、下記2コースを開催している。

- ・ ISO/TS16949 要求事項の解説コース（2日）
- ・ ISO/TS16949 内部監査員コース（2日）

6 道路交通安全安全マネジメントシステム

道路交通安全のために組織が取り組むべき要求事項を定めた規格（ISO 39001）が2012年に発行された。同年、「道路交通安全マネジメントシステム入門コース」を開催した。

2015年現在、「ISO 39001 入門と要求事項の解説コース」（1日）を開催している。

7 そのほか新規セミナー

- ・ 労働安全衛生マネジメントシステム内部監査員コース（2日） * 2008年7月開催
- ・ 統合マネジメントシステム内部監査員コース（2日） * 2008年8月開催

- ・ 次世代内部監査実践活用セミナー
～経営ツールとしての目的達成型監査モデルの活用法～（2日） * 2010年8月開催
- ・ ISO七つ道具実践活用セミナー：入門編（2日） * 2010年8月開催
- ・ ISO 9004 徹底解説セミナー（1日）
* 2011年1月開催
- ・ 環境マネジメントのための環境法令の勘所と順法管理システムの構築セミナー（1日）
* 2011年7月開催
- ・ 事業継続マネジメントシステム入門コース（1日） * 2011年10月開催

8 JRCA登録のCPD対応コース

マネジメントシステム審査員評価登録センター（JRCA）で求められる審査員の継続的専門能力開発（CPD）の対象コースとして、2015年度は品質マネジメントシステム、情報セキュリティマネジメントシステムの以下のコースが対応している。

- ・ ISO 9001 内部監査員スキルアップコース
- ・ ISO 9001 要求事項の解説【移行対応】コース
- ・ ISO 9001 CPD 対応コース
- ・ ISO/IEC 27001 CPD 対応コース
- ・ ISO/IEC 27001 要求事項と管理策の詳細解説コース
- ・ 情報セキュリティと個人情報保護法の実践コース



講師派遣・出張研修

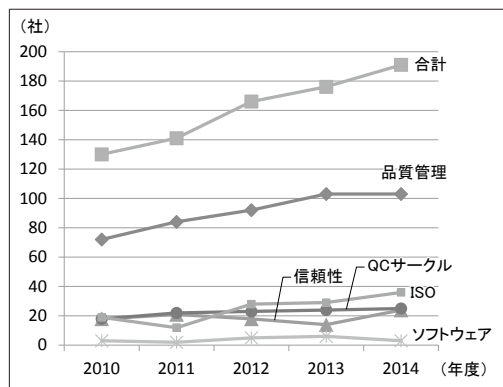
1 講師派遣

日科技連では、年間で開催している約130種類のセミナーに加えて、個別の企業・組織からのご要望により、日科技連の主力の講師陣を中心として、講師を企業・組織に派遣して行う出張研修ならびに講演会を提供している。

講師派遣・出張研修の最大のメリットは、業務の都合や時間、地理的な事情により、役員、社員を日科技連の定例セミナーに派遣できない場合など、社内の会議室や研修施設にて、ほぼ各企業・組織の計画に合わせて、一度にまとまった人数の社員を教育できるという点にある。

出張研修の受注会社数は年々増えており、その主な理由は、日科技連の強みでもある統計的品質管理（SQC）、品質経営（TQM）を中心に、顧客への価値提供を基本に活動したことにある。また、東京近郊での受注に加え、大阪事務所のある関西エリアでの受注の増加も理由の一つである。

分野別で分析すると、ここ数年、「品質管理」が全体の約半数を占めており、「信頼性」「QCサークル」も増加傾向にある。中でも、「ISO」はこの5年で倍増しており、出張研修としてのニーズの高さがうかがえる。



出張研修実施会社数推移

2 出張研修

出張研修で実施している主なプログラムは以下の通りで、日科技連が定例で開催しているセミナーの中からプログラムが選択できる。

[実施プログラム例]

- ・品質経営（TQM）、方針管理
- ・統計的品質管理手法（SQC）
- ・実験計画法、多変量解析法
- ・QC的問題解決法
- ・信頼性工学
- ・信頼性手法FMEA/FTA
- ・QCサークル関係
- ・品質機能展開（QFD）
- ・ソフトウェア品質関係
- ・ISOマネジメントシステム関係

3 講演会

各企業・組織の社内で開催する講演会では、特に11月の品質月間行事の一環で開催するイベントとして、毎年多くの企業・組織から依頼を受け、様々なテーマに応じて当該分野の専門講師を派遣している。

年次により変化はあるが、主に輸送用機器、電機、化学、建設などの業界を中心とした企業・組織での開催実績が多数あり、依頼・相談件数も増加の傾向にある。

[講演テーマ例]

- 「企業競争力を高めるTQMの導入・活用」
- 「再発防止・未然防止に役立つ失敗学」
- 「現場のQC力を高めよう」
- 「強い企業体質を目指す“改善活動”」
- 「ヒューマンエラーによるトラブル・事故を防ぐ」

[講師派遣・出張研修 実施までの流れ]

(1)相談受付

- ・ご相談，お問合せの受付
- ・セミナー目的・ねらいの確認
日科技連の職員が受注先会社の担当者と打ち合わせを行い，現状の把握，研修の目的・ねらいなど，細かく希望を確認。

(2)研修会の企画

- ・企画の提案
相談・依頼の内容に応じて，研修会企画，カリキュラム，指導講師を提案。
- ・見積書提示

(3)研修会の準備

- ・お申し込み
企画内容，指導講師，開催日程，場所，参加者数などを決定し，正式にお申し込みいただく。
- ・テキスト・資料などの準備
研修内容に基づきテキストや資料の作成，選定，発注を行う。

(4)研修会の実施

- ・研修会の実施
実施当日，日科技連職員が準備や運営を全面的にサポート。
- ・費用の請求

(5)セミナー実施後のフォロー

- ・研修会の評価
研修会の成果や効果をどのように実務に活用するかなどアドバイスし，実施後のフォローをする。
- ・今後のご提案
今後，更なる教育研修の充実に向けて，関連分野の教育企画を提案。



企業の品質経営度調査

2004年にはじまった企業の品質経営度調査は、産業界に対して「品質」の重要性の再認識をうながすことなどを目的に、日科技連と日本経済新聞社が共同で実施しており、2014年までに計8回実施した。わが国企業の品質経営の実態を把握するとともに、企業ごとの品質経営の水準を評価する上での一つの指標として活用されている。

調査実施年には、12月に報告講演会を行っている。

2009年の第5回調査から、「優秀企業賞」として総合ランキング上位5位の企業を表彰している。

■『ものづくり日本の品質力』の発行

本調査は、日本のものづくり企業の「品質力」、すなわち品質経営の実態を評価し、特徴の抽出や課題の発見を行っており、同時に、品質経営のありたい姿を示すガイドの役割も担っている。

過去5回の調査の解析結果をフィードバックするとともに、ものづくり企業の「品質力」の現状と課題を述べ、わが国を代表するものづくり企業の品質経営の取り組みとベストプラクティスを紹介した、わが国初の日本のものづくり企業の“品質白書”として、2010年に『ものづくり日本の品質力』を発行した。

『ものづくり日本の品質力』

企業の品質経営度調査

企画委員会 編

長田 洋 編著

(東京工業大学大学院)

日科技連出版社発行



■フォローアップ調査の実施

2013年以降は、品質経営の水準を向上させるために、企業が品質活動に取り組み、その活動成果を1年後の調査で評価するには時間的にも難しいとのことから、本調査を隔年で実施す

ることとした。

しかしながら、過去の調査項目の中で、とりわけ、「市場不良コスト（売上高比率）」「社内不良コスト（売上高比率）」に関しては、業界ごとの実態、他社との比較において、ぜひ、継続的にデータを参考にしたいという要望を多数いただいた。そこで、2013年は調査データの継続性と活用の観点から、これまでのフルバージョンの調査ではなく、不良コストに関する実態を把握するための調査を「品質経営度フォローアップ調査」として実施し、170社の企業から回答いただいた。

【フォローアップ調査概要】

調査テーマ：「市場不良コスト（売上高比率）」

「社内不良コスト（売上高比率）」の継続的データ活用と調査協力企業へのフィードバック

調査期間：2013年7月25日～9月30日

調査対象：日本国内の主な製造、建設、ITサービス企業

調査社数：608社／うち回答社数170社

(回答率28.0%)

■今後に向けて

2015年に本調査の専用Webサイトを開設した。過去のランキング結果も閲覧可能であり、本調査に関心のある企業にはぜひご覧いただきたい。2016年には、第9回の調査実施を予定している。多くの企業に本調査へのご協力をお願いしたい。



▶ 専用サイト

<http://www.juse.or.jp/jqr/>

[第3回調査]

- (1)調査期間：2007年6月1日～7月下旬
 (2)調査社数：523社／うち回答社数：215社
 (回答率41.1%)

[第6回調査]

- (1)調査期間：2010年6月1日～7月20日
 (2)調査社数：643社／うち回答社数：249社
 (回答率38.7%)

[第4回調査]

- (1)調査期間：2008年6月2日～7月18日
 (2)調査社数：530社／うち回答社数：227社
 (回答率42.8%)

[第7回調査]

- (1)調査期間：2012年7月2日～8月21日
 (2)調査社数：651社／うち回答社数：217社
 (回答率33.3%)

[第5回調査]

- (1)調査期間：2009年6月1日～7月15日
 (2)調査社数：600社／うち回答社数：225社
 (回答率37.5%)

[第8回調査]

- (1)調査期間：2014年7月8日～8月22日
 (2)調査社数：602社／うち回答社数：192社
 (回答率31.9%)

第3回～第8回 総合ランキング

| 順位 | 第3回 2007年 | 第4回 2008年 | 第5回 2009年 | 第6回 2010年 |
|----|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1 | シャープ | 富士フイルムHD | パナソニック | 富士フイルムHD |
| 2 | トヨタ自動車 | シャープ | 富士フイルムHD | パナソニック |
| 3 | 除外* | トヨタ自動車 | シャープ | ジーシー |
| 4 | 富士フイルムHD | 大日本印刷 | トヨタ自動車 | 東芝 |
| 5 | アイシン精機 | アイシン精機 | アイシン精機 | 大日本印刷 |
| 6 | 大日本印刷 | 日立製作所 | 東芝 | 住友金属工業 |
| 7 | 日立製作所 | セイコーエプソン | デンソー | NECアクセステクニカ |
| 8 | 住友ゴム工業 | ジーシー | 大日本印刷 | 富士通 |
| 9 | NEC | 清水建設 | 富士通 | 富士ゼロックス |
| 10 | デンソー | 富士ゼロックス | 日立製作所 | シャープ |

※第3回第3位の企業は諸般の事情により企業側からの申し出がありランキングから除外した。

| 順位 | 第7回 2012年 | 第8回 2014年 |
|----|-------------|-----------|
| 1 | 東芝 | コニカミノルタ |
| 2 | 富士フイルムHD | ジーシー |
| 3 | 大日本印刷 | 富士通 |
| 4 | パナソニック | 富士フイルムHD |
| 5 | シャープ | シャープ |
| 6 | ジーシー | キャノン |
| 7 | 富士通 | アサヒグループHD |
| 8 | ソニー | ソニー |
| 9 | キャノン | 東芝 |
| 10 | NECアクセステクニカ | 大日本印刷 |



報告講演会

調査実施年は12月に報告講演会を開催し、ランキング上位企業の講演、調査の解析結果を報告している。

賞・表彰

1 デミング賞

■デミング賞運営委員会設置

デミング賞の基本戦略などを議論する場として、2007年10月にデミング賞運営委員会を新たに設置した。当時、バブル崩壊や企業のグローバル化に伴う海外現地生産、IT化など、企業を取り巻く環境が複雑かつ変化してきており、特に国内応募企業数が低迷していた。これに対する対応に加え、TQMそのものの有効性や取り組みの方法の再検討もあわせて検討してきた。本運営委員会の設置により、賞の位置付けやフレームワークなどの基本戦略を再検討し、「賞の一本化」「応募資格の柔軟化」「賞の名称変更」などの施策を実行した。

■デミング・イノベーション・プログラム

デミング賞委員会では、“実践力”（職場力・現場力・人材力などの「組織能力」）を継続的に維持し、さらに高めていく、という点について、産業界各企業の実践力の向上の一助となること、およびTQM活動の重要性の認識をさらに高めていくことを目的に、2006年にデミング・イノベーション・プログラム（DIP）の準備委員会を設立し、2007年に実施した。

[TQM進化促進プロジェクト]

経営環境の変化によって新たに生じてきたTQM推進上の課題について、デミング賞受賞企業とデミング賞実施賞小委員会委員とが一緒に取り組み、TQMの進化をはかるため、共同研究を行うプロジェクト。

[TQM成功事例調査ワーキンググループ]

デミング賞実施賞は、経営環境に適応した積極的な顧客指向の経営目標・戦略が策定され、その実現に向けて、TQMが適切に実施され、結果として効果をあげている組織に与えら

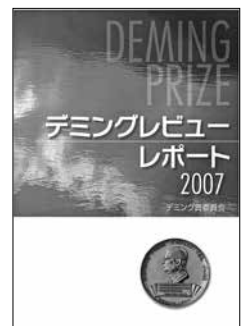
れる賞である。すでにデミング賞を受賞した企業について調査を行い、受賞企業にとって、なぜTQMが経営に欠くべからざる要素になっているのか、その推進の過程において、デミング賞実施賞への挑戦がどのように有効であったのか、受賞後どのような取り組みを行って成果をあげているのかについて、該当企業とデミング賞実施賞委員がワーキンググループを結成し、調査・報告を行った。

2007年度は、(株)ジーシー、トヨタ自動車(株)における調査を実施した。

[デミング・イノベーション・プログラム 報告会]

2007年11月16日、クオリティフォーラム2007にて、TQMを導入していない企業の経営者の方々のために、TQMの必要性・有効性をわかりやすく解説し、またTQMに取り組んでいる企業の担当者に対しては、新たな経営環境に適したTQMの推進方法を解説し、デミング賞委員会から新しいTQMの情報発信や提案を行った。

(株)ジーシー、トヨタ自動車(株)の取り組みをまとめたレポート



■デミング賞紹介DVDの製作

2009年4月、デミング賞の広報活動の一環として、DVD「デミング賞～エクセレントカンパニーをめざして」を製作した。



[内容]

デミング賞とは、デミング賞と品質管理の発展、デミング賞（実施賞）の審査基準、受賞組織経営者の声、デミング賞挑戦までのステップ、TQM診断



■デミング賞普及・推進功労賞（海外）創設

デミング賞の個人賞として「デミング賞本賞」があるが、これに加えて、2009年度から、「デミング賞普及・推進功労賞（海外）」を新設した。対象は、「総合的品質管理（TQM）の普及・推進に関し、優れた業績のあった者、主たる活動が海外に限定される者」。

現在は、デミング賞委員会委員から推薦のあった者を候補者とし、原則として3～5年ごとに選考が行われ、受賞者には賞状とメダルが授与される。

[デミング賞普及・推進功労賞（海外）受賞者]

2009年 グレゴリー・H・ワトソン氏
（フィンランド）

2012年 ジャナック・メタ氏（インド）

2014年 カン・トラクルフーン氏（タイ）

■デミング賞事業所表彰を「実施賞」に

一本化、実施賞の応募資格を柔軟化

2010年度から下記の改訂を行った。

- ・デミング賞事業所表彰の廃止、デミング賞実施賞への一本化
- ・一本化された実施賞の応募資格を以下に変更

改訂前

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは自律的な経営を行っている企業または企業の事業部です。

業種、規模の大小、公・私、国内・海外は問いません。ここでいう自律的な経営とは、次の条件を満たすことをいいます。

- a) 独自で自主的な経営ができる程度に、人、物、資金の運用を自由に行う責任と権限をもっていること。
- b) 一貫した品質保証を行う責任と権限をもっていること。
- c) 利益責任および将来の経営の発展を図る責任と権限をもっていること。



改訂後

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは、次の条件を満たす企業、機関、事業部、事業所、本部などの組織（以下、組織という）です。

- a) 社会的・経済的に意味のある製品・サービスを提供している、またはその提供にかかわっている。
- b) a) の製品・サービスに関する一貫した品質保証を行うために必要な機能の全部、またはその重要な一部（企画、設計・開発、製造、物流、営業、サービスなど）を担っている。
- c) b) の機能を担うのに必要な人、物、資金などの運用を行う責任と権限をもっている。

業種、規模の大小、公・私、国内・海外、組織の一部・全体は問いません。例えば、以下のような組織が該当します。

- ・ 全社、事業部
- ・ 利益を目的にしない政府、自治体、公益事業体、またはその一部
- ・ 工場、研究所、技術本部、調達本部、営業本部など
- ・ ある製品のバリューチェーン全体にかかわる一連の組織
- ・ 本社と海外法人
- ・ ある製品群を協力して提供している企業グループ

なお、上記a)の「社会的・経済的に意味のある製品・サービス」とは、当該組織とは経営上独立した人・組織に対して提供される製品・サービスという意味です。

■賞の名称、委員会制度、委員・顧問制度を改訂

2012年度から、デミング賞の制度の改訂を下記の通り行った。

[デミング賞実施賞，日本品質管理賞の名称の変更]

デミング賞実施賞 → デミング賞

日本品質管理賞 → デミング賞大賞

*デミング賞本賞，デミング賞普及・推進功労賞（海外）は変更なし。

[デミング賞委員会組織と委員会名の変更]

(1)以下の通り名称を変更した。

デミング賞総合調整小委員会

デミング賞制度小委員会

デミング賞本賞小委員会

デミング賞実施賞小委員会

日経品質管理文献賞小委員会



デミング賞運営委員会

デミング賞本賞選考委員会

デミング賞審査委員会

日経品質管理文献賞選考委員会

*総合調整小委員会・制度小委員会はその任務を運営委員会に統合し，廃止。

(2)デミング賞委員会に新たに副委員長を新設した。

[デミング賞委員会 委員・顧問制度の見直し]

- 参与の廃止
- デミング賞本賞受賞者 学識委員で80歳以上の方 →顧問に移行
- 海外受賞企業・組織の代表者を新たに顧問に委嘱

[現実実施賞小委員会（2012年度からはデミング賞審査委員会）の委員構成]

委員に企業出身者を加えて構成する。



2015年授賞式

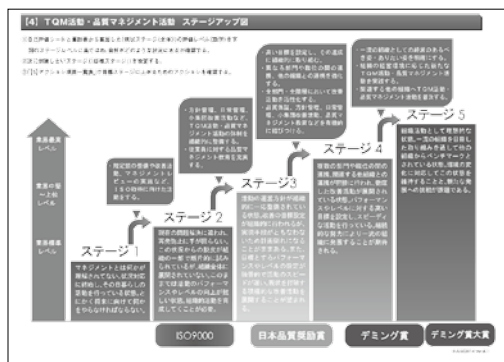
2 日本品質奨励賞

日本品質奨励賞（TQM奨励賞，品質技術革新賞）は，2000年に，わが国の産業の現状を踏まえ，この賞に挑戦することにより，その組織にふさわしいTQMの実践を通じて，厳しい国際競争に勝ち抜く優れた企業を輩出することを目的に創設した。

そして，2007年には，日本品質奨励賞 品質技術革新賞の間口を広げるため，「品質革新賞」に名称を変更した。

2015年度までの受賞組織数は，TQM奨励賞が39件，品質革新賞が22件である。

2014年に，日頃の自社のTQM活動・品質マネジメント活動の現状を客観的に把握し，そのレベルアップに向けて具体的に何をどうするのかを知り，更なる活性化をはかっていただくため，「TQM活動・品質マネジメント活動 ステージアップ・ガイド」を作成した。このガイドは，ISO認証取得→日本品質奨励賞挑戦→デミング賞挑戦というTQM活動・品質マネジメント活動のレベルアップガイドであり，これから賞にチャレンジしていく企業に活用していただきたいツールである。



ステージアップ図



▶ ステージアップガイド
<https://www.juse.jp/qmsg/>

3 企業の品質経営度調査 優秀企業賞

2004年に開始した本調査は、2009年に第5回を迎えた。この第5回の調査を機に、さらに品質経営の普及、重要性を産業界に認識していただくことをねらいとして、本調査の解析結果に基づき、品質経営の推進において極めて優れた特長があると認められる総合ランキング企業上位5社を対象に表彰する「企業の品質経営度調査 優秀企業賞」を設けた。

第1回の表彰式は、2009年11月11日に経団連会館にて、「2009品質経営トップマネジメント大会」「日本品質奨励賞授賞式」「デミング賞授賞式」と併催で執り行われた。



2014年表彰式

| 表彰年 | 表彰企業（総合順位順） |
|-------|---|
| 2009年 | パナソニック(株)、富士フィルムホールディングス(株)、シャープ(株)、トヨタ自動車(株)、アイシン精機(株) |
| 2010年 | 富士フィルムホールディングス(株)、パナソニック(株)、(株)ジーシー、(株)東芝、大日本印刷(株) |
| 2011年 | (株)東芝、富士フィルムホールディングス(株)、大日本印刷(株)、パナソニック(株)、シャープ(株) |
| 2014年 | コニカミノルタ(株)、(株)ジーシー、富士通(株)、富士フィルムホールディングス(株)、シャープ(株) |



表彰状とクリスタルの表彰楯

専用サイトのご案内

デミング賞、日本品質奨励賞、企業の品質経営度調査は、以下の専用Webサイトを設けている。各賞の詳細案内、受賞リストなども掲載している。



▶ デミング賞
<http://www.juse.or.jp/deming/>



▶ 日本品質奨励賞
<http://www.juse.or.jp/jqa/>



▶ 企業の品質経営度調査
<http://www.juse.or.jp/jqr/>

品質月間

■品質月間の目的と活動

わが国において、全国規模での品質意識の向上と、品質管理活動の幅広い普及を目的として、毎年11月に開催している「品質月間」は、1960年（昭和35年）に第1回が実施されて以来、製品やサービスの品質向上に取り組み、2015年で第56回を迎えた。

顧客志向、品質、安全の優先、継続的改善などを中心とした品質経営はグローバル市場での競争力の基盤であると言える。わが国の産業界が、今後も世界に誇る高品質の製品とサービスを向上し続けるためにも、継続して品質管理力を高め、安全、安心、環境への対応を積極的に取り組んでいくことが求められている。

このような時代背景のもと、毎年、各関係団体にご協力いただき、様々な活動を全国的に展開している。

[主な活動内容]

- ・ 品質月間テーマの策定
- ・ 品質月間ポスターの作成
- ・ 特別講演会の開催（全国主要都市にて開催）
- ・ 品質月間テキストの発行
- ・ 品質標語、品質川柳の募集・選定
- ・ Q旗、胸章（Qマーク入り）、垂幕、のぼりなどの販売 ほか

[主催] * 2015年

品質月間委員会／日本科学技術連盟／日本規格協会／日本商工会議所

[後援] * 2015年

NHK／日本品質管理学会／日本生産性本部／日本能率協会／日本消費者協会／QCサークル本部／日本経済団体連合会／品質工学会

■専用サイトの開設

品質月間の情報を掲載した専用サイトを2013年にリニューアルした。専用サイトからは品質

標語、品質川柳の応募が可能であり、関連商品の紹介や過去のテーマ、品質月間の内容も閲覧できる。

また、2010年からはイラスト入りの品質川柳入選作品のスクリーンセーバーの無料ダウンロードサービスも行っている。



第56回品質川柳優秀作品より



▶ 専用サイト <http://q-month.jp/>

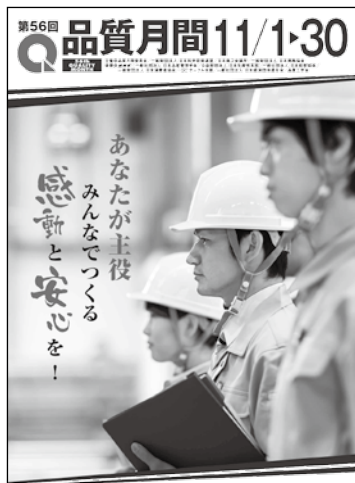
第56回品質月間テキスト（2015年）

| No. | タイトル／著者（敬称略） |
|-----|---|
| 408 | 株式会社アドヴィックスの自立への道 川田武司（株アドヴィックス） |
| 409 | 石川馨 品質管理とは 久米 均編（東京大学名誉教授） |
| 410 | ビッグデータ時代に求められる統計的思考力 山口和範（立教大学） |
| 411 | グローバル人材教育の実態と課題 立林和夫（元 富士ゼロックス(株).JSQCグローバル品質管理教育研究会） |
| 412 | QCサークル活動10の力 QCサークル近畿支部、「QCサークル活動10の力」WG、監修 岩崎日出男 |
| 413 | 顧客接点から学ぶ 江渡康裕、掛足耕太郎 （日本能率協会コンサルティング(株)） |
| 414 | HACCPシステム構築ポケットガイド 監修 森田那雄／岩沼幸一郎、土肥 暁、岩本嘉之 （NPO法人食品保健科学情報交流協議会） |

品質月間テーマ (2006年～2015年)

| 回/年 | 経営者・管理者向け | 第一線職場向け |
|------------|-------------------------------|-----------------|
| 第47回/2006年 | 質経営 持続的成長への道 | 良い品質で守る生活 豊かな社会 |
| 第48回/2007年 | 品質経営で築く信頼感 | 標準守って足元固め |
| 第49回/2008年 | 現場力 足元固めて 品質経営 | 知恵と工夫で 夢をカタチに |
| 第50回/2009年 | 持続可能な社会をつくる品質 ～今、あなたにとって品質は？～ | |
| 第51回/2010年 | 品質の原点にかえり 先駆者の知恵に学ぶ | |
| 第52回/2011年 | 危機を力に 品質革新 再び世界No.1 | |
| 第53回/2012年 | 品質力再興 やっぱり日本品質！ | |
| 第54回/2013年 | 価値ある品質で 新たな成長を！ | |
| 第55回/2014年 | 価値ある品質 技と想いをつないで | |
| 第56回/2015年 | あなたが主役 みんなでつくる 感動と安心を！ | |

*第50回からテーマは1つとなった。



第56回品質月間ポスター (2015年)

豆知識

その1：QマークとQ旗

「品質月間」を盛り上げるために、東京芸術大学に依頼し、QC共通のマークと旗を作った。当初のQ旗のQマークはブルーの国連色であったが、多くの方の意見を参考にして日の丸の赤色に決定したのが現在のQマークとQ旗である。
なお、Qマークは日科技連が商標登録をしている（商願2002-000472）。



その2：そのほか品質関連の日

10月 標準化月間
11月9日 いいQの日
11月第2週目 クオリティ・ウィーク

国際協力

1 世界品質同盟による Global Summit開催

2005年9月にアメリカ品質協会（ASQ）、ヨーロッパ品質機構（EOQ）、国際品質アカデミー（IAQ）と日科技連の4団体により創設された世界品質同盟（WAQ）の主催で、2006年5月にベルギー・アントワープで、第1回 World Summit of National Quality Association（現Global Summit）が開催された。

Global Summitは、世界各国の品質推進団体が集うネットワーキングの場として、20カ国を超える国からの参加を集め、以後、原則3年ごとに議長国により開催される。

2014年10月に、日科技連が議長国となり第4回Global Summitが日本・東京で開催された。京王プラザホテル（東京都新宿区）での品質国際会議（ICQ'14）に併催する形で開催され、各国品質推進団体による成功事例や協力事業などについて活発な議論や交流が行われた。

2 協力関係に関する覚書締結

■中国質量協会

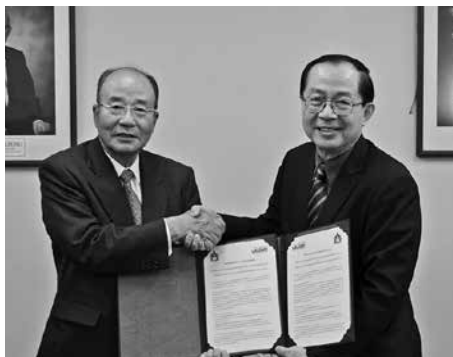
2009年6月に中国質量協会（CAQ）が創立30周年を迎えるにあたって、Chen Bang Zhu 会長が日科技連を訪問し、創立以来30年にわたる協力関係を記念し、また今後の更なる協力のための覚書が交わされた。

同年から、これまでの中国からの訪日研修団受入れの協力に加えて、日本から講師を派遣し、中国で企業向け品質管理・信頼性技法教育を開始した。また、中国質量協会が組織する訪日研修団に参加のサークルメンバーによる日本国内のQCサークル全国大会での事例発表が行われるようになった。

■泰日経済技術振興協会

2011年10月に長年協力関係にある泰日経済技術振興協会（TPA）のPrayoon Shiwattana 会長、Sucharit Koontanakulyong 事務局長が日科技連を訪問し、今後の更なる協力のための覚書が交わされた。

その始まりとして、日本から講師を派遣し、タイ・バンコクにて2012年5月に「方針管理における戦略立案セミナー」、2013年2月に「R-Mapセミナー」を共催した。



TPAとの締結式

3 日科技連理事長がMIQの理事に就任

TQMが躍動するインドにおいて、2007年インド・ムンバイ郊外に、同年、日本品質管理賞（現デミング賞大賞）を受賞したMahindra & Mahindra 農業機械事業部が中心となり、TQMの教育機関であるMahindra Institute of Quality（MIQ）が設立された。

設立から東京大学名誉教授の久米 均氏、慶應義塾大学名誉教授の鷲尾泰俊氏をはじめ、日本から多くの専門家がTQMに関する講義を行っている。また、日科技連の理事長が理事として就任し、受け継がれることとなった。2008年の第1回理事会はチェンナイで行われ、日科技連の浜中順一理事長が出席した。

4 海外企業向け訪日セミナー

海外での品質管理の普及に伴い、公募型の定例国際TQMセミナーに加えて、海外企業からの要請に対応したオーダーメイド型の訪日企業セミナーを2006年から開講した。

主な企業の初回セミナー開講年と参加人数は以下の通り。

[海外企業セミナー]

2006年

サイアムセメントグループ（タイ）50名

2007年

オートリブ（フランス）10名，ドバイアルミニウム（UAE）9名，ユニマイクロンテクノロジー（台湾）24名

2008年

海洋王照明科技公司（中国）23名

5 ベストプラクティスセミナー

2012年11月に同年デミング賞，ならびにデミング賞大賞を受賞したインド企業5社のトップマネジメントを講演者として招き，インド・ニューデリーにあるロイヤルプラザホテルにてTQM Internationalと共催でデミング賞受賞企業によるベストプラクティスセミナーを開催した。

SRF化学製品事業部，Mahindra & Mahindra農業機械事業部スワラジ部門，Lucas TVS，Rane（Madras），TATAスチール社など，インドを代表するグループ企業が受賞企業として揃ったことから，注目を集め，会場のホールが満員となる120名の参加者を集めた。

6 海外企業向けTQM診断

2011年度からデミング賞の制度が一部変更となり，「デミング賞委員によるTQM診断」が原則1度しか受診することができなくなったため，日科技連による海外企業向けTQM診断を開設した。これまでに3ヵ国8社から申し込

みがあり，担当診断委員が更なるTQM活動推進やデミング賞への挑戦などに関するアドバイスをを行った。

7 海外での招待講演

海外でのQCサークル活動やデミング賞の広まりに伴い，賞や教育・訓練の普及・推進への関心が高まり，各国の会議で日科技連の役割や活動について紹介する機会が増えている。

ここ10年間に招待講演を行った会議は以下の通り。

[会議名]

2009年

国際QCサークル大会（フィリピン・セブ）

2010年

国際チーム小集団優秀事例発表大会（シンガポール），国際QCサークル大会（インド・ハイデラバード）

2012年

国際QCサークル大会（マレーシア・クアラルンプール）

2013年

ザンビア全国改善大会（ザンビア・ルサカ），国際QCサークル大会（台湾・台北），国際品質生産性大会（インドネシア・メダン）

2014年

国際品質大会（インドネシア・ソロ）

2015年

国際科学実践会議（ロシア・サンクトペテルブルグ）



2010年国際QCサークル大会（インド）

広報・出版活動

1 Webジャーナル 『クオリティマネジメント』

■月刊誌からWebジャーナルへ

1950年3月に創刊された月刊『品質管理』誌は、産業界で長く、広く愛読され、日本の品質管理の普及・発展に大きな役割を果たしてきた。その時々の読者の期待に応えるべく誌面を常に刷新し、2002年1月には『クオリティマネジメント』と誌名を変え、2011年7月号では創刊800号を記念するに至った。

しかしながら、産業界を取り巻く環境の変化は著しく、読者の求める記事・情報をタイムリーに提供していくことが求められるようになり、これに対応するべく、月刊誌としての発行は2011年12月号(vol.62 No.12)をもって終了し、2012年4月から、ITを活用した新しいメディアとして、Webジャーナル『クオリティマネジメント』がスタートした。

■Webジャーナルの特徴

「日本で唯一の“品質”総合専門Webジャーナル」として、主な読者層は企業のトップ層、ミドルマネージャーや管理職とし、様々な経営課題をクオリティの視点でとらえ、解決の道筋を示すことを目指している。

掲載内容は、スペシャルインタビュー、特集、連載、コラム・エッセイ、特別企画の5本を柱に、年4回発行し、各記事を順次更新していく。

Webジャーナル移行時から掲載しているコラム「温故知新」は、『品質管理』誌のバックナンバーからその当時の実状を知ることができる文献や、今も語り継ぎたい記事や真理を石川馨先生からのメッセージとして紹介しており、好評を得ている。

日科技連賛助会員会社は、会員特典として、1口につき1ユーザー無料で閲覧できる。

[企画内容]

- ・スペシャルインタビュー
 - 「日本のものづくり～品質で日本を盛り返す」
 - 「防災・減災～次の世代につなげるために」
 - 「チームの底力」
- ・特集
 - 「日本品質奨励賞への道」
 - 「TQMとISO 9001改訂のマネジメントシステム要素間の関係」
 - 「『現場力』の変化を見る」
- ・連載
 - 「品質管理シンポジウムルポ」
 - 「品質管理検定実施概要報告」
- ・特別企画
 - 「温故知新－石川馨先生からの時を超えたメッセージ」
 - 「QMコラム」
 - 「企業と人間力」



▶ Web『クオリティマネジメント』
<http://qm-juse.jp/>

2 月刊誌『QCサークル』

■創刊50周年

『QCサークル』誌は、2012年4月号をもって創刊50周年を迎えた。本誌の前身である『現場とQC』誌の1962年4月の創刊号で当時の編集委員長であった石川 馨先生の呼びかけで始まったQCサークルも、同じく50周年を迎えたことになる。

そこで、創刊50周年を記念し、「50周年記念特大号-新たな価値を求めて-」と題し、創刊からこれまでのQCサークルのあゆみを振り返るとともに、副題にもあるように、これからのQCサークル活動（小集団改善活動）に求められる新しい価値を探る意味で、事務・販売・サービス部門での広がり、特に医療・福祉や全国の自治体組織や、中堅企業への普及など、今後発展すると思われる分野の動きを特集として掲載した。

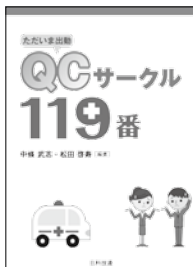


■ただいま出動 QCサークル119番

QCサークル活動（小集団改善活動）は、様々な業種・職種において普及・拡大が進んでいる。今では企業規模や製造業に限らず、事務・販売・サービス部門、特に医療・福祉や全国の自治体組織、中堅企業でも活発な活動が見られるようになった。

そこで、活動を始めたばかりのサークルや導入直後の職場が活動を進めていく中で様々な問題や悩みにぶつかった時の参考となる記事として、2010年からノウハウとポイントを4コママンガに収めた「ただいま出動 QCサークル119番」の掲載を開始した。

すでに70事例を越え、2015年3月に日科技連出版社から同名の単行本を発行し、多くの読者に活動のヒントを提供している。



■QCサークル石川 馨賞

1962年に創刊された『現場とQC』誌（『QCサークル』誌の前身）の副題Quality Control for the Foremanの略称をとって、1965年に「FQC賞」が創設され、その後、1990年に石川 馨先生の偉大な業績をたたえ、「FQC賞」を「QCサークル石川 馨賞」と改称し、今日に至る。FQC賞の受賞は258件であった。

2013年、QCサークル活動（小集団改善活動）の更なる普及・発展と活性化をはかるため、特色ある活動によって本活動の普及・発展と活性化に貢献したサークルに贈られる賞として「QCサークル石川 馨賞奨励賞」を新しく創設した。

2015年度までの受賞件数は、QCサークル石川 馨賞は697件、奨励賞は88件である。

なお、全国のQCサークル活動（小集団改善活動）推進の一助として、QCサークル本部長としてご尽力いただいた米山高範氏（コニカミノルタ株）から日科技連に多大な寄付があり、この寄付を2005年度から「QCサークル石川 馨賞」表彰のための基金として充当している。

授賞式は年2回、QCサークル全国大会（小集団改善活動）にて行っている。



表彰楯



▶『QCサークル』誌Webサイト

最新号情報、創刊から50周年の歴史などを掲載
http://www.juse.or.jp/qc_circle/

3 日科技連賛助会員制度

日科技連は、科学技術ならびに経営管理技術の振興に必要な諸事業を総合的に推進し、人材の育成をはかり、産業と学術・文化の発展に寄与することを目的としている。品質重視の考え方にもとづき、産業界の品質経営実現に向け様々な事業を展開している。こうした当財団の事業目的にご理解とご賛同いただける企業・組織に賛助会員として入会いただき、当財団が取り組む品質経営の推進・普及に支援いただくための制度である。

入会金（1万円）、年会費（1口5万円）で様々な会員特典が利用できる。

Web版に移行した『クオリティマネジメント』の閲覧も、2012年の公開時から特典に加えられた（1口につき1ユーザー）。

2015年12月現在の賛助会員数は、677社／686口である。

4 機関紙『日科技連ニュース』

日科技連の創立以来、賛助会員向けに日科技連の活動や品質管理に関する最新情報を伝えるために機関紙を発行している。

現在の『日科技連ニュース』は、前身となった『ENGINEERS』（最終発行2001年12月号・通巻638号）を大幅に改訂し、2002年1月号から機関紙タイトルを『日科技連ニュース』と

改め、年10回（1月・2月／7月・8月は合併号、他の月は毎月発行）発行している。2015年12月号で通巻140号となる。

読者から好評な専門家によるシリーズ記事は、年5本前後掲載している。

[シリーズ記事掲載タイトル（2014～2015年）]

- ・品質保証体制を再構築する
- ・創造アーキテクトと新商品企画の定式化
- ・顧客満足から顧客感動へ
- ・ビジネスで使える確率・統計・戦略
- ・人為ミスゼロ化の考え方と手法
- ・ISO 9001, 14001規格改正動向
- ・環境経営入門
- ・小集団活動活性化のレシピ
- ・日本の産業力・国際競争力強化と品質



5 講演録『クオリティのひろば』

機関紙『日科技連ニュース』とともに2002年から発行を開始した講演録『クオリティのひろば』は、日科技連の各事業で行われた著名人や専門家による講演の講演録であり、賛助会員へ会員特典として配付した。

2010年4月（No.57）の発行が最終となった。



『クオリティのひろば』掲載テーマと講演者

(所属は発行時のもの)

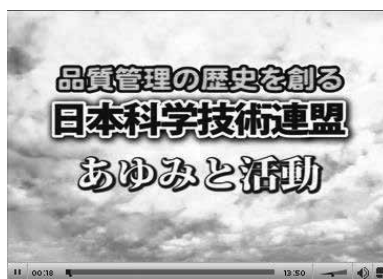
| No | 発行年月 | テーマ | 講演者 |
|----|---------|--|---------------------------------|
| 40 | 2005.12 | 「企業の社会的責任」を求めて | 前田又兵衛氏（前田建設工業株） |
| 41 | 2006.1 | ユーザー企業から「診る」経営とITの品質 ～品質の作り込みの観点から～ | 木内里美氏（大成建設株） |
| 42 | 2006.3 | 営業を軸にした企業革新 『顧客視点の組織営業モデル』 | 浅霧敦生氏（株）ジェーエヌエル |
| 43 | 2006.5 | 株式会社サキコーポレーションにおける経営革命 ～女社長が率いる“天空”の工場～ | 秋山咲恵氏（株）サキコーポレーション |
| 44 | 2006.7 | 企業経営と現場力 ～強い企業には強い現場がある～ | 遠藤 功氏 （早稲田大学大学院／株）ローランド・ベルガー |
| 45 | 2006.9 | 人を育てる、人に育てられる ～柔道を通して学んだこれからの生き方～ | 山下泰裕氏（東海大学） |
| 46 | 2006.11 | デンソーの“モノづくり経営”の進化と深化 | 深谷紘一氏（株）デンソー |
| 47 | 2007.1 | 企業競争力と品質管理の新たな展開 ～製品開発の現場の視点から～ | 三澤一文氏（アクセンチュア株） |
| 48 | 2007.4 | 工作機械産業における技術経営 ～森精機が求める品質と経営～ | 森 雅彦氏（株）森精機製作所 |
| 49 | 2007.10 | 「際立つ高収益企業」を目指して | 大久保尚武氏（積水化学工業株） |
| 50 | 2008.3 | 品質プロセスを支える横断的管理技術 | 椿 広計氏（筑波大学大学院／統計数理研究所） |
| 51 | 2008.3 | 新日鐵におけるグローバル経営 | 三村明夫氏（新日本製鐵株） |
| 52 | 2008.9 | 新しい日本の経営とは何か ～日本企業の強みと弱みを考える～ | 菅野 寛氏 （ボストンコンサルティンググループ） |
| 53 | 2009.3 | 日本企業の再活性化 ～事業再生の取り組みを踏まえて～ | 富山和彦氏（株）経営共創基盤 |
| 54 | 2009.3 | 東芝イノベーションによる経営戦略 | 西田厚聰氏（株）東芝 |
| 55 | | 欠番 | － |
| 56 | 2010.3 | マクドナルドの経営改革 ～価値を創造し、顧客の期待を超える～ | 原田泳幸氏 （日本マクドナルドホールディングス株） |
| 57 | 2010.4 | ポッシュの進めるグローバル品質向上活動 | 織田秀明氏（ポッシュ株） |

6 日科技連紹介DVD

日科技連総合事業案内に加え、日科技連の活動をわかりやすく紹介する視覚的なツールとして、日科技連の活動紹介の映像化に取り組み、2009年に「品質管理の歴史を創る日本科学技術連盟 あゆみと活動」（映像時間23分）と題したDVDを制作した。

前半は日科技連の創立から現在に至るまでの歴史の流れ、後半は講義風景などを交えて活動内容をまとめている。日本の品質管理の歴史に

ついても学べる内容であり、日科技連Webサイトにて公開し、広く活用いただいている。



▶ 紹介動画

<http://www.juse.or.jp/aboutus/introduction/>

70

第3部

70年のあゆみ



| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|----------------------------------|--|--|---|----|-------------------------------|-------------------------------|---|---|-----------------------|---|---|-----------------|
| 1944 (昭和19年) | 11 | 大日本技術会創立(工政会・日本技術協会・全日本科学技術統同会の3団体統合) | | | | | | | | | | | 1944 (昭和19年) |
| 1945 (昭和20年) | | | | | | | | | | | | 8 広島・長崎に原子爆弾投下 8 太平洋戦争終結 8 連合国総司令部(GHQ)設置(横浜) 12 財日本規格協会創立 | 1945 (昭和20年) |
| 1946 (昭和21年) | 4 5 5 6 7 8 12 | 大日本技術会解散 日本科学技術連盟創立(中央区京橋大阪商船ビルに事務所設置) 進藤武左衛門氏執行委員長就任 巽良知氏第2代執行委員長兼初代理事長就任 技術代表者会議開催 封鎖預金等指定申請 大蔵省から封鎖預金等指定の認定 | 7 8 | 『日本科学技術連盟ニュース』創刊 『アトム』創刊 | | | * 内閣調査局戦争調査事務局委託:科学技術活用に関する調査 | | | | * 農林省(元農商省),商工省(元軍需省),逓信院(元運輸通信省)の誕生 2 アメリカ品質管理協会創立(ASQC) 8 『規格と標準』誌創刊(日本規格協会)本誌は1950年4月『JIS』に1956年1月『標準化』に1964年4月『標準化と品質管理』に改称 10 国際標準化機構設立(ISO) 11 日本国憲法公布 * 逓信省(元逓信院),行政調査部,経済安定本部,物価庁の誕生 | 1946 (昭和21年) | |
| 1947 (昭和22年) | 8 8 | 石川一郎氏初代会長就任 小柳賢一氏初代専務理事兼事務局長就任 | 10 | 『最新機器綜合型録』刊行 | | | | | 1 | Deming 博士来日(GHQ) | 5 10 | 日本国憲法施行 財企業経営協会創立 * 宮内府(元宮内省),労働省(厚生省から分離)の誕生 経済白書:経済実相報告書 | 1947 (昭和22年) |
| 1948 (昭和23年) | 1 3 8 12 | 井上隆根氏第2代理事長就任 エンジニア・クラブ発起人会 日科技連幹事会発足 エンジニア・クラブ開場 | 6 | 機関誌『エンジニア・クラブ』創刊 | | | 11 12 | クオリティ・コントロール調査委員会発足 エンジニア・クラブ開設(各分野の科学者・技術者の交流の機会と場の提供) | | | 4 12 | 財中部産業連盟創立 財企業研究会創立 * 法務庁(元司法省),地方財政委員会(元内務省),建設省(元内務省),行政管理庁(元行政調査部)の誕生 経済白書:経済情勢報告書 | 1948 (昭和23年) |
| 1949 (昭和24年) | 1 4 | 経済安定本部委託で海外技術調査委員会発足(その中のファクトリー・マネジメント部会は今日のQCベーシック・コースの種子となる) 岡田信次氏第3代理事長就任 | 1 4 9 | GHQ ESSのカイト氏を招いてエンジニア・クラブ初例会開催 大学院講座開設 第1回スタチスチカル・クオリティ・コントロール・セミナー開設(現・品質管理セミナー・ベーシックコース) | | | 6 8 | SQC Research Group 発足 ファクトリー・マネジメント委員会設置 * 経済安定本部委託:海外技術調査(4力年継続) | | | 2 4 7 9 11 | 財日本経営協会創立 1ドル360円為替レート設定 工業標準化法施行(日本工業規格JIS) CCS 経営講座開催(GHQ) 湯川秀樹博士(日科技連参与)ノーベル物理学賞受賞 * 宮内庁(元宮内府),法務府(元法務庁),通商産業省(元商工省),地方自治庁(元地方財政委員会),郵政省(元逓信省)の誕生 経済白書:経済状況の分析 | 1949 (昭和24年) |
| 1950 (昭和25年) | 4 | 勝田雄次郎氏第4代理事長就任 | 3 7 7 8 9 9 11 11 12 12 | 『品質管理』誌創刊 Deming 博士品質管理8日間コース TWI トレーナー講習会開催 経営者のための品質管理講習会ほか開催(箱根) 品質管理セミナー・マスターコース開催 品質管理大阪講習会開催 品質管理名古屋講習会開催 自動車工業のための品質管理講習会開催 品質管理アドバンスコース開設(後の品質管理部長コースおよび実務計画セミナー) 『品質の統計的管理』(Deming 博士講義録)刊行 | | | 8 9 | 経営管理研究委員会設置 K委員会発足(工業生産に統計的品質管理の研究機関) | 6 | 日科技連が Deming 博士を日本に招聘 | 1 3 3 3 4 6 | 1,000円紙幣発行 財日本経営能率研究所創立 JIS マーク表示制度発足 学産能大学創立 全日本能率連盟創立 朝鮮戦争勃発 * 北海道開発庁誕生 特需景気 経済白書テーマ:経済現況分析 | 1950 (昭和25年) |
| 1951 (昭和26年) | 6 9 | 「デミング賞委員会」発足,「デミング賞」創設 第1回デミング賞授賞式(大阪) | 1 3 4 8 11 | 市場調査講習会開催 『Reports of Statistical Application Research, JUSE』創刊 経営管理組織講習会開催 Deming 博士による品質管理セミナー開催(東京・名古屋・大阪・福岡),市場調査セミナー開催(東京) 市場調査セミナー開設 | 9 | 第1回デミング賞受賞記念品質管理大会開催(大阪) | 10 12 | 市場調査幹事会発足 鉱工業に於けるサンプリング研究会設置 * 通商産業省委託:鉱工業に於けるサンプリングの実際的方法に関する研究 | 7 | Deming 博士来日 | 9 9 9 | 財日本経営士会創立 サンフランシスコ平和条約調印 日米安全保障条約調印 経済白書:年次経済報告 | 1951 (昭和26年) |
| 1952 (昭和27年) | 12 | ASQC 日本支部の発足と事務局代行 | 1 5 6 11 | Deming 博士「市場調査指導クリニック」開催(熱海) 品質管理ベーシックコース大阪クラス開設 『統計的品質管理の基礎理論と応用』(Deming 博士講義録)刊行 色彩調節工学講座開催 | 11 | 第2回品質管理大会を開催(東京)以後毎年11月に東京で開催 | 10 11 | 市場調査委員会発足 オペレーションズ・リサーチ委員会発足 | 1 | Deming 博士来日 | 4 4 12 | 財セールス・プロモーション・ビューロー創設 GHQ 廃止 官庁技術者懇談会(官技懇)発足 * 法務省(元法務庁),自治庁(元地方自治庁),経済審議庁(元経済安定本部と物価庁の統合),保安庁の誕生 米国防省 AGREE 設置(信頼性研究開始) 経済白書:独立日本の経済力 | 1952 (昭和27年) |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|--------------|--|--|---|---------|---|-----------------------|--|----|-----------------------------|------------------------|--|-----------------|
| 1953 (昭和28年) | 5 11 | 久留島秀三郎氏第5代理事長就任 工業標準化普及推進に対して通産大臣から感謝状受ける | 4 6 10 | Brandt 博士統計的方法特別講習会開催 (海外権威者による特別講演会) オペレーションズ・リサーチセミナー教育コース開設 鉱工業におけるサンプリング講習会開催 | | | 1 | 品質管理訓練教程作成研究会発足 | | | 2 | テレビ放送開始 (NHK) 経済白書：自立経済達成の諸条件 | 1953 (昭和28年) |
| 1954 (昭和29年) | 11 | 「日経品質管理文献賞」創設 | 6 7 7 8 11 12 | 『品質管理入門』(QCテキスト・シリーズ) 刊行開始 Juran 博士による「品質管理マネジメント講習会」開催(箱根・高野山)「部課長コース」開催(東京・大阪) Juran 博士著『品質管理ハンドブック』刊行 Duncan 著『品質管理のための統計学』刊行 サーベイ・テクニクセミナー開催 『品質管理講義録』(Juran 博士講義録) 刊行 | | | 2 4 4 6 9 | M委員会発足 統計機械活用委員会発足 統計的方法に基づく最初のJISとして、M8105「鉄鉱石試料採取方法」がサンプリング研究会鉄鉱石専門部会の原案作成により制定 ラジオ・アイソトープ研究委員会発足 鉱山業OR委員会発足 | 7 | Juran 博士来日 | * | 防衛庁(元保安庁)誕生 経済白書：地固めの時 | 1954 (昭和29年) |
| 1955 (昭和30年) | 6 | (株)JUSE 出版社創立(現・日科技連出版社) | 5 5 5 9 10 11 12 12 | 品質管理部課長コース開設 実験計画法セミナー(DE)開設 統計機械活用セミナー開催 『オペレーションズ・リサーチの方法』Morse & Kimball 共著日科技連訳刊行 『ASQC 品質管理必携』日科技連SQCリサーチグループ訳刊行 Deming 博士サンプリング講習会開催(東京・福岡) Deming 博士品質管理講習会開催(大阪) 『QCダイアリー』刊行 | 7 12 | オペレーションズ・リサーチ研究発表会開催 ラジオ・アイソトープの工業への応用シンポジウム開催 | 3 | 官能検査部会発足(K委員会の一部会) | 11 | Deming 博士来日 | 3 6 7 7 9 | 財日本生産性本部(現・社会経済生産性本部)創立 1円硬貨発行 経済企画庁発足 (株)日本産業訓練協会創立 日本生産性本部第1次トップマネジメント視察団訪米 | 1955 (昭和30年) |
| 1956 (昭和31年) | 7 10 | 日本短波放送「品質管理講座」放送開始(第1期3ヶ月) 日本短波放送「品質管理講座」第2期放送開始(3ヶ月) | 4 4 6 8 8 9 12 | 品質管理入門コース開催(東京・大阪) Wilks 博士「順序統計量とその応用講習会」開催 『オペレーションズ・リサーチ』誌創刊 ラジオアイソトープセミナー開催 Chenery 博士「オペレーションズ・リサーチ特別セミナー」開催 卓上計算機による線形計画法短期セミナー開催 『品質管理成功法』(Juran 博士講義録改訂版) 刊行 | 5 | P. C. Mahalanobis 博士による定期講演会開催 | 4 | アナログ・コンピュータ研究委員会発足 | 6 | Deming 博士 Shewhart Medal 受賞 | 5 6 8 8 11 | 科学技術庁発足 品質管理方式研究会発足(日本規格協会) 全国官公庁技術者懇談会(全技懇)発足 欧州品質機構創立(EOO) 西堀榮三郎博士南極予備観測隊副隊長として南極へ出発 | 1956 (昭和31年) |
| 1957 (昭和32年) | | | 1 3 6 7 7 9 | 機関誌『エンジニア・クラブ』(B5版横組みに改訂) 二項確率紙による統計的解析講習会開催 サンプリング短期セミナー開催 アナログ・コンピュータ・セミナー開催 品質管理重役特別コース開設(軽井沢) 官能検査セミナー開催 | 5 9 | 第1回春季品質管理大会開催(大阪) 色彩調節シンポジウム開催 | 10 10 | 機械工業OR委員会発足 オペレーションズ・リサーチ連合研究会発足 | 11 | 品質管理視察団渡米(日本生産性本部) | 5 6 7 10 | 5,000円紙幣発行 日本オペレーションズ・リサーチ学会設立 NHK ラジオ(第2放送)「新しい経営と品質管理講座」放送(日本規格協会) 人工衛星スプートニク1号打上げ成功(ロシア) なべ底不況('57下期~'58下期) 経済白書：速すぎた拡大とその反省 | 1957 (昭和32年) |
| 1958 (昭和33年) | 1 6 11 | 日本短波放送日科技連アワー「経営の鍵」放送開始 (株)日本科学技術研修所創立、同時に計算センター開設(渋谷区千駄ヶ谷) デミング賞「中小企業賞」創設(デミング賞委員会) | 2 5 8 9 | トップマネジメントによるオペレーションズ・リサーチ会議開催(箱根) フランスORセンター Salzman 氏講演会開催 マネジメント演習(ビジネスゲーム)開催(箱根) 計算機械プログラミング短期セミナー開催 | | | 2 9 | アナログコンピューター同好会(アナコン研究会)発足 T委員会(信頼性研究委員会)発足 | | | 1 10 11 12 | 品質管理専門視察団訪米(日本生産性本部) 第1回標準化全国大会開催(日本規格協会) 東京・神戸間こだま号運転開始 1万円紙幣発行 | 1958 (昭和33年) |
| 1959 (昭和34年) | 1 | 日本科学技術研修所、千駄ヶ谷5-10-11にビル建設着工 | 1 4 8 11 11 | Pabst 博士品質管理特別セミナー開催 機関誌『エンジニア・クラブ』を『エンジニアーズ』に改称 経営と管理のための数学短期セミナー開催 Dantzig 博士オペレーションズ・リサーチ・トップコース開催(箱根)、同スタッフコース開催(東京・大阪) 自動計算機活用短期セミナー開催 | | | 3 | 官能検査研究会発足 | 3 | Shewhart 博士来日 | | P.F.Drucker 氏来日、各地で講演 経済白書副題：速やかな景気回復と今後の課題 | 1959 (昭和34年) |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 | |
|-----------------|----|---------------------------------|----|---|----|---|----|------------------------------------|----|---|----|--|----------------------------------|-----------------|
| 1960 (昭和35年) | 6 | デミング賞10周年記念行事開催 | 6 | 第10回品質管理大会特別講演開催 (Hamaker, Deming, Duncan 3 博士) | 10 | 官能検査大会開催 | 4 | 工業分析委員会発足 | 5 | Deming 博士夫妻来日 | 5 | チリ津波三陸沿岸大被害 | 1960 (昭和35年) | |
| | 7 | 日本科学技術研修所ビル竣工 (日本科学技術連盟事務局一部移転) | 6 | ISI 東京総会開催記念海外権威者4 博士による特別セミナー開催 (Wilks, Cochran, Hamaker, Deming) | 11 | 品質月間行事開催 | 7 | 工業分析研究委員会発足 | 6 | Deming 博士勲二等瑞宝章叙勲 | 6 | 新安保条約発効 | | |
| | 11 | 品質月間制定 | 6 | 品質管理・職組長教育の仕方講習会開催 | | | 10 | 新製品開発委員会発足 | 10 | Juran 博士来日 | 9 | カラーテレビ放送開始 | | |
| | | | 7 | 工業分析セミナーポーラログラフ分析実習コース開催 | | | | | | | 10 | 東京都の昼間人口1,000 万人突破 | | |
| | | | 9 | ダイナミック・プログラミングコース開催 | | | | | | | 11 | NHK 教育特集「日本製品の品質」(品質月間参加番組) NHK 第2 放送 | | |
| | | | 9 | 工業生産における信頼性短期セミナー開設 | | | | | | | 12 | 国民所得倍増計画発表 | | |
| | | | 10 | 電子計算機基本プログラミング入門コース開催 | | | | | | | 12 | Juran 博士特別講演会 (日本経済新聞社主催) 日科技連協賛 | | |
| | | | 10 | 電子計算機活用セミナー開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 11 | Juran 博士特別セミナー「社長・重役コース」(箱根・奈良)、「部課長コース」開催 (東京・大阪) | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | * 自治省 (元自治庁) 誕生 2 輪車生産台数世界1 位 (149 万台) テレビ受信機生産高世界2 位 (357 万台) 経済白書: 日本経済の成長力と競争力 | | |
| 1961 (昭和36年) | 5 | 日科技連15 周年記念祝賀会開催 (於: 椿山荘) | 4 | 実験計画法入門コース開設 (東京・大阪) | | | | | 5 | アナログ技術研究会設立 | | 4 | ガガーリン宇宙飛行士ヴォストーク1 号にて地球1 周 (ロシア) | 1961 (昭和36年) |
| | | | 6 | 新製品開発セミナー開催 | | | | | | | | 5 | アジア生産性機構設立 | |
| | | | 8 | MIT-OR センター Morse, Howard, Dobbie3 博士による OR セミナー開催 | | | | | | | | 5 | アナログ技術研究会設立 | |
| | | | 8 | 抜取検査入門短期コース開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 11 | Bliss 博士による統計的方法短期セミナー開催 (東京・大阪) | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | 経済白書副題: 成長経済の課題 | | |
| 1962 (昭和37年) | 4 | 日科技連, 財団法人の認可取得 | 2 | 『工業における官能検査ハンドブック』刊行 | 7 | 数学計画シンポジウム開催 (MPS) | 3 | 人間工学委員会発足 | | | | 3 | テレビ受信契約者1,000 万人突破 | 1962 (昭和37年) |
| | 5 | QC サークル本部設置 | 4 | 『現場とQC』誌創刊 | 11 | 職組長品質管理大会開催 | 6 | 信頼性文献抄録委員会発足 | | | | 5 | 家庭用品品質表示法公布 | |
| | | | 4 | ALGOL によるプログラミング入門コース開催 | 11 | 消費者大会開催 (品質月間行事) | | | | | | | | |
| | | | 8 | 実験計画法セミナー大阪コース開設 | | | | | | | | | | |
| | | | 8 | エレクトロニクス信頼性入門講座開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 9 | PERT・CPM セミナー開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 9 | 品質管理経営幹部特別コース開設 (六甲) | | | | | | | | | | |
| | | | 10 | オペレーションズ・リサーチ部課長コース開設 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | * 防衛施設庁 (元調達庁) 誕生 経済白書: 景気循環の変貌 | | |
| 1963 (昭和38年) | 1 | 大阪連絡事務所開設 (北区曽根崎・成見ビル2 階) | 4 | Hoff 博士軽構造セミナー開催 | 5 | QC サークル大会開催 (仙台) | 6 | ダイナミック・プログラミング理論開発班発足 | 5 | 第1 次品質管理海外視察チーム派遣 (米国) | 9 | 第13 回 CIOS (国際経営科学協会) 大会にて小柳専務理事ゲストスピーカーとして参加 (ニューヨーク) | 1963 (昭和38年) | |
| | 4 | 技術相談業務開始 | 4 | 軽構造セミナー開催 | 11 | トップ・マネジメント品質管理大会開催 | 8 | 軽構造委員会発足 | | | 11 | ケネディ米大統領暗殺 | | |
| | 4 | 日科技連事務所日本橋・坂田ビルに移転 | 9 | 経営システム開発セミナー開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 10 | IE セミナー開設 | | | | | | | | | | |
| | | | 10 | 計算数学基礎コース開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 10 | 『信頼性文献抄訳集』創刊 | | | | | | | | | | |
| | | | 12 | OR を中心とする電子計算機セミナー開催 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | 半導体生産額世界2 位 (339 億円) 経済白書: 先進国への道 | | |
| 1964 (昭和39年) | 9 | QC サークル支部発足 (関東・東海・近畿・北陸) | 3 | 人間工学入門コース開催 | | | | | 5 | 小柳専務理事 Edwards Medal 受賞 (ASQC) | 6 | 新潟大地震 | 1964 (昭和39年) | |
| | | | 10 | ダイナミック・プログラミング関係セミナー開催 | | | | | | | 10 | 東海道新幹線開業 (東京-新大阪間4 時間) | | |
| | | | 11 | アナログ電子計算機応用セミナー開催 | | | | | | | 10 | 東京オリンピック開催 | | |
| | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | 粗鋼生産量世界3 位 (3,979 万トン) 経済白書: 開放体制下の日本経済 | | |
| 1965 (昭和40年) | 1 | 「FQC 賞」(『現場とQC』誌) 創設 | 2 | 信頼性セミナー入門コース (現基礎コース) 開設 | 6 | 品質管理シンポジウム開設 | 2 | 信頼性機械工業分科会発足 | 5 | 第2 次品質管理海外視察チーム派遣 (米国) | 1 | 財企業経営通信学院創立 | 1965 (昭和40年) | |
| | 1 | 小柳賢一専務理事逝去 | 3 | 『ASTM 品質管理必携』(全訂版) 翻訳刊行 | 11 | 日米 Bulk Materials の Sampling に関する科学協力セミナー開催 | 4 | 行動科学研究委員会発足 | 7 | C.R.Rao 博士来日 | 4 | ㈱日本バリュー・エンジニアリング協会創立 | | |
| | 5 | 高松武彦氏第2 代専務理事兼事務局長に就任 | 6 | Morse, Howard, Murray, Salzman4 博士による「MIT-OR セミナー・スタッフコース」, 「MIT-OR セミナー・マネジメントコース」開催 | | | 5 | 人間工学研究会発足 | 9 | 日本の代表IAO の6 人委員会のメンバーに加わる (石川馨・木暮正夫) | 10 | 朝永振一郎博士ノーベル物理学賞受賞 | | |
| | | | 6 | QC サークル中国・四国支部発足 | | | 6 | 関西信頼性研究会発足 | 11 | Deming 博士来日 | | ZD 運動広がる 経済白書: 安定成長の課題 | | |
| | | | 11 | デミング賞15 周年記念行事開催 | | | | | | | | | | |
| 1966 (昭和41年) | 1 | 日科技連, 渋谷区千駄ヶ谷に移転 | 4 | Juran 博士「品質管理トップ・マネジメントコース」, 「部課長コース特別セミナー」開催 | 10 | 工程解析研究討論会開催 | 6 | 工程解析研究会発足 | 4 | Juran 博士来日公開講演会開催 (東京・大阪・名古屋) | 5 | 文化大革命 (中国) | 1966 (昭和41年) | |
| | 2 | デミング賞「実施賞事業部賞」創設 | 4 | 応用数学入門講座開催 | | | 11 | 品質工学研究委員会発足 | 5 | 第3 次品質管理海外視察チーム派遣 (欧米) | | | | |
| | 11 | QC サークルの歌制定 (QC サークル本部) | 7 | 信頼性セミナー部課長コース開催 | | | | | 6 | EOQC ストックホルム大会でQC サークル特別討論会開催 (Juran 博士, 日本のQC サークル活動を紹介) | | | | |
| | | | 8 | 実務のための計算数学基礎コース開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 10 | 品質管理コンピューターコース開催 | | | | | | | | | | |
| | | | 11 | 軽構造セミナー入門コース開催 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | いざなぎ景気 ('65 下期~'70 下期) 経済白書: 持続的成長への道 | | |
| | | | | | | | | * 日本専売公社委託: 電子計算機導入に関する総合システムの研究開発 | | | | | | |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|-----------------------------------|---|-----------------------------------|--|-------------------------|--|--|---|---------------------|--|----------------------------|--|-----------------|
| 1967 (昭和42年) | | | 1 2 4 9 10 | 品質管理セミナー職組長基礎コース開設 部長のための営業と技術セミナー開催 機関誌『エンジニアーズ』を「Engineers」に改称 Bliss 博士講演会開催（東京・大阪） Nylén 氏品質管理セミナー講演会開催（経営幹部特別コースで講演） | 7 | 未来学シンポジウム開催 | 2 4 4 4 10 10 | 未来学企画委員会発足 総合工学企画委員会発足 行動科学研究会委員会発足 複合材料研究会委員会発足 関西新製品研究会委員会発足 I E 特別研究会開催 * 科学技術庁委託：理工学分野における研究水準の測定に関する調査 | 5 9 10 | 第4次品質管理海外視察チーム派遣（欧米） ICQC' 69-Tokyo 組織委員会設置 スウェーデン「鉄鋼企業のQC調査チーム」来日 | 5 8 | 第1回Q-S全国大会開催（日本規格協会） 公害対策基本法施行 経済白書：能率と福祉の向上 | 1967 (昭和42年) |
| 1968 (昭和43年) | 11 | QCサークル九州支部発足 | 8 8 10 11 | 営業部門のための日科技連コース開催 データ処理プログラム入門コース開催 Juran 著『主要産業における品質管理』東洋レーヨン訳刊行（品質管理ハンドブック第3巻） 関西新製品開発セミナー開催 | 7 | 複合材料シンポジウム開催 | 4 | 複合材料研究会設置 * 科学技術庁委託：農業分野における研究水準の測定に関する調査 * 首都圏整備委員会委託：研究学園都市の建設促進に関する調査 * 工業技術院委託：化学分析試験規格の体系調査 | 4 8 | 第1次QCサークル海外派遣チーム（米国） 第5次品質管理海外視察チーム派遣（欧米） | | GNP世界第2位（1,428億ドル） 経済白書：国際化のなかの日本経済 | 1968 (昭和43年) |
| 1969 (昭和44年) | 6 6 | 井上啓次郎氏第3代専務理事就任 西原哲郎氏第3代事務局長就任 | 4 9 | 日科技連研究院総合工学コース開催 品質工学セミナー開催 | 5 7 | 第100回QCサークル記念大会開催 QCサークルシンポジウム開催（箱根） | 4 5 | 複合材料研究会発足 関西支部課長QC会議発足 * 工業技術院委託：JIS Z 8402 分析試験の許容差通則の原案作成，JIS M 8081 沈殿銅のサンプリング方法及び水分決定方法の原案作成 * 建設省委託：首都圏に集中する人口の効率的収容のための都市システムと費用効果に関する研究 * 首都圏整備委員会委託：人口・産業の集中要因と分散可能性調査 | 3 4 6 10 | ICQC' 69 後援会発足 オランダ品質管理視察団来日 ICQC' 69 運営委員会発足 ICQC' 69-Tokyo 開催（世界初の国際品質管理大会） | 7 | アポロ11号月面着陸 テレビ受像機生産台数世界1位（1,269万台） P.F.Druker 氏『断絶の時代』発表 経済白書：豊かさへの挑戦 | 1969 (昭和44年) |
| 1970 (昭和45年) | 1 2 5 6 8 11 11 | 石川一郎会長逝去 植村甲午郎氏第2代会長就任 井上啓次郎氏第6代理事長就任 石川賞委員会発足、「石川賞」創設 「日本品質管理賞」創設 第1回石川賞授賞式 第1回日本品質管理賞授賞式 デミング賞20周年記念行事開催 | 2 3 4 5 6 11 11 | 『QCサークルスライド』作成 IEセミナー入門コース開設 Krauch 博士特別セミナー開催 多変量解析セミナー開設 複合材料セミナー開催 職組長のための品質管理通信教育講座開設 『QCサークル綱領』刊行 | 11 | モダン・エンジニアリング・シンポジウム開催 | 6 9 | 評価要因研究委員会設置 環境保全サンプリング研究会設置 * 建設省委託：首都圏に集中する人口を効率的に収容するための都市システムと費用効果に関する研究 * 工業技術院委託：JIS M 8082 故銅及び銅さいのサンプリング方法及び水分決定方法の原案作成 | 5 10 10 11 | 第6次品質管理海外視察チーム派遣（欧米） 官能検査海外視察チーム派遣（欧米） 複合材料海外視察チーム派遣（欧米） Deming 博士夫妻，Bicking 夫妻来日 | 3 3 8 11 12 | 日本万国博覧会開催（大阪） よど号乗っ取り事件 銀座・新宿で歩行者天国始まる 日本品質管理学会設立（事務局代行） 『標準化ジャーナル』誌創刊（日本規格協会） 経済白書：日本経済の新しい次元 | 1970 (昭和45年) |
| 1971 (昭和46年) | 1 3 3 4 5 5 | デミング賞委員会による「QC診断」創設 QCサークル北海道支部発足 日科技連ビル3号館竣工 「QCサークル本部長賞」創設 日科技連25周年記念行事開催 久留島賞創設 | 6 9 10 10 10 11 | QCサークル洋上大学開設 職組長のためのI E基礎コース開設 購買・資材部門のための日科技連コース開催 関西多変量解析法セミナー開設 『QCサークル活動運営の基本』刊行 インダストリアル・ダイナミクス・セミナー開催 | 4 6 9 10 11 | 信頼性シンポジウム開催 官能検査シンポジウム開催 AICA 国際シンポジウム開催（アナログ技術研究会主催） 機械工業システムズ・デザイン・シンポジウム開催 全日本選抜QCサークル大会開設 職組長品質管理大会第10回記念大会 | 4 4 4 4 5 6 6 8 11 | エコロジー研究会発足 エコ・エネルギー・システム研究会発足 システム人間工学研究会発足 環境保全サンプリング研究会発足 システム人間工学研究会発足 インダストリアル・ダイナミクス研究会委員会発足 機械工業システムズ・デザイン研究会発足 品質システム研究会発足 多変量解析研究会発足 * 建設省委託：都市計画基本調査 * 国土地理院委託：北関東広域都市機能調査のシステム * 建設省委託：全国総合交通体系調査 * 農林省委託：広域農業開発基本調査と大規模林業園開発基本計画との調整調査 * 日本自転車振興会委託：自動設計の基本モデルの開発のための調査 | 6 8 9 11 | 第1次信頼性海外視察チーム派遣（欧米） 複合材料特別国際シンポジウム開催 AICA 国際シンポジウム開催（アナログ技術研究会主催） 米国ロッキード社QC調査団来日 | 4 5 6 7 8 9 | 科学技術会議（70年代における総合的科学技術政策の基本） 第1回生産性の船開催（日本生産性本部） 沖縄返還協定調印 環境庁発足 ニクソン米大統領ドル防衛を発表（ドル・ショック） 『品質』誌創刊（日本品質管理学会） * 環境庁誕生 乗用車生産台数世界2位（372万台） 経済白書：内外均衡達成への道 | 1971 (昭和46年) |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|----|--|----|--|----|--|----|--|-----------------------------------|---|--|--|-----------------|
| 1972 (昭和47年) | 6 | 「SQC賞」創設（『品質管理』誌） 「デミング賞事業所表彰」創設（デミング賞委員会） | 4 | 『Science and Technology in Japan』発行 QCサークル推進者コース開設 分析試験許容差講習会開催 QCサークル夏季大学開催（高野山） 財務管理ケース・スタディ・コース開催 『複合材料』誌創刊 臨床試験における統計手法入門セミナー開催 経営者のための新製品開発特別セミナー開催 | 4 | QC手法開発部会発足 経営技術教育担当者協議会全国大会開催 職組長IE大会開催 | 4 | 経営管理技術教育担当者協議会発足 臨床試験研究委員会設置 プロダクト・リアビリティ研究会発足 「経営者QC会議」を開設 * 建設省委託：都市計画基本調査—都市整備プログラム集計分析及びモデル解析，住宅建設基準策定調査の集計 * 茨城県委託：総合開発フレームの策定 * 埼玉県委託：都市整備計画プログラムの開発 * 日本専売公社委託：経営資金モデルの開発 * 首都圏整備委員会委託：東京湾の大規模利用の影響に関する基礎調査，過密対策調査 * 核物質管理センター委託：FCA用核物質の在庫量の統計的手法による検証に関する調査 * 工業技術院委託：JISの改正原案作成 (1)M 8100 粉砕混合物のサンプリング方法 (2)M 8815 石炭灰及びコークス灰の分析方法通則 (3)M 8810 石炭類及びコークス類のサンプリング，分析並びに試験方法通則 (4)M 8811 石炭類及びコークス類のサンプリング方法ならびに水分決定方法 (5)M 8812 石炭類及びコークス類の工業分析方法 (6)M 8813 石炭類及びコークス類の元素分析方法 | 4 | 第7次品質管理海外視察チーム派遣（米国） IAQ創設 大気汚染防止国際シンポジウム開催（ISAP' 72-Tokyo） | 2 | 連合赤軍「あさま山荘」事件 高松塚古墳壁画発見 石川馨氏グラント賞受賞（ASQC） 沖縄本土復帰，沖縄県発足 日中国交正常化 パンダのカンカン・ランラン中国より到着（上野動物園） | 1972 (昭和47年) |
| | 7 | | 11 | | 10 | | 10 | | 10 | | * 沖縄開発庁誕生 経済白書：新しい福祉社会の建設 | | |
| 1973 (昭和48年) | 1 | 『現場とQC』誌を『FQC』に改称 第1回SQC賞授賞式開催（大阪） 鈴江康平氏第7代理事長就任 前田陽吉氏第4代事務局長就任 | 1 | QCサークルトップコース開催 現場のための応用コース開催 『FMEA・FMECAの解説書』刊行 『教育担当者協議会』ニュース発行 新国土建設特別ビジョン研修会開催 新製品開発セミナーとシンポジウム開催 PLPセミナー（製品賠償責任予防）開催（Sternberg, Marhefka 両氏） | 6 | 交通運輸計画シンポジウム開催 | 3 | 評価問題事例研究会開催 流通部門品質管理研究会発足 大気汚染防止技術研究会発足 シミュレーション技術研究会発足（旧アナログ技術研究会） プロダクト・プランニング研究会発足 プロダクト・プランニング研究会発足 プロダクト・リアビリティ研究会発足 * 茨城県委託：住宅フレーム設定のための基礎調査 * 日本専売公社委託：経営改善の資金モデル分析 * 工業技術院委託：JIS M 8101 銅鉛，鉛鉛，亜鉛鉛，すず鉛，金鉛などのサンプリング方法 * 農林省委託：米生産調整の要因に関するシステム分析 * 首都圏整備委員会委託：東京湾地域総合整備計画推進に関する基礎調査 * 建設省委託：全国総合交通体系調査 * 科学技術庁委託：ライフサイエンスに関する総合レビュー（現状と展望） | 5 | メキシコQC視察団来日 アルジェリア工業標準化視察団来日 Kullback 博士来日 プロダクト・リアビリティ海外視察チーム派遣（欧米） スペインSEAT社QC視察団来日 中国標準化QC代表団来日 ロッキードQCサークル視察チーム来日 | 1 | ベトナム平和協定調印 変動相場制1ドル264円 第1次石油危機 江崎玲於奈博士ノーベル物理学賞受賞 | 1973 (昭和48年) |
| | 5 | | 2 | | 10 | | 10 | | 11 | | 粗鋼生産量1億トン突破，史上最高記録 経済白書：インフレなき福祉をめざして | | |
| 1974 (昭和49年) | 5 | QCサークル東北支部発足 | 2 | 人事組織ケース・スタディ・コース開催 Ball 博士信頼性特別セミナー開催 関西新製品開発特別コース開催 PLP 特別セミナー開催（Jacobs, Kahng, Keeton, Dickson 各氏） Juran 博士特別品質管理セミナー「トップ・マネジメントコース及び部課長特別コース」開催 物流管理ケース・スタディ・コース開催 | 10 | Juran 博士「サービスの品質管理シンポジウム」開催 | 4 | 信頼性データ研究会設置 * 建設省委託：全国総合交通体系調査 * 科学技術庁委託：ライフサイエンスに関する総合レビュー * 国土庁委託：メッシュ手法による国土の土地利用並びにネットワークに関する基礎的なシミュレーション * 農林省委託：水田利用に関するシステム分析 * 日本専売公社委託：利益管理モデルの開発 | 4 | マネジメント・サイエンス海外視察チーム派遣（米国） 海外進出企業品質管理調査チーム派遣（東南アジア） Juran 博士来日 | 5 | 国際協力事業団創立 サンシャイン計画開始（工業技術院） 佐藤栄作元首相ノーベル平和賞受賞 | 1974 (昭和49年) |
| | 11 | | 11 | | 10 | | 10 | | * 国土庁（建設省から分離）誕生 経済白書：成長経済を越えて | | | | |
| 1975 (昭和50年) | 11 | デミング賞25周年記念行事開催 | 2 | 営業部門のための品質管理入門コース開設（大阪） 中堅作業者のための品質管理基礎コース開催 製品責任対策セミナー開催 公害防止技術者のための環境管理セミナー開催 『信頼性管理ガイドブック』刊行 分析・試験技術者・環境計量士のための統計的手法基礎コース開催 『品質のあゆみ』刊行（デミング賞25周年記念） | 11 | Deming 博士「トップ・マネジメントQC大会」，「部課長・スタッフ大会」で特別講演 第500回QCサークル大会開催（佐賀） | 1 | 信頼性データ研究会発足 * 建設省委託：道路網の配置に関する調査研究，バイパスの交通解析調査 * 科学技術庁委託：物性データバンクの整備に関する調査およびライフサイエンスに関する総合レビュー * 農林省委託：農村地域開発手法検討調査 * 国土庁委託：国土情報管理システムの基礎設計 | 9 | 第8次品質管理海外視察チーム派遣（欧州） Deming 博士来日 韓国標準協会と交流（韓国の品質管理技術指導） | 4 | ベトナム戦争終決 複合材学会設立 沖縄国際海洋博覧会開催 ICQC開催（ベニス） 第1回先進国首脳会議（サミット）開催（フランス） 経済白書：新しい安定軌道をめざして | 1975 (昭和50年) |
| | 11 | | 12 | | 12 | | 11 | | | | | | |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|---------|--|-----------------------------------|--|-------------------------------|---|---------------|---|------------------------------|---|--------------|--|-----------------|
| 1976 (昭和51年) | | | 3 6 6 9 10 | 製品責任対策セミナー開設 TOC実務者コース開設 経営戦略部課長コース開設 信頼性技法実践講座「FMEA・FTA」開設 Deming博士MRセミナーで特別講演 | | | 7 | デザインレビュー委員会発足 * 国土庁委託：メッシュ手法による基礎的な長期展望シミュレーション * 農林省委託：農村地域開発手法検討調査 * 経済企画庁委託：欧米におけるプロダクト・ライフヒリディ問題の現状調査 * 科学技術庁委託：物性データバンクの整備に関する調査およびライフサイエンスに関する総合レビュー | 4 10 11 | 東アジアQCサークル国際交流会開催(韓国・ソウル)(現・国際QCサークル大会) Deming博士来日 韓国品質管理調査団来日 | 7 9 | 田中角栄元首相、ロッキード事件で逮捕 酒田市大火、1,774棟焼く 戦後生まれ、総人口の半数を突破 乗用車輸出台数、生産台数の50%を超える 経済白書：新たな発展への基礎固め | 1976 (昭和51年) |
| 1977 (昭和52年) | 6 12 | 前田陽吉氏第4代専務理事就任 土光敏夫氏第3代会長就任 | 1 7 7 7 9 9 12 | コンピュータ優良プログラム紹介講座開催 臨床試験における統計応用コース開催 QCサークルリーダーコース開設 信頼性技法実践講座「デザインレビュー」開設 『デザインレビュー・ガイドブック』刊行 GMPセミナー開設 有限要素法による流れ解析セミナー開設 | 5 5 5 10 10 12 | 住宅産業における品質問題シンポジウム開催 新QC七つ道具特別研究発表会開催(東京・大阪) 多変量解析シンポジウム開催(第7年度研究会) GMPシンポジウム開催 環境システム工学特別講演会開催 | 5 9 | 「QC手法開発部会」「新QC七つ道具研究部会」に改称 数学ソフトウェア研究会発足 * 科学技術庁委託：物性データバンクの整備に関する調査研究 * 経済企画庁委託：消費財メーカー等における品質確保の実態調査 | 5 6 11 | 第9次品質管理海外視察チーム派遣(欧米) 東南アジアQCサークル国際交流会開催(台湾・台北) メキシコ品質管理研修団受入れ開始 | 4 5 12 | 中国地区品質管理研究会発足(広島) 日本品質管理学会社団法人認可 近藤良夫氏グラント賞受賞(ASQC) 経済白書：安定成長への適応を進める日本経済 | 1977 (昭和52年) |
| 1978 (昭和53年) | | | 4 7 | Blanchard博士による「Life Cycle Cost & Design to Cost」講演会開催 Holt博士による「Need Assessment in Product Innovation Process」講演会開催 | 2 | 管理者・スタッフのための新QC七つ道具特別研究発表会(大阪) | 5 6 | 信頼性部会発足 管理者・スタッフのための新QC七つ道具研究会発足(大阪) * 科学技術庁委託：物性データバンクの整備に関する調査研究 * 環境庁委託：負荷量測定方法に関する統計解析 | 2 10 10 | メキシコQC研修生受入 ICQCC'78-Tokyo開催 ICQCC'78-Tokyo開催(世界初のQCサークル国際大会) | 10 10 | 第4回IAQ開催(京都) 日本信頼性技術協会発足 * 農林水産省(元農林省)誕生 経済白書：構造転換を進めつつある日本経済 | 1978 (昭和53年) |
| 1979 (昭和54年) | 12 | 第1回「QCサークル実態調査」の実施 | 6 6 7 8 | PLセミナー入門コース開設 有限要素法による流れ解析セミナー入門コース開催 PL特別セミナー開催(Dickson, Olson) 事務・販売・サービス部門のQCサークルコース開設 | 2 6 9 | 新QC七つ道具シンポジウム開催(大阪) 科学技術に要求される大規模計算に関するシンポジウム開催 流れの有限要素法解析シンポジウム開催 | 4 10 11 | 流れの有限要素法解析研究会 プロダクト・セイフティ・テクノロジー研究委員会発足 サービス業における品質管理研究委員会発足 * 環境庁委託：水質自動計測器による計測方法定立化のための基礎調査 * 防衛庁委託：信頼性・整備性及び安全性に関する用語の調査研究 * 情報処理振興事業協会委託：ソフトウェア要求定義技術に関する調査研究 | 5 5 6 6 6 | フィンランド経営者代表団、日本のQC・マネジメント推進状況視察のため来日 第10次品質管理・製造物責任海外視察チーム派遣(米国) 台湾への技術指導開始 企業管理訪中視察団派遣 ICQCC'79(韓国・ソウル) | 3 | 『Business Week』誌アメリカ企業日本方式で品質管理追及特集号刊行 経済白書：すぐれた適応力と新たな出発 | 1979 (昭和54年) |
| 1980 (昭和55年) | 5 11 | 「オペレーションズ・リサーチ普及賞」受賞(日本オペレーションズ・リサーチ学会) デミング賞30周年記念行事開催 | 5 5 5 9 9 10 11 | ソフトウェア生産管理セミナー開設 英訳版『QCサークル綱領』刊行 『信頼性10年の歩み』刊行 QCサークル活動のはじめ方・進め方研修会開設 信頼性セミナー実践コース開設(大阪) QCサークル管理者コース開設 経営戦略セミナー経営幹部特別コース開設 | 6 | プロダクト・セイフティ(PS)シンポジウム開催 | 2 9 | ソフトウェア生産管理研究委員会発足 信頼性確率紙研究委員会発足 * 防衛庁委託：信頼性・整備性及び安全性用語の規格原案作成 * 情報処理振興事業協会委託：ソフトウェア要求定義技術に関する調査研究 * 工業技術院(燃料協会)委託：石炭類のJIS規格とISO規格の整合性に関する実験研究 | 5 5 9 9 10 11 | 外資系企業経営幹部のための日本の品質管理紹介講座開催 ICQCC'80(台湾・台北) 東南アジア品質管理視察団派遣 中国品質管理研修生受入 Deming博士来日 * ミシガン大学日本研究センター委託：QCサークル活動に関する調査研究 | 3 6 | 個別生産における品質管理シンポジウム(中国地区品質管理研究会) 米国NBCテレビ「If JAPAN CAN... Why Can't We?」を放送、後にNHKテレビでも放映 自動車生産台数世界1位(1,140万台) 経済白書：先進国日本の試練と課題 | 1980 (昭和55年) |
| 1981 (昭和56年) | | | 9 10 12 | 品質管理セミナー経営幹部と部長のための入門コース開設 コストダウンセミナー開設 信頼性技法実践講座「信頼性確率紙の使い方」開催 | 4 7 11 | 第1000回QCサークル大会開催 ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 Juran博士特別講演会 | 5 | 信頼性試験研究委員会発足 | 5 9 11 11 | 第11次品質管理海外視察チーム派遣(欧米) ICQCC'81-Tokyo開催 Juran博士来日 Juran博士勲二等瑞宝章叙勲 | 6 9 10 | 日本シミュレーション学会(シミュレーション技術研究会の改称) 駒野村マネジメント・スクール創立 福井謙一博士ノーベル化学賞受賞 経済白書：日本経済の創造的活力を求めて | 1981 (昭和56年) |
| 1982 (昭和57年) | | | 4 11 | TOC導入・推進講演会開催 Deming博士特別講演会開催(第30回市場調査セミナーおよび第32回品質管理スタッフ・部課長大会) | 4 4 | 科学技術講演会開催 TOC導入・推進特別講演会開催 | | | 6 11 11 | 第12次品質管理海外視察チーム派遣(欧米) Deming博士来日 ICQCC'82(韓国・ソウル) | 6 7 11 | 東北新幹線大宮-盛岡間開通 有限要素法による流れ解析国際シンポジウム開催(有限要素法による流れ解析国際シンポジウム組織委員会主催) 上越新幹線大宮-新潟間開通 経済白書：経済効率性を活かす道 | 1982 (昭和57年) |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|----------------------|---|---------------------------|----|---|----|-----------------------------------|---|---|---|---|----|--|----------------------|
| 1983 (昭和58年) | 1 | 第2回「QCサークル実態調査」の実施 | 4 | Riggs教授による「これからの経営戦略」特別講演会開催 4 J.S.Hunter, D.H.Sheffer 両氏による特別講演会開催 4 PLP 特別講演会開催 (K.G.Griffin) 7 信頼性技法実践講座「信頼性試験」開設 9 営業部門のための品質管理入門コース開設 10 購買・資材部門のための品質管理入門コース開設 | 7 | サービス産業におけるQCシンポジウム開催 | 5 | 故障解析研究委員会発足 5 信頼性部会発足 9 「管理者・スタッフのための新QC七つ道具」研究会東京発足 | 6 | 第13次品質管理海外視察チーム派遣(欧米) 9 ICQCC'83(台湾・台北) | 10 | フレサ氏ノーベル平和賞受賞 経済白書：持続的成長への足固め | 1983 (昭和58年) |
| 1984 (昭和59年) | 2 | QCサークル沖繩支部発足 | 6 | 職組長のためのVE基礎コース開設 7 管理者・スタッフのための新QC七つ道具セミナー入門コース開設(東京) 9 地盤工学における数値解析法セミナー開催 10 サービス産業におけるTQCセミナー入門コース開催 10 多変量解析法セミナー入門コース開催 | 2 | 「管理者・スタッフのための新QC七つ道具」シンポジウム開催(東京) | | | 1 | 米国経済事情視察団派遣 6 第14次品質管理海外視察チーム派遣(欧州) 9 ICQCC'84(フィリピン・マニラ) 10 中国地区品質管理研究会主催のTQCと情報システム訪米調査団に協力 | 10 | 米国10月を「品質月間」とする * 総務庁(元行政管理局)誕生 経済白書：新たな国際化に対応する日本経済 | 1984 (昭和59年) |
| 1985 (昭和60年) | 4 | 日科技連新宿分室開設(新宿吉田ビル) | 1 | 『QCスライド改訂版』刊行 | 11 | サービス産業における品質管理大会開催 | 4 | ソフトウェア生産における品質管理研究会発足 4 地盤工学における計算力学研究会発足 | 5 | ICQCC'85-Tokyo開催 5 国際QCサークルセミナー開催 6 第15次品質管理海外視察チーム派遣(欧州) 11 Deming 博士来日 | 3 | 国際科学博覧会開催(つくば Expo'85) 4 日本電信電話公社民営化 4 日本専売公社民営化 経済白書：新しい成長とその課題 | 1985 (昭和60年) |
| 1986 (昭和61年) | | | 3 | 信頼性技法実践講座「故障解析」コース開設 8 『故障解析ガイドブック』刊行 | 6 | 地盤工学における数値解析法シンポジウム開催 | 4 | 信頼性研究会発足 | 6 | 第16次品質管理海外視察チーム派遣(欧州) 7 日本シミュレーション学会国際シンポジウム開催 10 ICQCC'86(韓国・ソウル) | 5 | 日本品質管理学会15周年祝賀会開催 『15周年のあゆみ』刊行 7 日本シミュレーション学会、国際会議開催 11 伊豆三原山、大噴火 経済白書：国際的調和をめざす日本経済 | 1986 (昭和61年) |
| 1987 (昭和62年) | 1 | 第3回「QCサークル実態調査」の実施 | 4 | 『QCサークル活動25年史』刊行 | 8 | 計算力学シンポジウム開催 | | | 5 | 第17次品質管理海外視察チーム派遣(欧州) 10 ICQCC'87-Tokyo開催 12 ICQCC'87(タイ・バンコック) | 3 | ISO 9000 シリーズ制定 4 日本国有鉄道民営化 8 マルコム・ボルドリッジ国家品質賞制定(米国) 10 利根川進博士ノーベル生理学医学賞受賞 経済白書：進む構造転換と今後の課題 | 1987 (昭和62年) |
| 1988 (昭和63年) | 1 | 『FQC』誌を『QCサークル』に改称 | 10 | ソフトウェア生産管理「部長コース」開設 | 3 | 第2000回QCサークル大会開催(東京) | 7 | 品質機能展開研究会発足 8 信頼性チェックリスト研究開発委員会発足 12 流通業における品質管理研究会発足 | 5 | 第18次品質管理海外視察チーム派遣(米国、ブラジル) 10 国際TQCセミナー開催 11 ICQCC'88(台湾・台北) | 3 | 青函トンネル開通 4 本州四国連絡橋瀬戸大橋開通 9 EFQM創設(ヨーロッパ) 10 第1回マルコム・ボルドリッジ国家品質賞授賞式(米国) 経済白書：内需型成長の持続と国際社会への貢献 | 1988 (昭和63年) |
| 1989 (昭和64年/平成元年) | 1 | 特許法第30条第1項に基づく学術団体の指定を受ける | 4 | 信頼性技法実践講座「信頼性向上のためのチェックリストの作り方・使い方」開催 | | | 1 | エルゴノミクス・ヒューマンファクター研究会発足 | 4 | 第1次ソフトウェア製品品質管理調査団派遣(欧米) 7 クオリティ・マネジメント視察団派遣(欧州) 9 第19次品質管理海外視察チーム派遣(欧州) 11 フロリダ電力デミング賞実施賞受賞(初の海外受賞企業) 12 ICQCC'89(インドネシア・バンドン) | 1 | 昭和天皇崩御、元号「平成」となる 4 石川馨・西堀栄三郎両博士逝去 4 中国地区品質管理研究会、中国地区品質管理協会に改称、同協会で「第1回中国地方品質管理賞」贈呈式 5 水野滋博士逝去 11 ベルリンの壁崩壊 経済白書：平成経済の門出と日本経済の新しい潮流 | 1989 (昭和64年/平成元年) |
| 1990 (平成2年) | 3 | 「FQC賞」を「石川馨賞」と改称 | 4 | サービス産業・販売業のためのQCサークルリーダーコース開設 | 3 | 管理者・スタッフの新QC七つ道具研究事例発表会開催 | 6 | TQC Research Group 設立準備委員会発足 8 感性計測技術研究会発足 | 5 | 第20次品質管理海外視察チーム派遣(米国) 6 信頼性・保全性国際シンポジウム開催(日科技連信頼性・保全性シンポジウム20回記念) 10 ICQCC'90-Tokyo開催 10 Juran 博士来日(TQC国際セミナー)ゲスト講師として特別講義 | 3 | MIT産業生産性調査委員会レポート 『Made in America』日本語訳刊行 8 湾岸戦争勃発 10 長崎雲仙普賢岳噴火 11 ドイツ国家統一 経済白書：持続的拡大への道 | 1990 (平成2年) |
| 1991 (平成3年) | 1 | 第4回「QCサークル実態調査」の実施 | 10 | パソコンによるやさしい信頼性解析法セミナー開設 | 3 | 品質機能展開シンポジウム開催 | * | 工業技術院委託：JIS改正原案調査作成 (1)M 8812 石炭類及びコークス類の工業分析方法 (2)M 8814 石炭類及びコークス類の元素分析方法 | 4 | 第21次品質管理海外視察チーム派遣(欧州) 10 ICQCC'91(インドネシア・バリ) | 5 | 日本信頼性技術協会を日本信頼性学会に改称 10 European Quality Award 制定(欧州) 10 ISO 9000 シリーズの対応 JIS (Z 9900 シリーズ) 制定 経済白書：長期拡大の条件と国際社会における役割 | 1991 (平成3年) |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|---|--|---|---|---|---|---|--|--|---|--|--|----------------|
| 1992 (平成4年) | 2 | 日科技連東高円寺ビル着工（杉並区高円寺1-2-1） | 1 | 品質管理セミナー係長・主任コース開設 4 ISO 9000 審査員研修コース開設 (IQA) 10 AHP (階層化意思決定セミナー) 開設 11 ISO 9000 内部監査員コース開設 (IQA) | | | 4 | TQC Research Group Work Shop 開催 | 10 | ICQCC' 92 (韓国・ソウル) | 6 | 地球サミット開催 (ブラジル) 9 毛利衛さんスペースシャトルで宇宙へ 11 第1回ブラジル国家品質賞 (ブラジル) 経済白書：調整を越えて新たな展開をめざす日本経済 | 1992 (平成4年) |
| 1993 (平成5年) | 6 | 鈴江康平氏第4代会長就任 6 前田陽吉氏第8代理事長就任 6 野口順路氏第5代専務理事就任 6 日科技連東高円寺ビル竣工 (現・TQM事業部移転) 11 ISO/QSセンター、ISO/QS研修事業部設置 | 3 | ソフトウェア生産管理「管理者基礎コース」開催 7 ロジスティック・システムデザインセミナー開設 9 「新QC七つ道具」セミナー部課長コース開設 | 4 | 第3000回QCサークル大会開催 (東京) | 9 | 品質情報システム研究委員会発足 | 6 | 第22次品質管理海外視察チーム派遣 (欧州) 11 第4回ルノーシンポジウム協賛開催 12 ICQCC' 93 (タイ・バンコック) | 4 | 品質工学フォーラム発足 (日本規格協会) 6 皇太子殿下・小和田雅子さんとご成婚 6 Ishikawa Medal 創設 (米国) 7 北海道南西沖地震 (奥尻島) 11 『信頼性の歴史』刊行 (日本信頼性学会) 12 Deming 博士逝去 経済白書：バブルの教訓と新たな発展への課題 | 1993 (平成5年) |
| 1994 (平成6年) | 3 | 日科技連ビル1号館改修 | 2 | ISO 9000 審査員研修コース開設 3 ISO 9000 推進担当者コース開設 4 ISO 9000 入門コース開設 4 ISO 9000 内部監査員コース開設 6 ソフトウェアの品質管理セミナー「デザインレビューコース」開設 7 QCサークル経営幹部コース開設 10 製品安全専門講座「安全技術者コース」開設 11 経営の効率性分析と改善セミナー開設 11 製品安全専門講座「管理責任者コース」開設 | 6 | TQC Research Group によるシンポジウム開催 10 品質情報システムシンポジウム開催 | 6 | 品質改善手順研究委員会発足 * 工業技術院委託：JIS改正原案調査作成 (1)M 8081 沈殿銅のサンプリング方法及び水分決定方法 (2)M 8082 銅製錬用故銅及び銅さいのサンプリング方法及び水分決定方法 (3)M 8083 ばら積み非鉄金属浮選精鉱のサンプリング方法 (4)M 8815 石灰灰及びコークス灰の分析方法 (5)M 8817 石炭類の形態別硫黄の定量方法 | 5 | Ishikawa Medal の第1回授与式 (米国 ASQC) 5 第23次品質管理海外視察チーム派遣 (米国) 10 ICQCC' 94 (香港) | 5 | 英仏海底トンネル開通 6 製造物責任 (PL) 法制定 7 向井千秋さん (日本人女性初の宇宙飛行士) 宇宙へ 9 関西国際空港開港 9 ビックスリー QS-9000 発表 (米国) 10 大江健三郎氏ノーベル文学賞受賞 経済白書：厳しい調整を越えて新たなフロンティアへ | 1994 (平成6年) |
| 1995 (平成7年) | 3 | ISO/QSセンター、ISO/QS研修事業部JABの認定を取得 6 高橋貞雄氏第5代会長就任 6 榎林愛朗氏第9代理事長就任 6 福田正文氏第6代事務局長就任 12 第5回「QCサークル実態調査」の実施 | 4 | 電子・機械システムの信頼性技術セミナー開設 (大阪) 10 課題達成型QCストーリーセミナー開設 10 官能評価セミナー入門コース開設 10 物造りの基本特別講座開設 11 商品企画七つ道具セミナー開設 | | | 2 | 物造りの基本研究委員会発足 4 ネオダム時代の品質管理研究委員会発足 4 品質改善研究委員会発足 | 3 | 品質機能展開国際シンポジウム開催 10 ICQCC' 95-Yokohama 開催 | 1 | 阪神淡路大震災 3 地下鉄サリン事件 4 世界都市博覧会中止 7 製造物責任 (PL) 法施行 11 科学技術基本法施行 11 臨海副都心新交通ゆりかもめ開通 12 日本経営品質賞創設 (社会経済生産性本部) GDP2年連続世界1位 (国民1人当たり3万7,618ドル) 経済白書：日本経済のダイナミズムの復活をめざして | 1995 (平成7年) |
| 1996 (平成8年) | 4 | 「TQC」を「TQM」に呼称を変更 5 日科技連50周年 | 3 | ISO 9000とTQMの融合セミナー開講 4 戦略立案と方針管理セミナー開講 4 事務系部門のためのやさしい統計解析講座開講 5 『QCサークルの基本 (旧・綱領)』改訂版発行 6 「新QC七つ道具」実践コース開講 7 経営者のためのISO 9000一日コース開講 10 知的生産性アップのためのマネジメントセミナー開講 11 部課長・スタッフのための課題達成型QCストーリーセミナー開講 12 QS 9000一日コース開講 | | | 4 | 信頼性開発技術研究会発足 4 TQM検討委員会発足 4 ISO 14000 検討委員会発足 | 5 | 第24次品質管理海外視察チーム派遣 10 ICQ' 96 - Yokohama 開催 10 ICQCC' 96 (マレーシア・クアラルンプール) 開催 | 7 | 科学技術基本計画の閣議決定 2 薬害エイズ事件 7 アトランタオリンピック開催 10 第41回衆議院議員総選挙 11 アメリカ大統領選でビル・クリントン再選 12 ベルー日本大使公邸人質事件発生 12 大阪府堺市などでO-157食中毒多発 経済白書：改革が展望を切り拓く | 1996 (平成8年) |
| 1997 (平成9年) | 1 | 日科技連50周年記念特別講演会・祝賀会、新年賀詞交歓会併催 1 「TQM宣言」冊子の配布 7 「ISO/QSセンター」を「ISO審査登録センター」に名称変更 | 1 | 設計開発のためのマネジメントセミナー開設 1 『50年のあゆみ』刊行 6 信頼性セミナー入門コース (大阪) 開講 7 『QCサークル活動運営の基本』改訂・発行 9 品質機能展開セミナー実践コース開講 8 モデル・ベース・プランニングセミナー開催 10 QCサークル管理者1日コース新設 | 2 | 第20回多変量解析シンポジウム開催 3 TQMフォーラム開催 6 第6回品質機能展開シンポジウム開催 7 TQM部課長スタッフ名古屋大会 7 第27回信頼性・安全性シンポジウム開催 9 第17回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 12 第27回官能評価シンポジウム開催 | | 5 | 第25次品質管理海外調査団派遣 8 ICQCC' 97 (中国・北京) 開催 10 第3回国際品質機能展開シンポジウム開催 11 第9次ソフトウェア製品品質管理調査団派遣 | 2 | 1996年度日本経営品質賞表彰式、報告会開催 (社会経済生産性本部) 4 消費税増税実施 (3%から5%に) 2 神戸連続児童殺傷事件 6 デンバーサミット開催 7 香港中国に返還 8 ダイアナ元英皇太子妃、パリで事故死 11 北海道拓殖銀行破綻、山一證券破綻 12 地球温暖化防止京都会議で京都議定書採択 経済白書：改革へ本格起動する日本経済 | 1997 (平成9年) | |
| 1998 (平成10年) | 6 | 井田勝久氏第10代理事長に就任 7 環境マネジメントシステム審査登録機関としてJAB認定取得 10 環境マネジメントシステム審査員研修機関としてJAB認定取得 10 「QCサークル洋上大学」を「日科技連の船」として開催 | 2 | ISO 14000 環境審査員研修コース開催 3 「創造的魅力商品の開発」セミナー開催 4 ISO 9000 建設業のための品質システム構築・実践コース開催 4 TQMセミナー部課長コース名古屋で開催 6 コスト・マネジメント・マスターコース開催 7 パソコン活用による問題解決能力向上セミナー開講 | 3 | 第21回多変量解析シンポジウム開催 3 第17回新QC七つ道具シンポジウム開催 7 第28回信頼性・安全性シンポジウム開催 10 TQMフォーラム開催 10 第28回官能評価シンポジウム開催 11 第18回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | | 6 | 米国モトローラ社DJ. ミスジンスキー氏特別講演会開催 10 第10次ソフトウェア製品品質管理調査団派遣 10 ICQCC' 98 (スリランカ・コロンボ) 開催 | 2 | 長野オリンピック開幕 4 日本版金融ビッグバンスタート 6 金融監督庁発足 7 和歌山毒物カレー事件発生 12 国際連合の大量破壊兵器査察を拒否したイラクを米英軍が空爆 経済白書：創造的発展への基礎固め | 1998 (平成10年) | |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|----|--|----|---|----|--|----|-------------------|----|---------------------------------------|----|---------------------------------------|-----------------|
| 1998 (平成10年) | | | 7 | 事務系のためのやさしい統計解析講座開講 | | | | | | | | | 1998 (平成10年) |
| 1999 (平成11年) | 9 | 「日科技連の船」を「QCサークル海外研修団」として開催 | 8 | 日科技研 JUSE-StatWorks 発売 | 3 | 第22回多変量解析シンポジウム開催 | 4 | 日本品質奨励賞研究委員会発足 | 4 | 第11次ソフトウェア製品品質管理調査団派遣 | 1 | EUの単一通貨ユーロ導入 | 1999 (平成11年) |
| | 10 | 日本品質管理賞がデミング賞受賞後3年で受審可能とする | 10 | マネジャーのための対人関係能力向上セミナー開設 | 7 | 第29回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 7 | 99 TRG ワークショップ開催 | 7 | ICQCC'99 (フィリピン・マニラ) 開催 | 3 | 日本銀行、ゼロ金利政策実施 | |
| | | | 10 | 吉田耕作氏による「Joy of Work」セミナー開催 | 10 | CE&SCM フォーラム (コンカレントエンジニアリングとサプライチェーンマネジメントの展望) 開催 | 10 | | | | 4 | 石原慎太郎、東京都知事に当選 | |
| | | | 12 | 信頼性技法実践講座「故障物理と寿命予測」開講 | 10 | 医療のTQM推進協議会「医療の改善活動」フォーラム開催 | 10 | | | | 6 | 新幹線トンネルのコンクリート壁が剥落 | |
| | | | | 流れ解析法入門講座開講 | 10 | 第29回官能評価シンポジウム開催 | 10 | | | | 8 | 国旗国歌法成立 | |
| | | | | | 10 | 第8回品質機能展開シンポジウム開催 | 11 | | | | 9 | 東海村 JCO 臨界事故発生 | |
| | | | | | | 第19回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | | | | | | 経済白書：経済再生への挑戦 | |
| 2000 (平成12年) | 1 | 「日本品質奨励賞」創設 | 2 | 病院へのQCサークル活動導入セミナー入門コース開講 | 3 | 第23回多変量解析シンポジウム開催 | 4 | S-TQM推進協議会発足 | 6 | 第6回国際品質機能展開シンポジウム開催 | 1 | 米アメリカ・オンライン、米タイム・ワナー買収を発表 | 2000 (平成12年) |
| | 6 | 「石川賞」の推薦・応募を中止 | 3 | 「商品企画七つ道具」解説講座開講 | 7 | 第30回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 4 | ナレッジ研究委員会発足 | 6 | 第2回世界ソフトウェア品質会議開催 | 6 | 介護保険制度施行 | |
| | 6 | 大庭 浩氏第6代会長に就任 | 3 | 「商品企画七つ道具」解説講座開講 | 7 | ナレッジ・クリエーション (知識創造) フォーラム開催 | 7 | | 11 | ICQCC'2000 (シンガポール) 開催 | 4 | 第42回衆議院議員選挙 | |
| | 11 | 「サービスオリティ推進協議会」発足 | 6 | QCサークル指導士資格認定コース開講 | 7 | 第30回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 7 | | | | 6 | 雪印集団食中毒事件発覚 | |
| | 11 | デミング賞創設50周年記念史発行 | 7 | ソフトウェア品質技術実践講座「プロジェクトマネジメントコース」開講 | 10 | 第30回官能評価シンポジウム開催 | 10 | | | | 7 | 新紙幣 2000 円札発行 | |
| | | | 8 | ソフトウェア品質技術実践講座「品質保証実践コース」開講 | 10 | 第9回品質機能展開シンポジウム開催 | 10 | | | | 7 | 21世紀夢の技術展 (通称ゆめテク) が東京国際展示場で開催 | |
| | | | 10 | トップマネジメント品質経営セミナー開講 (旧・TQM 重役特別コース) | 11 | 品質管理大会 (部課長・スタッフTQM 大会、管理・監督者品質管理大会、サービス産業品質管理大会) を統合し、「クオリティフォーラム2000」として開催 | 11 | | | | 7 | 第26回主要先進国首脳会議 (九州・沖縄サミット) が開催 | |
| | | | 10 | ISO9000 認証取得後の品質経営セミナー開講 | 11 | 69 QCS で「箱根宣言」 | 11 | | | | 9 | シドニーオリンピック開幕 | |
| | | | 10 | ソフトウェア品質技術実践講座「原因分析コース」開講 | 11 | SPC 20 周年記念フォーラム開催 | | | | | 12 | 20 世紀の最後の日 | |
| | | | 10 | ソフトウェア品質技術実践講座「デバック工学とテスト技法コース」開講 | | | | | | | | 経済白書：新しい世の中が始まる | |
| | | | 11 | 企業競争力を高める顧客満足度 (CS) データの解析と活用開講 | | | | | | | | | |
| 2001 (平成13年) | 1 | QCサークル経営者賞創設 | 2 | TQM奨励賞推進者コース開講 | 2 | 第24回多変量解析シンポジウム開催 | 4 | VVT研究委員会発足 | 5 | ASQとパートナーシップ締結 | 1 | ジョージ・W・ブッシュがアメリカ合衆国大統領に就任 | 2001 (平成13年) |
| | 5 | 「日本ものづくり・人づくり質革新機構：JOQI (Japan Organization for Quality Innovation)」の活動がスタート | 4 | 「QC サークルリーダーコース」の名称をリーダーのための総合力養成コースとして開講 | 7 | 第31回官能評価シンポジウム開催 | 8 | ISO推進者会議発足 | 8 | ASQ会長グレゴリーワトソン氏を招聘して日米合同特別セミナー開催 | 2 | ハワイ沖で実習船「えひめ丸」が米海軍の原子力潜水艦と衝突 (えひめ丸事件) | |
| | 6 | 三田征史氏第7代事務局長に就任 | 5 | 吉田耕作氏による「Joy of Work」セミナーを「競争力強化セミナー」に改称 | 11 | 第20回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | 12 | | 10 | 第7回国際品質機能展開シンポジウム開催 | 10 | 小泉内閣発足 | |
| | | | 6 | 「戦略的方針管理」フォーラム開催 | | 「購買革新フォーラム」開催 | | | 10 | ICQCC'01 (台湾・台北) 開催 | 4 | 日本品質管理学会 30 周年記念シンポジウム開催 | |
| | | | 9 | 「品質管理士」資格認定試験実施 | | | | | 11 | EQO とパートナーシップ締結 | 5 | 日本国内初の狂牛病 (BSE) 感染牛が発見 | |
| | | | 12 | ASQ COE (品質エンジニア) 資格認定制度開設 | | | | | | | 9 | アメリカ同時多発テロ事件 | |
| | | | | | | | | | | | 9 | アメリカ軍によるアフガニスタン侵攻開始 | |
| | | | | | | | | | | | 10 | アメリカ軍によるアフガニスタン侵攻開始 | |
| | | | | | | | | | | | | 経済財政白書：改革なくして成長なし | |
| 2002 (平成14年) | 1 | 月刊誌「品質管理」を「クオリティマネジメント」として刷新 | 6 | 新GCP (医薬品の臨床試験実施の基準) 導入のためのモニター教育セミナー・導入コース開催 | 2 | 第25回多変量解析シンポジウム開催 | 4 | ニュービジネスモデル研究委員会発足 | 6 | 第13次ソフトウェア国際品質ワークショップの調査団派遣 | 5 | 2002 FIFA ワールドカップ開幕 | 2002 (平成14年) |
| | 1 | 機関誌「ENGINEERS」を廃止し、あらたに「日科技連ニュース」と「クオリティのひろば」として発行 | 6 | 利益を創出する「購買革新フォーラムⅡ」開催 | 5 | 行政ワークショップ開催 | | | 6 | 中国 (北京) QCサークル代表団来日 | 5 | アジア品質ネットワーク創立 (ANQ) | |
| | | | 6 | ソフトウェア品質技術実践講座 ソフトウェアプロセス改善実践コース開講 | 7 | 第32回信頼性・保全性シンポジウム開催 | | | 6 | 訪中品質管理調査団派遣 | 8 | 住民基本台帳ネットワーク開始 | |
| | | | 6 | 労働安全衛生マネジメントシステム1日コース開催 | 10 | 第10回品質機能展開シンポジウム開催 | | | 9 | 第9回国際品質機能展開シンポジウム開催 | 10 | 北朝鮮に拉致された日本人5人が帰国 | |
| | | | 6 | 利益を創出する「購買革新フォーラム」開催 | 12 | 第21回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | | | 9 | ASQ, EQO, JUSE, IAQ の4団体による「世界品質宣言」発効 | 10 | ノーベル賞物理学賞・小柴昌俊氏、化学賞・田中耕一氏ダブル受賞 | |
| | | | 7 | 情報セキュリティマネジメントシステム1日コース開講 | | | | | 11 | 第14次ソフトウェア国際品質ワークショップの調査団派遣 | 12 | 東北新幹線盛岡駅～八戸駅間延長開業 | |
| | | | 7 | 労働安全衛生マネジメントシステム構築実践コース開催 | | | | | 12 | ICQCC'02 (インド・ラックノウ) 開催 | | 経済財政白書：改革なくして成長なしⅡ | |
| | | | 9 | ISO/GMS セミナーシリーズ「統合マネジメントシステム導入の秘訣コース」開催 | | | | | | | | | |
| | | | 10 | 商品開発・戦略特別講演会開催 | | | | | | | | | |
| | | | 11 | LSI 技術者のための信頼性セミナー開講 | | | | | | | | | |
| | | | 12 | ISO 9000 品質文書の簡素化実現セミナー開講 | | | | | | | | | |
| 2003 (平成15年) | 5 | 変革の時代のTQM 講演会開催 | 3 | 月刊誌「QCサークル」通巻500号 | 2 | 「購買革新フォーラムⅢ」開催 | 4 | 奨励賞医療開発研究委員会発足 | 9 | 第15次ソフトウェア国際品質ワークショップの調査団派遣 | 2 | スペースシャトル、コロンビア号が着陸前にテキサス州上空で空中分解 | 2003 (平成15年) |
| | | | 3 | 月刊誌「クオリティマネジメント」通巻700号 | 7 | 第33回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 4 | 企業品質経営度調査研究委員会発足 | 4 | 第9回国際品質機能展開シンポジウム開催 | 3 | 米英によるイラク侵攻作戦開始 (イラク戦争のはじまり) | |
| | | | 3 | 実験計画法セミナーの実施内容を改定し、「技術・設計・新製品開発に役立つデータの収集・解析法セミナー」とする | 7 | 「購買革新フォーラムⅣ」開催 | | | 7 | ICQCC'03 (日本・東京) 開催 | 3 | 郵政事業庁が日本郵政公社に | |
| | | | 5 | ISO 9000 要求事項詳細解説コース開講 | 7 | 「戦略的方針管理」フォーラム開催 | | | 8 | | 4 | イラク特措法成立 | |
| | | | 6 | ヒューマンエラー防止策と目で見える管理の実践セミナー開講 | 8 | 行政ワークショップⅡ開催 | | | 11 | | 7 | 東海道新幹線の東京駅～新横浜駅間に品川駅が開業 | |
| | | | 6 | ISO 9000 上級審査員研修コース開講 | 11 | 第11回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | 10 | 第43回衆議院議員総選挙 | |
| | | | 7 | らくらくExcel 活用シリーズ (問題解決手法初級コース, 問題解決実践初級コース) 開講 | 12 | 第22回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | |
| | | | 7 | モニター教育セミナーをリニューアル開催 | | | | | | | | | |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|----|---|----|--|----|------------------------------|----|------------------------------|----|--|----|---|-----------------|
| 2003 (平成15年) | | | 7 | 臨床試験セミナー入門コース開講 | | | | | | | | 経済財政白書：改革なくして成長なしⅢ | 2003 (平成15年) |
| 2004 (平成16年) | 3 | 奥田 碩氏第7代会長に就任 | 1 | ISO 9000 審査員資格拡大研修コース開講 | 3 | 営業のTQMフォーラム開催 | 4 | 行政TQM研究委員会発足 | 10 | 第17次ソフトウェア国際品質ワークショップの調査団派遣 | 1 | 自衛隊イラク派遣開始 | 2004 (平成16年) |
| | 3 | 第6回「QCサークル実態調査」の実施 | 2 | ISO 14001 環境審査員資格拡大研修コース開講 | 4 | 「購買革新フォーラムV」開催 | 4 | QCC自己評価委員会発足 | | | 4 | イラク日本人質事件発生 | |
| | 5 | 「医療の質奨励賞」創設 | 7 | すぐわかる管理図入門コース開講 | 7 | 第34回信頼性・安全性シンポジウム開催 | 7 | 第34回信頼性・安全性シンポジウム開催 | 12 | ICQCC'04(タイ・バンコク)開催 | 5 | J. Mジュラン博士100歳誕生祝賀会開催 | |
| | 6 | 米山高範氏第11代理事長に就任 | 7 | すぐわかるヒストグラム・工程能力コース開講 | 11 | 第12回品質機能展開シンポジウム開催 | 11 | 第12回品質機能展開シンポジウム開催 | | | 8 | アテネオリンピック開幕 | |
| | 6 | 三田征史氏第6代専務理事に就任 | 7 | プライバシーマーク取得研修コース開講 | 12 | 第23回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | 12 | 第23回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | | | 9 | 日本プロ野球選手会がプロ野球史上初の土日のストライキを決行 | |
| | 7 | 第1回「企業の品質経営度調査」実施 | 8 | すぐわかる業務改善スキルアップコース開講 | | | | | | | 10 | イチロー選手がシーズン最多安打記録257本を更新 | |
| | 11 | 日経産業新聞フォーラム「企業の品質経営度調査分析報告」開催 | 8 | ISMS 審査員研修コース開講 | | | | | | | 10 | 新潟県中越地震発生 | |
| | | | 9 | すぐわかるQCサークル活動の効果と導入までのステップ開講 | | | | | | | 12 | スマトラ島沖地震が発生 | |
| | | | 11 | SEI認定「CMMI入門」コース開講 | | | | | | | | 経済財政白書：改革なくして成長なしⅣ | |
| 2005 (平成17年) | 4 | 組織改革により「総合推進室」解散 | 3 | 2日でマスターする実験計画法セミナートライアルコース開講 | 6 | 第35回信頼性・安全性シンポジウム開催 | 5 | R-Map 実践研究会発足 | 9 | ICQ'05-Tokyo開催 | 1 | 自動車リサイクル法施行 | 2005 (平成17年) |
| | 7 | 第2回「企業の品質経営度調査」実施 | 4 | BBTと共同で「MOT入門コース」開講 | 9 | 企業の品質経営度調査フォーラム開催 | 9 | SQuBOK®(ソフトウェア品質知識体系)策定 | 9 | WAQ(World Alliance for Quality)創設 | 2 | 京都議定書が発効 | |
| | 11 | 「品質経営トップマネジメント大会」を賛助会員特典として無料にて招待 | 4 | BBTと共同で「MOT入門コース」開講 | 9 | 第24回ソフトウェア生産における品質管理シンポジウム開催 | 9 | 部会発足 | 10 | ICQCC'05(韓国・チャンウォン)開催 | 2 | 中部国際空港(セントレア)が愛知県常滑市沖に開港 | |
| | | | 5 | 品質トラブルの未然防止セミナー開講 | 10 | 第13回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | 3 | 2005年日本国際博覧会(愛知万博)「愛・地球博」が開幕 | |
| | | | 6 | コンセプトマイニング・セミナー開講 | | | | | | | 4 | 個人情報保護法全面施行 | |
| | | | 6 | ISO 13487 内部監査員コース開講 | | | | | | | 6 | アスベストによる人体への被害がクローズアップされる | |
| | | | 7 | 通信教育「お客様へのサービス向上基礎講座」開講 | | | | | | | 8 | 首都圏新都市鉄道つくばエクスプレス線(東京・秋葉原駅～茨城・つくば駅間)が開通 | |
| | | | 7 | 経営に貢献する強健な生産現場づくりセミナー開講 | | | | | | | 9 | 第44回衆議院議員総選挙 | |
| | | | 7 | ISO 13485 入門コース開講 | | | | | | | 8 | ハリケーン「カトリーナ」が米国フロリダ州に上陸 | |
| | | | 7 | ISO 13486 マネジメントシステム構築実践コース開講 | | | | | | | 10 | 日本道路公団、首都高速道路公団、阪神高速道路公団及び本州四国連絡橋公団の道路4公団が民営化 | |
| | | | 10 | 品質機能展開セミナー応用講座「業務の選択と集中手法」開講 | | | | | | | 11 | 惑星探査機はやぶさが小惑星糸川への着陸と岩石の採取に成功 | |
| | | | 11 | すぐに使える多変量解析法入門コース開講 | | | | | | | 11 | 建築設計事務所による構造計算書の偽造が21件発覚(耐震強度偽装事件) | |
| | | | | | | | | | | | 12 | 日本規格協会第1回品質管理検定「QC検定」実施 | |
| | | | | | | | | | | | | 経済財政白書：改革なくして成長なしⅤ | |
| 2006 (平成18年) | 1 | 高橋 明氏第12代理事長に就任 | 1 | 60年史『日科技連のあゆみ、その後の10年』刊行 | 6 | 第36回信頼性・安全性シンポジウム開催 | 2 | 次世代品質革新プロジェクト(PIQ)(東京)発足 | 5 | 第1回World Summit of National Quality Association(ベルギー・アントワープ)開催 | 5 | 環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)発効 | 2006 (平成18年) |
| | 1 | 日科技連60周年記念、新年賀詞交歓会開催 | 4 | QC手法基礎コース開講 | 6 | 第82回品質管理シンポジウム開催 | 4 | 品質経営実践研究会(QMP)(大阪)発足 | | | | | |
| | 5 | 日科技連創立60周年 | 5 | SESSAME認定・組込みソフトウェア技術者・管理者向けセミナー初級者向けコース開講 | 9 | 第25回ソフトウェア品質シンポジウム開催 | | | | | 9 | ISQFD'06-Tokyo開催 | |
| | 6 | 御手洗富士夫氏第8代会長に就任 | 5 | 品質改善のための問題解決力実践コース開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | 11 | ICQCC'06(インドネシア・バリ)開催 | |
| | 8 | 浜中順一氏第13代理事長に就任 | 5 | ISMS入門コース開講 | 11 | クオリティフォーラム2006開催 | | | | | | | |
| | 9 | 「品質管理検定(QC検定)制度」を日本規格協会と共催により実施 | 6 | 薬剤疫学セミナー開講 | 11 | 第36回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | |
| | 10 | 「QCサークル本部登録制度」をインターネットを活用した本部登録制度に変更 | 6 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム入門コース開講 | 12 | 第83回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | |
| | | | 7 | タグチメソッド入門コース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 7 | 信頼性セミナー初級1日コース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 8 | お客様へのサービス向上のための問題解決力実践コース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 8 | 経営者のためのISMS1日コース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 11 | すぐに使える多変量解析法セミナー入門コース開講 | | | | | | | | 経済財政白書：成長条件が復元し、新たな成長を目指す日本経済 | |
| 2007 (平成19年) | 1 | 日本品質奨励賞「品質技術革新賞」が「品質革新賞」に名称変更 | 4 | 自動車部品メーカーの自律型品質保証・品質管理セミナー開講 | 6 | 第84回品質管理シンポジウム開催 | 4 | 自動車部品メーカーの品質保証・品質管理研究委員会発足 | 3 | SRM大学とのMOU締結 | 1 | 防衛省発足 | 2007 (平成19年) |
| | 1 | デミング・イノベーション・プログラム(DIP)活動開始 | 5 | ISO22000 食品安全法規完全マスターコース開講 | 7 | 第37回信頼性・安全性シンポジウム開催 | 10 | SQC実践研究会発足 | 10 | ICQCC'07(中国・北京)開催 | 7 | 新潟県中越沖地震 | |
| | 6 | 第3回「企業の品質経営度調査」実施 | 6 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム構築・運用コース開講 | 9 | 第26回ソフトウェア品質シンポジウム開催 | | | | | 10 | 日本郵政公社民営化 | |
| | 8 | SPCの呼称をSQIP(Software Quality Profession)に変更 | 6 | 人を育てるコーチングセミナー開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | 11 | サブプライムローン問題(世界金融危機)発生 | |
| | 9 | 「品質管理セミナーベーシックコース」が日本統計学会「第3回統計教育賞」を受賞 | 6 | ISO/TS16949 要求事項の詳細解説コース開講 | 11 | クオリティフォーラム2007開催 | | | | | 12 | | |
| | 11 | ITサービスマネジメントシステム審査登録機関としてJIPDEC認定取得 | 7 | 施策実行型QCストーリーセミナー開講 | 12 | 第85回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | |
| | | | 7 | ISO9000 プロセスアプローチによる内部監査技法習得コース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 11 | 信頼性技術者資格認定制度創設 | | | | | | | | 経済財政白書：生産性上昇に向けた挑戦 | |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 |
|-----------------|----|--------------------------------|-------------------------------|--|---------------------|---|----|---|----|--|----|--------------------------|-----------------|
| 2008 (平成20年) | 4 | J-club 設立 | 3 | メディカルライティング実践コース開講 | 5 | 第5000回記念QCサークル大会(東京)開催 | 2 | 次世代TQMの構築研究委員会発足 | 5 | ICQ'08(アメリカ・ヒューストン/WCQIと併催)開催 | 2 | J.M ジュラン博士逝去 | 2008 (平成20年) |
| | 6 | 第4回「企業の品質経営度調査」実施 | 4 | 信頼性通信教育講座開設 | 7 | 第86回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 7 | 第1回事務・販売・サービス部門全日本選抜大会(東京)開催(第5000回記念大会と同時開催) | 5 | 第2回World Summit of National Quality Association(アメリカ・ウッドランズ)開催 | 7 | 洞爺湖サミット開催 | |
| | 8 | 食品安全マネジメントシステム審査登録機関としてJAB認定取得 | 6 | 臨床試験セミナー医薬品開発基礎コース開講 | 5 | 第1回事務・販売・サービス部門全日本選抜大会(東京)開催(第5000回記念大会と同時開催) | 8 | 第38回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 5 | ICQCC'08(バングラディシュ・ダッカ)開催 | 8 | 北京オリンピック開幕 | |
| | 10 | 第7回「QCサークルの実態調査」の実施 | 7 | コストマネジメントセミナー開講 | 7 | 第1回事務・販売・サービス部門全日本選抜大会(東京)開催(第5000回記念大会と同時開催) | 9 | 第27回ソフトウェア品質シンポジウム開催 | 10 | | 9 | リーマンショック | |
| | | | 7 | 労働安全衛生マネジメントシステム内部監査員コース開講 | 6 | 第86回品質管理シンポジウム開催 | 10 | 第15回品質機能展開シンポジウム開催 | | | 12 | 日米が実質的ゼロ金利政策導入 | |
| | | | 8 | 統合マネジメントシステム内部監査員コース開講 | 8 | 第38回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | |
| | | | 9 | 失敗学と創造学セミナー開講 | 10 | 第27回ソフトウェア品質シンポジウム開催 | 11 | クオリティフォーラム2008開催 | | | | | |
| | | | 10 | 消費生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース開講 | 11 | 第15回品質機能展開シンポジウム開催 | 12 | 第87回品質管理シンポジウム開催 | | | | | |
| | | | 11 | 第50回記念QCサークル洋上大会開催 | 12 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | | | |
| | | | 12 | ソフトウェア品質技術者資格認定制度創設 | | | | | | | | | |
| 2009 (平成21年) | 1 | デミング賞普及・推進功労賞(海外)創設 | 1 | ISO9000:2008 要求事項の解説とマネジメントシステム移行対策コース開講 | 6 | 第88回品質管理シンポジウム開催 | 9 | 品質コストマネジメント研究部会発足 | 10 | ICQCC'09(フィリピン・セブ)開催 | 3 | 日経平均、バブル崩壊後最安値(7054.98円) | 2009 (平成21年) |
| | 6 | 蛇川忠輝氏第14代理事長に就任 | 4 | 臨床試験セミナー医薬品開発基礎コース開講 | 7 | 第39回信頼性・保全性シンポジウム開催 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2009開催 | | | 5 | 裁判員制度スタート | |
| | 6 | ASRP(先進的サーベイランス・更新審査)の立上げ | 1 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム要求事項解説コース開講 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2009開催 | 10 | 第1回知識構造化シンポジウム開催 | | | 9 | 民主党政権発足 | |
| | 6 | 第5回「企業の品質経営度調査」実施 | 6 | 実践問題解決セミナーマネージャーコース開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | 9 | 消費者庁発足 | |
| | 9 | 品質管理セミナー・ベーシックコース60周年 | 6 | Excel活用セミナー問題解決に役立つ手法コース開講 | 6 | Excel活用セミナー問題解決に役立つ手法コース開講 | 11 | クオリティフォーラム2009開催 | | | | | |
| | 10 | 事業継続マネジメントシステム審査登録の開始 | 7 | 新薬開発プロジェクトリーダー育成コース開講 | 7 | 第16回品質機能展開シンポジウム開催 | 11 | 第39回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | |
| | 11 | 企業の品質経営度調査 優秀企業賞創設 | 8 | 現場のムダ取り実践セミナー開講 | 8 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム内部監査員コース開講 | 12 | 第89回品質管理シンポジウム開催 | | | | | |
| | 11 | ISO審査員研修事業15周年 | 8 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム内部監査員コース開講 | 9 | 改善の見える化セミナー開講 | | | | | | | |
| | 11 | ソフトウェア品質保証部長の会設立 | 10 | 品質管理セミナー部課長コース(大阪)開講 | 10 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム構築実践コース開講 | | | | | | | |
| | | | 10 | ISO22000 食品安全マネジメントシステム構築実践コース開講 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| 2010 (平成22年) | 1 | デミング賞事業所表彰を「実施賞」に一本化 | 4 | ソフトウェア品質技術者初級セミナー開講 | 6 | 第90回品質管理シンポジウム開催 | | | 10 | ICQCC'10(インド・ハイデラバード)開催 | 1 | JALが会社更生法の適用を申請 | 2010 (平成22年) |
| | 3 | 臨床試験セミナー統計手法専門コース20周年 | 5 | はじめてのR-Map 半日コース開講 | 7 | 第40回信頼性・保全性シンポジウム開催 | | | | | 6 | 小惑星探査機「はやぶさ」帰還 | |
| | 6 | デミング賞創設60周年 | 5 | 基礎から学ぶソフトウェアアトリックスセミナー開講 | 8 | ソフトウェア品質シンポジウム2010開催 | | | | | 12 | 東北新幹線(八戸-新青森)開通 | |
| | 6 | 米倉昌弘氏第9代会長に就任 | 5 | テスト技法とテストケース演習:入門コース開講 | 10 | 第2回知識構造化シンポジウム開催 | | | | | 12 | 中国のGDPが日本を抜き世界第二位に | |
| | 6 | 第6回「企業の品質経営度調査」実施 | 6 | ソフトウェア品質保証技術実践セミナー開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | | | |
| | 8 | マネジメントシステム監査員検定制度の立上げ | 6 | ISO七つ道具実践活用セミナー:入門編開講 | 11 | クオリティフォーラム2010開催 | | | | | | | |
| | 9 | 「品質管理検定」が日本統計学会「第6回統計教育賞」を受賞 | 7 | 実践!ソフトウェア品質保証のためのメトリックス活用セミナー開講 | 11 | 第17回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | | | |
| | | | 7 | 実践!ソフトウェア品質保証のためのメトリックス活用セミナー開講 | 12 | 第40回記念全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | |
| | | | 8 | eラーニング「QCの基本と活用」開講 | | | | | | | | | |
| | | | 8 | 次世代内部監査実践活用セミナー開講 | | | | | | | | | |
| | | | 9 | ISMSリフレッシュコース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 10 | モダンソフトウェアテストアカデミー:プロフェッショナルコース開講 | | | | | | | | | |
| | | | 10 | ソフトウェア品質技術者資格認定制度 中級資格試験開始 | | | | | | | | | |
| | | 11 | 事業継続マネジメントシステム入門コース開講 | | | | | | | | | | |
| | | 11 | 設計・開発部門のためのヒューマンエラー防止セミナー開講 | | | | | | | | | | |
| | | 12 | 革新的課題解決セミナー開講 | | | | | | | | | | |
| | | 12 | マハラノビス・タグチ(MT)システム入門コース開講 | | | | | | | | | | |
| | | 12 | 現場力を高める「見える化」と「ムダ取り」の実践セミナー開講 | | | | | | | | | | |
| 2011 (平成23年) | 2 | マネジメントシステム監査員検定開始 | 1 | ISO9004徹底解説セミナー開講 | 6 | 第92回品質管理シンポジウム開催 | 5 | 実践!信頼性・品質技術研究会発足(信頼性開発技術研究会を改称) | 6 | ICQ'11(ハンガリー・ブダペスト/EOQCと併催)開催 | 3 | 東日本大震災 | 2011 (平成23年) |
| | 10 | ソフトウェア品質保証責任者の会設立 | 6 | 信頼性管理・信頼性設計入門コース開講 | 6 | 第4回事務・販売・サービス部門全日本選抜QCサークル大会開催 | 8 | SQuBOK® Guide中国語版発行 | 9 | ICQCC'11-Yokohama開催 | 3 | 九州新幹線(博多~新八代間)開業、全線開通 | |
| | | | 6 | なぜなぜ分析2日間実践セミナー開講 | 7 | 第41回信頼性・保全性シンポジウム開催 | | | 9 | WCSCQ(上海開催/日科技連主催担当)開催 | 7 | 地上デジタル放送への完全移行 | |
| | | | 7 | 信頼性試験・故障物理解入門コース開講 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2011開催 | | | 9 | 泰日経済技術振興協会(TPA)とのMOU締結 | 7 | なでしこジャパンワールドカップ優勝 | |
| | | | 7 | 環境マネジメントのための環境法令の動所と順法管理システムの構築セミナー開講 | 10 | 第3回知識構造化シンポジウム開催 | | | 10 | | 7 | 一時ドル=75.32円と最高値 | |
| | | | 10 | 2日でマスターするソフトウェアテスト開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | 10 | | |
| | | | | 11 | クオリティフォーラム2011開催 | | | | | | | | |
| | | | | 11 | 第18回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | | | | |
| | | | | 11 | 第41回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | | |
| | | | | 12 | 第93回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | | |

| 年 | 月 | 主な動き | 月 | 教育・出版 | 月 | 大会・シンポジウム | 月 | 研究委員会・研究会 | 月 | 国際交流 | 月 | 経営・経済・社会一般 | 年 | | |
|-----------------|-----------------|---|---|---|---|--------------------------------|--------------------------------|-----------|----|---|-------------------|--|-------------------------|------------------------|-----------------|
| 2012 (平成24年) | 1 | 「デミング賞実施賞」を「デミング賞」に、「日本品質管理賞」を「デミング大賞」に名称変更 | 4 | 『クオリティマネジメント』誌のWeb化 | 6 | 第94回品質管理シンポジウム開催 | | | 9 | ISOFD'12-Tokyo開催 | 2 | 復興庁発足 | 2012 (平成24年) | | |
| | 1 | QCサークル本部幹事長賞創設 | 4 | R-Map入門コース開講 | 6 | 第5回事務・販売・サービス部門全日本選抜QCサークル大会開催 | | | 10 | ICQCC'12(マレーシア・クアラルンプール)開催 | 5 | 東京スカイツリー開業 | | | |
| | 4 | 財団法人から一般財団法人へ移行 | 5 | ソフトウェア品質部門のためのXDDP入門コース開講 | 7 | 第42回信頼性・安全性シンポジウム開催 | | | 11 | 第3回World Summit of National Quality Association(インド・ニューデリー)開催 | 7 | ロンドンオリンピック開幕 | | | |
| | 4 | 坂根正弘氏第10代会長に就任 | 6 | 設計・開発における未然防止手法セミナー開講 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2012開催 | | | 11 | JUSE-TOMIデミング賞受賞企業によるベストプラクティスセミナー開催 | 9 | JALの再上場 | | | |
| | 5 | QCサークル誕生・QCサークル本部設置50周年 | 6 | ソフトウェアテスト技法ドリルセミナー開講 | 9 | 第4回知識構造化シンポジウム開催 | | | | | 10 | 山中伸弥氏、ノーベル医学・生理学賞受賞決定 | | | |
| | 7 | 第7回「企業の品質経営度調査」実施 | 6 | XDDPの導入、活用による開発プロセスの改善セミナー開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | 11 | 朝香鐵一博士逝去 ※スマートフォン普及本格化 | | | |
| | 8 | ISO27001とプライバシーマーク同時審査開始 | 7 | 実践!直交表、All-pair法を用いた組合せテストと状態遷移テスト修得セミナー開講 | 11 | クオリティフォーラム2012開催 | | | | | | | | | |
| | 12 | 道路交通安全マネジメントシステム審査登録の開始 | 7 | JSTQB認定ソフトウェアテスト技術者Foundation Levelトレーニングコース開講 | 11 | 第42回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | | | |
| | | | | 8 | 人間力・現場力を高めるフンポイント講座開講 | 12 | 第95回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | | |
| | | | | 10 | 道路交通安全マネジメントシステム入門コース開講 | | | | | | | | | | |
| | | | | 12 | 業務効率向上のための論理的伝達力マスターセミナー開講 | | | | | | | | | 経済財政白書：日本経済の復興から発展的創造へ | |
| | 2013 (平成25年) | 1 | 「QCサークル石川馨賞奨励賞」創設 | 1 | 設計・開発における品質ばらつき抑制手法セミナー開講 | 6 | 第6回事務・販売・サービス部門全日本選抜QCサークル大会開催 | | | 10 | ICQCC'13(台湾・台北)開催 | 1 | | 東京と大阪の証券取引所が統合 | 2013 (平成25年) |
| 1 | | QCサークル活動(小集団改善活動)優良企業・事業所表彰を創設 | 2 | 設計・開発における未然防止手法DR レビュー育成セミナー開講 | 6 | 第96回品質管理シンポジウム開催 | | | | | 4 | ネット選挙活動解禁 | | | |
| 7 | | 企業の品質経営度フォローアップ調査の実施 | 5 | データ指向のソフトウェア品質マネジメントセミナー(基礎編・技法編)開講 | 7 | 第43回信頼性・安全性シンポジウム開催 | | | | | 4 | 日銀が量的・質的金融緩和を導入 | | | |
| 8 | | 小大塚一郎氏第7代専務理事に就任 | 6 | 効果的な受け入れテストの設計と実践セミナー開講 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2013開催 | | | | | 6 | 富士山が世界遺産登録 | | | |
| 9 | | QC検定合格者25万人を突破 | 6 | 現場で効果をあげる「ソフトウェア品質会計」の適用方法(初級)開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | 6 | 富岡製糸場と絹産業遺産群が世界文化遺産登録 | | | |
| | | | 6 | 今日明日の実業務で使用する、ソフトウェア品質向上のためのなぜなぜ分析セミナー開講 | 11 | クオリティフォーラム2013開催 | | | | | 7 | 環太平洋パートナーシップ(TPP)交渉に日本が正式参加 | | | |
| | | | 7 | 人間力・現場力を高めるフンポイント講座開講 | 11 | 第19回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | 9 | 2020年オリンピックの東京開催が決定 | | | |
| | | | 9 | CFD++：論理の設計とテストの技法：開発技術者向け開講 | 11 | 第43回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | | | |
| | | | 10 | 「QCサークル洋上大学」を「QCサークルASEAN訪問・洋上研修」に改称 | 12 | 第97回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | 経済財政白書：経済の好循環の確立に向けて | | |
| | | | | 11 | 実践!エンジニアのためのチームビルディングセミナー開講 | | | | | | | | | | |
| 2014 (平成26年) | | 3 | 第8回「QCサークル活動(小集団改善活動)実態調査」の実施 | 3 | 実践!SaPIDによるソフトウェア開発のプロセス改善のための自律型改善セミナー開講 | 6 | 第98回品質管理シンポジウム開催 | | 9 | SQuBOK® Guide第2版発行 | 9 | 第4回World Summit of National Quality Association(日本・東京)開催 | 4 | 消費税増税実施(5%から8%) | |
| | 5 | 「TOM活動・品質マネジメント活動 ステージアップ・ガイド」制作 | 4 | eラーニング「QCの基本と活用」(英語版)開講 | 6 | 第7回事務・販売・サービス部門全日本選抜QCサークル大会開催 | | | 10 | ICQ'14-Tokyo開催 | 10 | 青色LEDを開発した日本人研究者がノーベル物理学賞受賞 | | | |
| | 6 | 佐々木眞一氏第15代理事長に就任 | 8 | ソフトウェア品質向上のためのなぜなぜ分析活用事例フォローアップセミナー開講 | 7 | 第44回信頼性・安全性シンポジウム開催 | | | 10 | ICQCC'14(スリランカ・コロンボ)開催 | 12 | 特定秘密の保護に関する法律施行 | | | |
| | 7 | R-Mapの登録商標取得 | 9 | R-Map実践研究会の10年の活動成果として「製品安全リスクアセスメントシリーズ」全4巻の発行 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2014開催 | | | | | | | | | |
| | 7 | 第8回「企業の品質経営度調査」実施 | 9 | | 9 | 第6回知識構造化シンポジウム開催 | | | | | | | | | |
| | 11 | 日科技連・本部事務所が西新宿に移転(小田急第一生命ビル) | 11 | | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | | | | | |
| | | | 11 | | 11 | クオリティフォーラム2014開催 | | | | | | | | | |
| | | | | | 11 | 第20回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | | | | | |
| | | | | | 11 | 第44回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | | | |
| | | | | | 12 | 第99回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 経済財政白書：よみがえる日本経済、広がる可能性 | | |
| 2015 (平成27年) | 2 | 日科技連ホームページリニューアル | 4 | eラーニング「はじめて学ぶ臨床試験のための生物統計学入門」開講 | 6 | 第100回記念品質管理シンポジウム開催 | | | 10 | ICQCC'15(韓国・チャンウォン)開催 | 1 | スカイマークが民事再生法の適用を申請 | 2015 (平成27年) | | |
| | 3 | 日科技連・大阪事務所が移転(新藤田ビル) | 5 | 技術力で差をつけるための実験計画実践セミナー開講 | 6 | 第8回事務・販売・サービス部門全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | 3 | 北陸新幹線(長野駅～金沢駅)開業 | | | |
| | 7 | 石川馨先生生誕100年記念 | 6 | 問題解決・QC手法指導のインストラクター養成講座開講 | 7 | 第45回信頼性・安全性シンポジウム開催 | | | | | 4 | ネパールで大地震 | | | |
| | | | 6 | 現場力強化のための人為ミス未然防止セミナー開講 | 9 | 石川馨先生生誕100年記念国際シンポジウム開催 | | | | | 5 | 箱根山で火山活動が活発化 | | | |
| | | | 7 | モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース開講 | 9 | ソフトウェア品質シンポジウム2015開催 | | | | | 10 | マイナンバー制度開始 | | | |
| | | | 8 | 新・商品企画七つ道具セミナー開講 | 9 | 第7回知識構造化シンポジウム開催 | | | | | 11 | フランス・パリ中心部で連続テロ事件発生 | | | |
| | | | 8 | 行為保証におけるプロセス管理セミナー開講 | 11 | 品質経営トップマネジメント大会開催 | | | | | 11 | 日本郵政グループ3社が上場 | | | |
| | | | 8 | 薬剤経済学セミナー開講 | 11 | クオリティフォーラム2015開催 | | | | | | | | | |
| | | | 9 | R-MapR活用コース：リスクアセスメント開講 | 11 | 第21回品質機能展開シンポジウム開催 | | | | | | | | | |
| | | | 9 | R-MapR活用コース：市場措置判断開講 | 11 | 第45回全日本選抜QCサークル大会開催 | | | | | | | | | |
| | | | 10 | 「未来の顧客価値」を起点にした新製品・サービス開発手法セミナー開講 | 12 | 第101回品質管理シンポジウム開催 | | | | | | | | | |
| | | 10 | リーダー・推進者のための心の好循環サイクルによる強いチームづくりセミナー開講 | | | | | | | | | | | | |
| | | 10 | 製造現場リーダーのためのなぜなぜ分析演習セミナー1日コース開講 | | | | | | | | | | | | |
| | | 10 | 医薬関連 特別臨時セミナー ICHの動向を踏まえた医薬品の開発と承認申請一開講 | | | | | | | | | | | | |
| | | 11 | 臨床データマネジメントセミナー アドバンスドコース開講 | | | | | | | | | | | | |
| 2016 (平成28年) | 5 | 日科技連創立70周年 | 1 | 創立70周年記念史『2006年～2015年の日科技連』刊行 | | | | | | | | | 2016 (平成28年) | | |

70

第4部

資料編



デミング賞, 日本品質奨励賞受賞一覧

*組織名, 個人の所属は受賞当時のものを掲示した。

*組織名, 個人の末尾の [] は海外受賞組織・受賞者の受賞当時の国・地域を掲示した。

■日本品質管理賞/デミング賞大賞

* 2012年から改称

- 2006 (株)ジーシーデンタルプロダクツ
- 2007 マヒンドラ アンド マヒンドラ(株) 農業機械事業部 [インド]
- 2011 ラネ・TRW ステアリングシステムズ(株)
ステアリングギア事業部 [インド]
- 2012 タタ・スチール(株) [インド], ラネ(マドラス)(株)
[インド], ルーカス TVS(株) [インド]
- 2013 (株)メイドー, ラネ・プレーキ・ライニング(株) [インド]
- 2015 ナショナル・エンジニアリング・インダストリーズ(株)
[インド]

■デミング賞実施賞・事業所表彰/デミング賞

* 2012年から改称

- 2006 (株)西澤電機計器製作所, サンデン・インターナショナル
(シンガポール)(株) [シンガポール], サンデン・インター
ナショナル(U.S.A)(株) [アメリカ]
- 2007 旭インディア硝子(株)自動車ガラス事業部 [インド], ラネ(マドラス)(株) [インド], リライアンス・インダストリーズ(株)
ハジラ事業所 (事業所表彰) [インド]
- 2008 タタ・スチール(株) [インド]
- 2009 新潟ダイヤモンド電子(株), ザ・サイアム・ホワイト・セメント(株) [タイ]
- 2010 (株)コロナ 製造本部, (株)メイドー, 而至歯科(蘇州)有限公司 [中国], ナショナル・エンジニアリング・インダストリーズ(株)
[インド]
- 2011 サンデン・ヴィカス(インドア)(株) [インド], CPAC ルーフタイル(株) [タイ], ユニマイクロン・テクノロジー・コーポレー
ション [台湾]
- 2012 SRF(株) 化学製品事業部 [インド], マヒンドラ アンド マヒンドラ(株) 農業機械事業部 スワラジ部門 [インド]
- 2013 (株)アドヴィックス, RSB トランスミッション(インド)(株)自動車事業部(ジャムシェドプール工場(ユニット1), プネ工場及
びバントナガール工場) [インド], SCG ロジスティクスマネジメント(株) [タイ], (株)MC システムズ, 小松山推工程機械有
限公司 [中国], サンデン(株)店舗システム事業, 名北工業(株)
- 2014 ジーシーアメリカ(株) [アメリカ], (株)セキソー, マヒンドラ アンド マヒンドラ(株)マヒンドラパワーロール事業部 [インド]
- 2015 (株)キャタラー, CPRAM(株)加工食品事業 [タイ], (株)GS ユアサ 産業電池電源事業部 産業電池生産本部

■日本品質奨励賞

TQM 奨励賞

- 2006 アストム(株), キーバー(株) 三隅工場 第三製造課, (株)コロナ
製造本部
- 2007 アンリツテクマック(株), ナブテスコ(株) 西神工場 製造部
バルブ製造グループ, (株)雪国まいたけ 生産本部 研究開発
室 品質保証室 TQM 推進本部
- 2008 (株)ジーエス・ユアサ パワーサプライ産業電池電源事業本
部 電源システム生産本部, (株)永島製作所, ナブテスコ(株)
ナブコカンパニー 福祉事業推進部
- 2009 関東エラストマー(株)
- 2010 長津工業(株) 小松西工場
- 2011 (株)GS ユアサ 産業電池電源事業部 産業電池生産本部,
(株)羽生田製作所
- 2012 阿波スピンドル(株) 本社・本社工場, 小川工業(株) 本社工場,
サンワ アルテック(株)
- 2013 (株)新井コロナ, (株)名光精機
- 2014 オージー技研(株)
- 2015 (株)マルヤスエンジニアリング

■デミング賞本賞

- 2006 飯塚悦功氏 (東京大学大学院 教授)
- 2007 牛久保雅美氏 (サンデン(株) 代表取締役会長)
- 2008 坂根正弘氏 ((株)小松製作所 代表取締役会長)
- 2009 長田 洋氏 (東京工業大学大学院 教授)
- 2010 圓川隆夫氏 (東京工業大学大学院 教授)
- 2011 桜井正光氏 ((株)リコー 取締役会長執行役員)
- 2012 中尾 眞氏 ((株)ジーシー 代表取締役社長)
- 2013 岩崎日出男氏 (近畿大学名誉教授)
- 2014 鈴木和幸氏 (電気通信大学大学院教授)
- 2015 蛇川忠暉氏 (トヨタ自動車(株) 顧問,
日野自動車(株) 特任顧問)

■デミング賞普及・推進功労賞(海外)

- 2009 グレゴリー H・ワトソン [フィンランド]
- 2012 ジャナック・メタ [インド]
- 2014 カン・トラクルフーン [タイ]

品質革新賞

- 2007 (株)コロナ 製造本部, (株)CIJ ワイドビジネス事業部
SI ビジネス事業部, (株)シービーエム, 日産車体(株)
- 2008 (株)テレマーケティングジャパン 変革推進本部 TCS
推進室, 長津工業(株) 小松西工場
- 2009 高畑精工(株) 東京工場, (株)デンソー パワトレイン
グループ 機能品事業部, パナソニック(株) ホーム
アプライアンス社 クリーナービジネスユニット
- 2010 アイシン精機(株) 生産部門, トヨタ自動車(株)
- 2011 アイシン・エイ・ダブリュ(株) 生産技術本部,
ツカサ電工(株)
- 2012 小松共栄工業協同組合, サンデン(株) 開発部門 (開
発本部, エレクトリック Engセンター)
- 2013 サンデン(株) 環境推進本部, サンデン(株) 生産管理・
IT 本部, 経理本部, 橋本総業(株)

主要事業参加者数の推移

| | 役員のための品質経営セミナー | | | 品質管理セミナー部課長コース | | | 品質管理セミナーベーシックコース | | |
|------|----------------|------|--------|---|------|--------|------------------|------|--------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 1 | 25 | 10,614 | 6 | 208 | 37,879 | 3 | 202 | 32,223 |
| 2006 | 1 | 24 | 10,638 | 6 | 128 | 38,007 | 3 | 198 | 32,421 |
| 2007 | 2 | 52 | 10,690 | 6 | 160 | 38,167 | 3 | 210 | 32,631 |
| 2008 | 2 | 29 | 10,719 | 6 | 111 | 38,278 | 3 | 180 | 32,811 |
| 2009 | 2 | 26 | 10,745 | 5 | 96 | 38,374 | 3 | 126 | 32,937 |
| 2010 | 2 | 25 | 10,770 | 5 | 106 | 38,480 | 3 | 145 | 33,082 |
| 2011 | 2 | 42 | 10,812 | 4 | 88 | 38,568 | 3 | 154 | 33,236 |
| 2012 | 2 | 37 | 10,849 | 4 | 98 | 38,666 | 3 | 153 | 33,389 |
| 2013 | 2 | 44 | 10,893 | 4 | 92 | 38,758 | 3 | 164 | 33,553 |
| 2014 | 2 | 51 | 10,944 | 4 | 95 | 38,853 | 3 | 172 | 33,725 |
| 備考 | | | | 2009年から「実践問題解決セミナー マネージャーコース」(東京)、「品質管理セミナー部課長コース」(大阪)として開催 | | | | | |

| | 品質管理セミナー入門コース | | | QC手法基礎コース | | | QCサークル推進者 | | |
|------|---------------|------|--------|-----------|------|-------|-----------|------|--------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 6 | 318 | 35,427 | | | | 5 | 145 | 28,774 |
| 2006 | 6 | 342 | 35,769 | 10 | 483 | 483 | 5 | 143 | 28,917 |
| 2007 | 6 | 409 | 36,178 | 12 | 611 | 1,094 | 5 | 153 | 29,070 |
| 2008 | 7 | 378 | 36,556 | 15 | 778 | 1,872 | 5 | 154 | 29,224 |
| 2009 | 5 | 189 | 36,745 | 16 | 445 | 2,317 | 5 | 113 | 29,337 |
| 2010 | 6 | 231 | 36,976 | 15 | 396 | 2,713 | 6 | 129 | 29,466 |
| 2011 | 6 | 253 | 37,229 | 13 | 352 | 3,065 | 5 | 133 | 29,599 |
| 2012 | 6 | 206 | 37,435 | 12 | 465 | 3,530 | 5 | 149 | 29,748 |
| 2013 | 6 | 210 | 37,645 | 12 | 401 | 3,931 | 5 | 142 | 29,890 |
| 2014 | 6 | 197 | 37,842 | 14 | 378 | 4,309 | 5 | 148 | 30,038 |

| | QCサークルリーダー | | | 品質管理通信教育講座 | | | N7入門コース | | |
|------|------------|------|--------|------------|-------|---------|-----------------------------|------|--------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 14 | 689 | 75,981 | 2 | 2,026 | 153,482 | 7 | 262 | 23,575 |
| 2006 | 15 | 599 | 76,580 | 2 | 2,022 | 155,504 | 7 | 208 | 23,783 |
| 2007 | 15 | 627 | 77,207 | 2 | 2,297 | 157,801 | 7 | 202 | 23,985 |
| 2008 | 15 | 562 | 77,769 | 2 | 2,129 | 159,930 | 7 | 188 | 24,173 |
| 2009 | 15 | 296 | 78,065 | 2 | 1,565 | 161,495 | 7 | 74 | 24,247 |
| 2010 | 14 | 294 | 78,359 | 2 | 1,673 | 163,168 | 5 | 84 | 24,331 |
| 2011 | 11 | 350 | 78,709 | 2 | 1,600 | 164,768 | 5 | 77 | 24,408 |
| 2012 | 11 | 376 | 79,085 | 2 | 1,453 | 166,221 | 3 | 92 | 24,500 |
| 2013 | 11 | 355 | 79,440 | 2 | 1,263 | 167,484 | 3 | 79 | 24,579 |
| 2014 | 12 | 338 | 79,778 | 2 | 1,247 | 168,731 | 3 | 58 | 24,637 |
| 備考 | | | | | | | 2011年から「新QC七つ道具セミナー」として継続開催 | | |

| | 実験計画法セミナー実践コース | | | 実験計画法セミナー入門コース | | | 多変量解析法セミナー入門コース | | |
|------|--|------|--------|---|------|--------|-----------------|------|-------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 2 | 32 | 23,345 | 4 | 201 | 17,773 | 2 | 121 | 5,004 |
| 2006 | 1 | 20 | 23,365 | 4 | 211 | 17,984 | 2 | 124 | 5,128 |
| 2007 | 1 | 12 | 23,377 | 4 | 210 | 18,194 | 3 | 130 | 5,258 |
| 2008 | 1 | 11 | 23,388 | 4 | 226 | 18,420 | 3 | 129 | 5,387 |
| 2009 | 1 | 9 | 23,397 | 4 | 98 | 18,518 | 3 | 64 | 5,451 |
| 2010 | 1 | 8 | 23,405 | 3 | 107 | 18,625 | 2 | 61 | 5,512 |
| 2011 | 1 | 12 | 23,417 | 3 | 135 | 18,760 | 2 | 74 | 5,586 |
| 2012 | 1 | 26 | 23,443 | 3 | 97 | 18,857 | 2 | 68 | 5,654 |
| 2013 | 1 | 23 | 23,466 | 3 | 87 | 18,944 | 2 | 81 | 5,735 |
| 2014 | 1 | 18 | 23,484 | 3 | 110 | 19,054 | 2 | 61 | 5,796 |
| 備考 | 2015年より「技術力で差をつけるための実験計画法実践セミナー」エキスパートコースとして継続開催 | | | 2015年より「技術力で差をつけるための実験計画法実践セミナー」エントリーコースとスタンダードコースに分かれて継続開催 | | | | | |

| | 臨床試験セミナー統計手法専門コース | | | 臨床試験セミナー統計手法コース | | | 実践!ソフトウェア品質向上のための技術者セミナー | | |
|------|-------------------|------|-------|-----------------|------|-------|--------------------------|------|-------|
| | 回数 | 参加人数 | 累積人数 | 回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 16 | 52 | 888 | 37 | 65 | 3,365 | 1 | 36 | 3,956 |
| 2006 | 17 | 55 | 943 | 38 | 70 | 3,435 | 1 | 28 | 3,984 |
| 2007 | 18 | 56 | 999 | 39 | 64 | 3,499 | 2 | 50 | 4,034 |
| 2008 | 19 | 52 | 1,051 | 40 | 68 | 3,567 | 2 | 46 | 4,080 |
| 2009 | 20 | 57 | 1,108 | 41 | 56 | 3,623 | 2 | 35 | 4,115 |
| 2010 | 21 | 45 | 1,153 | 42 | 40 | 3,663 | 1 | 14 | 4,129 |
| 2011 | 22 | 45 | 1,198 | 43 | 35 | 3,698 | 1 | 17 | 4,146 |
| 2012 | 23 | 44 | 1,242 | 44 | 48 | 3,746 | 1 | 22 | 4,168 |
| 2013 | 24 | 38 | 1,280 | 45 | 59 | 3,805 | 1 | 7 | 4,175 |
| 2014 | 25 | 55 | 1,335 | 46 | 49 | 3,854 | 1 | 8 | 4,183 |

| | 実践!管理者のためのソフトウェア品質マネジメントセミナー | | | 洋上研修 | | | 信頼性セミナー基礎コース | | |
|------|------------------------------|------|-------|----------------------------------|------|--------|--------------|------|--------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 1 | 32 | 1,622 | 47 | 100 | 16,401 | 4 | 177 | 13,624 |
| 2006 | 1 | 37 | 1,659 | 48 | 117 | 16,518 | 4 | 165 | 13,789 |
| 2007 | 1 | 26 | 1,685 | 49 | 181 | 16,699 | 4 | 138 | 13,927 |
| 2008 | 1 | 22 | 1,707 | 50 | 160 | 16,859 | 4 | 170 | 14,097 |
| 2009 | 1 | 19 | 1,726 | 51 | 97 | 16,956 | 3 | 71 | 14,168 |
| 2010 | 1 | 16 | 1,742 | 52 | 105 | 17,061 | 3 | 100 | 14,268 |
| 2011 | 1 | 18 | 1,760 | 53 | 102 | 17,163 | 3 | 91 | 14,359 |
| 2012 | 1 | 18 | 1,778 | 54 | 98 | 17,261 | 3 | 93 | 14,452 |
| 2013 | 1 | 10 | 1,788 | 55 | 102 | 17,363 | 3 | 114 | 14,566 |
| 2014 | 1 | 15 | 1,803 | 56 | 97 | 17,460 | 3 | 118 | 14,684 |
| 備考 | | | | 2013年より「QCサークルASEAN訪問・洋上研修」として改称 | | | | | |

| | FMEA・FTA | | | デザインレビュー | | | 品質管理シンポジウム | | |
|------|----------|-------|--------|----------|------|--------|--------------|------|--------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 12 | 945 | 29,456 | 7 | 320 | 18,963 | 80,81 | 308 | 8,250 |
| 2006 | 12 | 1,026 | 30,482 | 7 | 332 | 19,295 | 82,83 | 327 | 8,577 |
| 2007 | 15 | 1,033 | 31,515 | 8 | 301 | 19,596 | 84,85 | 300 | 8,877 |
| 2008 | 15 | 981 | 32,496 | 8 | 305 | 19,901 | 86,87 | 313 | 9,190 |
| 2009 | 16 | 373 | 32,869 | 7 | 107 | 20,008 | 88,89 | 283 | 9,473 |
| 2010 | 10 | 436 | 33,305 | 6 | 148 | 20,156 | 90,91 | 293 | 9,766 |
| 2011 | 9 | 437 | 33,742 | 5 | 172 | 20,328 | 92,93 | 265 | 10,031 |
| 2012 | 9 | 409 | 34,151 | 5 | 141 | 20,469 | 94,95 | 283 | 10,314 |
| 2013 | 9 | 403 | 34,554 | 4 | 105 | 20,574 | 96,97 | 296 | 10,610 |
| 2014 | 9 | 519 | 35,073 | 4 | 124 | 20,698 | 98,99 | 312 | 10,922 |
| 2015 | | | | | | | 100,101 | 448 | 11,370 |
| 備考 | | | | | | | 参加人数は招待者数を含む | | |

| | トップマネジメント大会 | | | クオリティフォーラム | | | 全日本選抜QCサークル大会 | | |
|------|-------------|------|--------|--------------|------|--------|---------------|-------|--------|
| | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 実施回数 | 参加人数 | 累積人数 | 回数 | 参加人数 | 累積人数 |
| 2005 | 1 | 145 | 11,023 | 1 | 301 | 60,833 | 35 | 1,113 | 52,183 |
| 2006 | 1 | 249 | 11,272 | 1 | 325 | 61,158 | 36 | 1,148 | 53,331 |
| 2007 | 1 | 341 | 11,613 | 1 | 325 | 61,483 | 37 | 1,415 | 54,746 |
| 2008 | 1 | 281 | 11,894 | 1 | 313 | 61,796 | 38 | 1,338 | 56,084 |
| 2009 | 1 | 263 | 12,157 | 1 | 270 | 62,066 | 39 | 1,007 | 57,091 |
| 2010 | 1 | 380 | 12,537 | 1 | 327 | 62,393 | 40 | 1,113 | 58,204 |
| 2011 | 1 | 250 | 12,787 | 1 | 322 | 62,715 | 41 | 1,070 | 59,274 |
| 2012 | 1 | 300 | 13,087 | 1 | 365 | 63,080 | 42 | 981 | 60,255 |
| 2013 | 1 | 210 | 13,297 | 1 | 365 | 63,445 | 43 | 952 | 61,207 |
| 2014 | 1 | 257 | 13,554 | 1 | 259 | 63,704 | 44 | 810 | 62,017 |
| 2015 | 1 | 171 | 13,725 | 1 | 335 | 64,039 | 45 | 779 | 62,796 |
| 備考 | 2010年より単独開催 | | | 参加人数は招待者数を含む | | | 参加人数は招待者数を含む | | |

| | JHS 部門全日本選抜QCサークル大会 | | | 信頼性・保安全性シンポジウム | | | ソフトウェア品質シンポジウム | | | |
|------|-----------------------------------|------|-------|----------------|--------|--------|----------------|--------|--------|--------|
| | 回数 | 参加人数 | 累積人数 | 回数 | 参加人数 | 累積人数 | 回数 | 参加人数 | 累積人数 | |
| 2005 | | | | 35 | 285 | 14,064 | 24 | 306 | 8,505 | |
| 2006 | | | | 36 | 266 | 14,330 | 25 | 362 | 8,867 | |
| 2007 | | | | 37 | 311 | 14,641 | 26 | 375 | 9,242 | |
| 2008 | 1 | | 39 | 284 | 14,925 | 27 | 384 | 9,626 | | |
| 2009 | 2 | | 38 | 244 | 15,169 | 28 | 317 | 9,943 | | |
| 2010 | 3 | | 40 | 227 | 15,396 | 29 | 342 | 10,285 | | |
| 2011 | 4 | | 396 | 396 | 41 | 275 | 15,671 | 30 | 344 | 10,629 |
| 2012 | 5 | | 498 | 894 | 42 | 295 | 15,966 | 31 | 440 | 11,069 |
| 2013 | 6 | 477 | 1,371 | 43 | 305 | 16,271 | 32 | 470 | 11,539 | |
| 2014 | 7 | 358 | 1,729 | 44 | 340 | 16,611 | 33 | 498 | 12,037 | |
| 2015 | 8 | 414 | 2,143 | 45 | 296 | 16,907 | 34 | 556 | 12,593 | |
| 備考 | 参加人数は招待者数を含む 第1回～第3回は全国大会と併設開催 | | | 参加人数は招待者数を含む | | | 参加人数は本会議の有料参加数 | | | |

一般財団法人 日本科学技術連盟 定款

第1章 総 則

[名 称]

第1条 この法人は、一般財団法人日本科学技術連盟（英文名 Union of Japanese Scientists and Engineers. 略称「JUSE」）と称する。

[事 務 所]

第2条 この法人は、主たる事務所を東京都渋谷区に置く。
2 この法人は、理事会の決議によって、従たる事務所を必要な地に置くことができる。これを変更又は廃止する場合も同様とする。

第2章 目的及び事業

[目 的]

第3条 この法人は、科学技術ならびに経営管理技術の振興に必要な諸事業を総合的に推進し、人材の育成を図り、もって産業と学術・文化の発展に寄与することを目的とする。

[事 業]

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 科学技術・経営管理技術に関する調査及び研究開発
- (2) 科学技術・経営管理技術に関する教育及び訓練
- (3) 科学技術・経営管理技術に関する奨励・表彰
- (4) 科学技術・経営管理技術に関する資格・検定
- (5) 科学技術・経営管理技術に関する広報・普及及び出版
- (6) 科学技術・経営管理技術に関する国内外の情報の交流及び国際協力
- (7) 科学技術・経営管理技術に関する技術相談及び技術指導
- (8) 科学技術関係団体及び科学技術者に対する援助と連携の促進
- (9) 組織のマネジメントシステムに関する認証
- (10) その他この法人の目的を達成するために必要な事業

2 前項各号の事業は、本邦及び海外において行うものとする。

第3章 財産及び会計

[財産の種類]

第5条 この法人の財産は、基本財産及び運用財産の2種類とする。
2 基本財産は、この法人の目的である事業を行うために不可欠な財産として、理事会で定

めたものとする。

- 3 基本財産は、この法人の目的を達成するために善良な管理者の注意をもって管理しなければならない。
- 4 基本財産の一部を処分しようとするとき及び基本財産から除外しようとするときは、評議員会において、特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる多数の承認を受けなければならない。
- 5 運用財産は、基本財産以外の財産とする。

[財産の管理・運用]

第6条 この法人の財産は、理事長が管理し、その管理の方法は、理事会の決議によって定める。ただし、その用途又は管理の方法を指定して寄附された財産については、その指定に従わなければならない。

[事業年度]

第7条 この法人の事業年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。

[事業計画及び収支予算]

- 第8条 この法人の事業計画書、収支予算書については、毎事業年度開始の日の前日までに、理事長が作成し、理事会の承認を受けなければならない。これを変更する場合も、同様とする。
- 2 前項の書類については、主たる事務所に、当該事業年度が終了するまでの間備え置き、一般の閲覧に供するものとする。
 - 3 第1項の書類は、電磁的記録をもって作成することができる。

[事業報告及び決算]

- 第9条 この法人の事業報告及び決算については、毎事業年度終了後、理事長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会で決定しなければならない。
- (1) 事業報告
 - (2) 事業報告の附属明細書
 - (3) 公益目的支出計画実施報告書（一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第127条に定める書類）
 - (4) 貸借対照表
 - (5) 損益計算書（正味財産増減計算書）
 - (6) 貸借対照表及び損益計算書（正味財産増減計算書）の附属明細書
 - (7) 財産目録
- 2 前項の書類は、電磁的記録をもって作成することができる。
- 3 第1項の決定を受けた書類のうち、第1号、第3号、第4号、第5号及び第7号については、定時評議員会に提出し、第1号の書類についてはその内容を報告し、その他の書類については、承認を受けなければならない。
 - 4 第1項の書類については、毎事業年度の終了後3ヵ月以内に行政庁に提出しなければならない。
 - 5 第1項第4号の貸借対照表は、法令で定めるところにより、定時評議員会の終結後遅滞なく、公告しなければならない。

- 6 第1項各号の書類及び監査報告を定時評議員会の日々の2週間前から主たる事務所に5年間備え置き、一般の閲覧に供するとともに、この定款を主たる事務所に備え置き、同様の閲覧に供するものとする。

第4章 評議員及び評議員会

第1節 評議員

[評議員]

第10条 この法人に評議員6名以上12名以内を置く。

[評議員の選任及び解任]

第11条 評議員の選任及び解任は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律第179条から第195条の規定に従い、評議員会において行う。

2 評議員を選任する場合には、次の各号の要件をいずれも満たさなければならない。

- (1) 各評議員について、次のイからへに該当する評議員の合計数が評議員の総数の3分の1を超えないものであること。

- イ 当該評議員及びその配偶者又は3親等内の親族
- ロ 当該評議員と婚姻の届出をしていないが事実上婚姻関係と同様の事情にある者
- ハ 当該評議員の使用人
- ニ ロ又はハに掲げる者以外の者であって、当該評議員から受ける金銭その他の財産によって生計を維持している者
- ホ ハ又はニに掲げる者の配偶者
- へ ロからニまでに掲げる者の3親等内の親族であって、これらの者と生計を一にする者

- (2) 他の同一の団体（公益法人を除く。）の次のイからニに該当する評議員の合計数が評議員の総数の3分の1を超えないものであること。

- イ 理事
- ロ 使用人
- ハ 当該他の同一の団体の理事以外の役員（法人でない団体で代表者又は管理人の定めのある者にあつては、その代表者又は管理人）又は業務を執行する社員である者
- ニ 次に掲げる団体においてその職員（国会議員又は地方公共団体の議会の議員を除く）である者

- ① 国の機関
- ② 地方公共団体
- ③ 独立行政法人通則法第2条第1項に規定する独立行政法人
- ④ 国立大学法人法第2条第1項に規定する国立大学法人又は同条第3項に規定する大学共同利用機関法人
- ⑤ 地方独立行政法人法第2条第1項に規定する地方独立行政法人
- ⑥ 特殊法人（特別の法律により特別に設立行為をもって設立された法人であつて、総務省設置法第4条第15号の規定の適用を受けるものをいう）又は認可法人（特別

- の法律により設立され、かつ、その設立に関し行政官庁の認可を要する法人をいう)
- 3 評議員を解任する場合は、次の各号のいずれかに該当するときとする。
 - (1) 職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき。
 - (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき。

[評議員の任期]

- 第12条 評議員の任期は、選任後4年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。
- 2 任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、退任した評議員の任期の満了する時までとする。
 - 3 評議員は、第10条に定める定数に足りなくなるときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、新たに選任された者が就任するまで、なお評議員としての権利義務を有する。

[評議員に対する報酬等]

- 第13条 評議員は無報酬とする。
- 2 評議員には、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。
 - 3 前項に関し必要な事項は、評議員会の決議により別に定める役員及び評議員の報酬等並びに費用に関する規程による。

第2節 評議員会

[評議員会の設置及び構成]

- 第14条 この法人に評議員会を置く。
- 2 評議員会は、すべての評議員をもって構成する。

[評議員会の権限]

- 第15条 評議員会は、次の事項について決議する。
- (1) 理事及び監事の選任及び解任
 - (2) 理事及び監事の報酬等の支給の基準
 - (3) 評議員の選任及び解任
 - (4) 評議員に対する報酬等の支給の基準
 - (5) 貸借対照表、損益計算書（正味財産増減計算書）及び財産目録の承認
 - (6) 定款の変更
 - (7) 基本財産の処分又は除外の承認
 - (8) 残余財産の処分
 - (9) 合併、事業の全部若しくは一部の譲渡
 - (10) その他評議員会で決議するものとして法令又はこの定款で定められた事項

[評議員会の種類及び開催]

- 第16条 評議員会は、定時評議員会及び臨時評議員会の2種類とする。
- 2 定時評議員会は、毎事業年度終了後3ヵ月以内に1回開催する。
 - 3 臨時評議員会は、必要がある場合は、いつでも招集することができる。

[評議員会の招集]

- 第17条 評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき理事長が招集する。
- 2 評議員は理事長に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。
 - 3 前項の規定による請求があったときは、理事長は遅滞なく、評議員会の招集の手続きを行わなければならない。

[評議員会の招集の通知]

- 第18条 理事長は、評議員会の開催日の5日前までに、評議員に対して、評議員会の日時及び場所並びに評議員会の目的である事項を記載した書面又は電磁的方法をもって招集の通知を発しなければならない。
- 2 前項の規定にかかわらず、評議員全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく、評議員会を開催することができる。

[評議員会の議長]

- 第19条 評議員会の議長は、評議員会において、出席した評議員の互選により選出する。

[評議員会の決議]

- 第20条 評議員会の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。
- 2 前項の規定にかかわらず、次の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる多数をもって行わなければならない。
 - (1) 監事の解任
 - (2) 定款の変更
 - (3) 基本財産の処分又は除外の承認
 - (4) 合併、事業の全部若しくは一部の譲渡
 - (5) その他法令で定められた事項
 - 3 理事又は監事を選任する議案を決議するに際しては、候補者ごとに第1項の決議を行わなければならない。理事又は監事の候補者の合計数が第24条に定める定数を上回る場合には、過半数の賛成を得た候補者の中から得票数の多い順に定数の枠に達するまでの者を選任することとする。

[評議員会の決議の省略]

- 第21条 理事が評議員会の目的である事項について提案した場合において、その提案について、議決に加わることのできる評議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の評議員会の議決があったものとみなす。
- 2 前項の規定により評議員会の決議があったものとみなされた日から10年間、同項の書面又は電磁的記録をその主たる事務所に備え置かなければならない。

[評議員会の報告の省略]

- 第22条 理事が評議員の全員に対して評議員会に報告すべき事項を通知した場合において、その事項を評議員会に報告することは要しないことについて、評議員の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その事項の評議員会への報告があったものとみなす。

[評議員会の議事録]

第23条 評議員会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。

- 2 前項の議事録には、議長及び出席した評議員のうちから評議員会において選任された議事録署名人2名が前項の議事録に署名若しくは記名押印する。

第5章 役員等及び理事会

第1節 役員等

[役員を設置]

第24条 この法人に、次の役員を置く。

- (1) 理事6名以上12名以内
- (2) 監事2名以内
- 2 理事のうち1名を理事長、1名を専務理事とする。
- 3 理事のうち2名以内を常務理事とすることができる。
- 4 第2項の理事長及び専務理事をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の代表理事とし、第3項の常務理事をもって同法第91条第1項第2号の業務執行理事とする。

[役員を選任]

第25条 理事及び監事は、評議員会の決議によって選任する。

- 2 理事長及び専務理事は、理事会の決議によって理事の中から選定する。
- 3 常務理事は、理事会の決議によって理事の中から選定することができる。
- 4 理事のうち、理事のいずれか1名とその配偶者又は3親等内の親族その他法令で定める特別の関係にある者の合計数は、理事の総数の3分の1を越えてはならない。監事についても、同様とする。
- 5 他の同一の団体の理事又は使用人である者その他これに準ずる相互の密接な関係にあるものとして法令で定める者である理事の合計数は、理事の総数の3分の1を越えてはならない。監事についても、同様とする。
- 6 理事及び監事は、相互に兼ねることができない。

[理事の職務及び権限]

第26条 理事は、理事会を構成し、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人の業務の執行の決定に参画する。

- 2 理事長は、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人を代表し、その業務を執行する。
- 3 専務理事は、理事長を補佐し、理事長に事故があるとき又は理事長が欠けたときは、その職務を代行して、法令及びこの定款で定めるところにより、この法人を代表し、その業務を執行する。
- 4 常務理事は、専務理事を補佐し、この法人の業務を分担執行する。
- 5 理事長及び専務理事並びに常務理事は、毎事業年度に4ヵ月を超える間隔で2回以上、

自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

[監事の職務及び権限]

第27条 監事は、理事の職務の執行を監査し、法令で定めるところにより、監査報告を作成する。

- 2 監事は、いつでも、理事及び使用人に対して事業の報告を求め、この法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。
- 3 監事は、その他監事に認められた法令上の権限を行使する。

[役員任期]

第28条 理事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。

- 2 監事の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとし、再任を妨げない。
- 3 補欠又は増員として選任された役員任期は、前任者の任期の満了する時までとする。ただし、監事については増員を適用しない。
- 4 理事又は監事は、第24条に定める定数に足りなくなるときは、辞任又は任期満了後においても、新たに選任された者が就任するまで、なお理事又は監事としての権利義務を有する。

[役員解任]

第29条 理事又は監事が、次のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。ただし、監事を解任する場合は、特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる多数の決議に基づいて行わなければならない。

- (1) 職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき。
- (2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき。

[役員に対する報酬等]

第30条 役員は、無報酬とする。ただし、常勤の役員に対しては、評議員会の決議により別に定める役員及び評議員の報酬等並びに費用に関する規程に従って報酬を支給することができる。

- 2 役員には、その職務を行うために要する費用の支払いをすることができる。

[会長]

第31条 この法人に、会長1名を置くことができる。

- 2 理事長は、理事会の承認決議を経て、理事の中から、会長を委嘱する。
- 3 会長は、理事長及び専務理事の諮問に応じる。
- 4 会長の任期は、選任後2年以内に終了する事業年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。

第2節 理事会

[理事会の設置及び構成]

第32条 この法人に理事会を置く。

2 理事会は、すべての理事をもって構成する。

[理事会の権限]

第33条 理事会は、この定款に別に定めるもののほか、次の職務を行う。

- (1) この法人の業務執行の決定
 - (2) 理事の職務の執行の監督
 - (3) 代表理事及び業務執行理事の選定及び解職
 - (4) 評議員会の日時及び場所並びに議事に付すべき事項の決定
 - (5) 規則の制定、変更及び廃止に関する事項
- 2 理事会は、次に掲げる事項その他の重要な業務執行の決定を理事に委任することができない。
- (1) 重要な財産の処分及び譲受け
 - (2) 多額の借財
 - (3) 重要な使用人の選任及び解任
 - (4) 従たる事務所その他の重要な組織の設置、変更及び廃止
 - (5) 理事の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制その他この法人の業務の適正を確保するために必要なものとして法令で定める体制の整備

[理事会の種類及び開催]

第34条 理事会は、通常理事会及び臨時理事会の2種類とする。

2 通常理事会は、毎年定期に、年2回開催する。

3 臨時理事会は、次の各号の一に該当する場合に開催する。

- (1) 理事長が必要と認めたとき。
- (2) 理事長以外の理事から理事長に対し、理事会の目的である事項を記載した書面をもって招集の請求があったとき。
- (3) 前号の請求があった日から5日以内に、その請求があった日から2週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知が発せられない場合に、その請求をした理事が招集したとき。
- (4) 監事が必要と認めて理事長に対し、招集の請求があったとき。
- (5) 前号の請求があった日から5日以内に、その請求のあった日から2週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知が発せられない場合に、その請求をした監事が招集したとき。

[理事会の招集]

第35条 理事会は、法令及びこの定款に別段の定めのある場合を除き、理事長が招集する。

- 2 理事長は、前条第3項第2号又は第4号に該当する場合は、その請求があった日から5日以内に、その請求があった日から2週間以内の日を理事会の日とする臨時理事会を招集しなければならない。
- 3 理事長が欠けたとき又は理事長に事故があるときは、その他の代表理事又は業務執行理事が、理事会を招集する。
- 4 理事会を招集するときは、会議の日時、場所、目的である事項を記載した書面をもって、開催日の5日前までに、各役員に対して通知しなければならない。
- 5 前項の規定にかかわらず、役員全員の前項の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく理事会を開催することができる。

[理事会の議長]

第36条 理事会の議長は、理事長がこれに当たる。

- 2 第34条第3項第3号又は第5号の規定により臨時理事会を開催したときは、出席した理事の互選により議長を定める。

[理事会の決議]

第37条 理事会の決議は、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

[理事会の決議の省略]

第38条 理事が、理事会の決議の目的である事項について提案をした場合において、その提案について、議決に加わることのできる理事の全員が書面又は電磁的記録により同意の意思表示をしたときは、その提案を可決する旨の理事会の議決があったものとみなすものとする。ただし、監事が異議を述べたときは、その限りではない。

- 2 理事会の決議を省略したときは、決議があったものとみなされた事項の内容、当該事項を提案した理事の氏名、決議があったものとみなされた日及び議事録の作成に係る職務を行った理事の氏名を議事録に記載又は記録しなければならない。

[理事会の報告の省略]

第39条 理事又は監事が、理事及び監事の全員に対し、理事会に報告すべき事項を通知した場合においては、その事項を理事会に報告することを要しない。

- 2 前項の規定は、第26条第5項の規定による報告には適用しない。

[理事会の議事録]

第40条 理事会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成する。

- 2 出席した理事長及び専務理事並びに監事は、前項の議事録に記名押印する。

第6章 賛助会員

[賛助会員]

第41条 この法人の目的に賛同し、後援する個人又は団体を賛助会員とすることができる。

- 2 会員に関する必要な事項は、理事会の決議により、別に定める賛助会員規則による。

第7章 定款の変更、合併、事業の譲渡、解散、精算

[定款の変更]

第42条 この定款は、評議員会において、特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる決議によって変更することができる。

- 2 前項の規定は、この定款の第3条及び第4条及び第11条についても適用する。

[合併等]

第43条 この法人は、評議員会において、特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の3分の2以上に当たる議決により、他の一般社団及び一般財団法人に関する法律上の法人との合併、事業の全部又は一部の譲渡をすることができる。

[解散]

第44条 この法人は、基本財産の滅失によるこの法人の目的である事業の成功の不能その他法令で定められた事由によって解散する。

[剰余金及び残余財産の処分等]

第45条 この法人は、剰余金の分配を行わない。

- 2 この法人が清算する場合において有する残余財産は、評議員会の決議を経て、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律第5条第17号に掲げる法人又は国若しくは地方公共団体に贈与するものとする。

第8章 公告の方法

[公告の方法]

第46条 この法人の公告は、電子公告により行う。

- 2 事故その他やむを得ない事由によって前項の電子公告をすることができない場合は、官報に掲載する方法による。

第9章 事務局

[設置等]

第47条 この法人の事務を処理するため、事務局を設置する。

- 2 事務局には、事務局長及び所要の職員を置く。
- 3 事務局長は、理事長が理事会の承認を得て任免する。
- 4 職員は、理事長が任免する。
- 5 事務局の組織及び運営に関し必要な事項は、理事長が制改廃する。

[備付け帳簿及び書類]

第48条 この法人は、法令及びこの定款で定めるところにより、主たる事務所に、次に掲げる帳簿及び書類を備え置き、かつ、保存しなければならない。

- (1) 定款
- (2) 評議員、理事及び監事の名簿
- (3) 認定、許可、認可等及び登記に関する書類
- (4) 評議員会及び理事会の議事に関する書類
- (5) 役員等の報酬規程
- (6) 事業計画書及び収支予算書

-
- (7) 第9条第1項各号の書類
 - (8) 監査報告
 - (9) その他法令で定める帳簿及び書類
- 2 前項各号の帳簿及び書類の閲覧については、法令の定めるところによる。

第10章 補則

(細 則)

第49条 この定款に定めるもののほか、この法人の運営に必要な事項は、理事会の承認を受けて理事長が別に定める。

附 則

- 1 この定款は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第121条第1項において読み替えて準用する同法第106条第1項に定める一般法人の設立の登記の日から施行する。
- 2 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律第121条第1項において読み替えて準用する同法第106条第1項に定める特例民法法人の解散の登記と一般法人の設立の登記を行ったときは、第7条の規定にかかわらず、解散の登記の日の前日を事業年度の末日とし、設立の登記の日を事業年度の開始日とする。
- 3 この法人の最初の理事長及び専務理事は、次に掲げる者とする。

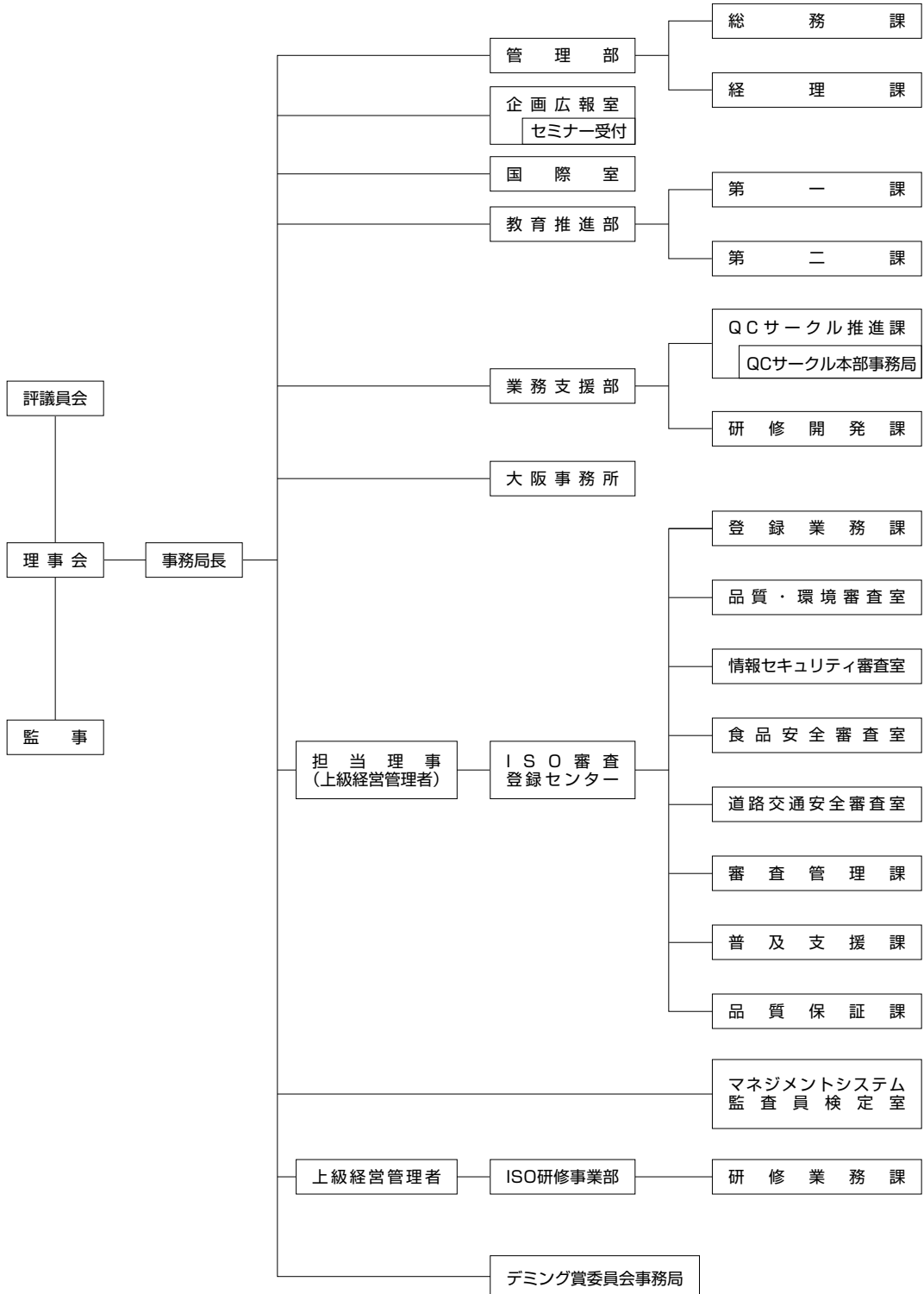
| | |
|------|-------|
| 理事長 | 蛇川 忠暉 |
| 専務理事 | 三田 征史 |
- 4 この法人の最初の常務理事は、次に掲げる者とする。

| | |
|------|--------|
| 常務理事 | 小大塚 一郎 |
|------|--------|

平成24年4月1日施行
平成26年11月1日改正

日科技連組織図

2016年1月1日現在



編集後記

今回、創立70周年にあたり、1996年刊行の『創立50年史』、2006年刊行の『創立60周年記念史 その後の10年』を継承するかたちで、『創立70周年記念史 2006年～2015年の日科技連』を編纂しました。

2006年からの10年は、デミング賞創設60年、QCサークル誕生50周年、石川馨先生生誕100年など、戦後復興を目指した時代に、高度経済成長を支えた「品質管理」を中核とした様々な活動が大きな節目を迎えました。当時の諸先輩方の想いに触れる機会となりました。

当財団においては、この間、一般財団法人への移行をはじめ、研修環境を整え、効率のよい事業運営と生産性の向上をめざし、約60年間おりました千駄ヶ谷・本部ビルから西新宿へ、大阪事務所は中央電気倶楽部から新たに新藤田ビルに移転しました。

70周年ロゴには、これからも「品質」を中核とした事業を展開し、産業界の発展に貢献していくという意味を込め“Qマーク”を使ったデザインにしました。

本記念史の刊行にあたっては、企画広報室が中心となり企画し、全部門の担当者が原稿の執筆にあたりました。

これからの更なる発展と飛躍のため、次の時代への新たな一歩とすべく役職員一同努力してまいります。

(羽根田真仁 記)

創立70周年記念史

2006年～2015年の日科技連

2016年1月1日発行（非売品）

発行 一般財団法人 日本科学技術連盟
理事長 佐々木 真一

Union of Japanese Scientists and Engineers (JUSE)

〒163-0704 東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル4階
TEL : 03-5990-5846 FAX : 03-3344-3022
URL <http://www.juse.or.jp>

編集 日本科学技術連盟 企画広報室
印刷 株式会社 金精社